
永遠の悪魔と魔法少女達の物語

sora

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の悪魔と魔法少女達の物語

【Nコード】

N6170T

【作者名】

s o r a

【あらすじ】

少年は地球の記憶を打ち込まれた。故に少年は一度全ての記憶を失った。しかし骸の戦士が少年を救い出し、新たに記憶を与えた。やがて少年は成長し、全てを知る。

プロローグ（前書き）

初めて書きます。正直不安一杯です。余り書く暇が無いので、不定期になると思います。

プロローグ

コツコツ。

無機質な廊下を歩く一人の男。この研究所には似合わない白いスーツ姿に同じく、白い帽子を被っている。それもそのはず、なんせ、男はこの研究所に所属する人間では無く???侵入者だからだ。

「さて、”あの子”は一体何所にいるのやら」

男はこの研究所に侵入した目的はある子供を救い出し欲しいという依頼だ。が思ったよりも情報が入らず、研究所の場所と簡単な見取り図しか入手出来なかった程だ。

「とりあえず虱潰しに探す他無いな」

その後、男はあちこち探し回った（もちろん、研究所の人間には見つからないように）が、めばしい場所には”あの子”はいなかった。

「不味いな。いざと言う時は”これ”を使うかもしれないな」

仕事で使わないのが俺のポリシーなんだがな、と付け加えて、”これ”を見た。

”これ”は黒いUSBメモリの形をしておりドクロの形で”S”と書かれていた。

「・・・・ん？」

あるドアの前に立つと、中からキーボードを打つ音がしてきた。しばらく聞いていると、

「・・・・いつまでいるの侵入者さん？開いているから入って来なよ」

「！」

男は驚くほか無かった。こういった侵入系の仕事もそれなりにやって、場数も踏んでいる。こんなにあっさりと気づかれるとは思わなかった。

男は意を決して中に入ると、

「こんにちは」

少年がいた。五歳くらいの子供が。

（この子は・・・！）

見間違える筈がない。何せ二年くらい前の写真通りだからだ。そう二年くらい前だ。

（どういう事だ。あまり成長しないのはわかるが、これは成長していない？）

「・・・で、あなた何しに来たの？」

「・・・まず、どうして俺が侵入者だとわかった？」

体の件は置いといて、ひとまず男は自分が気づかれた事を少年に聞いた。

「うーん。質問に質問を返されるのは好きでは無いんだけどなまあ教えてあげる」

座っていた椅子からよつと降りて部屋の中をぐるぐる歩き始めた少年を目に男は部屋を見渡した。

そこは壁にでかいモニターが埋められており、ほかにもたくさんの機器があった。その中には男が持っていたUSBメモリに酷似している物がたくさんあった。

（やはりこの子が）

「まずボクは絶対音感ってのを持っており、結構音に敏感なんだ。あなたがこころ辺を通る時違和感を感じたんだよ」

「違和感？」

「まず足音がならないように極力小さくしていた。ここの研究員はそんな事しないしね。それにここのドアの前でしばらく立ち止まっていたしね」

長年の経験が仇になるとは男は少し驚いた。

「さてボクの予測はこれまで。であなたは何しに来たの？」

「・・・おまえさんをここから救い出しにきた」

「？救う？何故？」

「！？」

まさかそう返されるとは思わなかったのか、男は驚いたが直ぐに平

静を取り戻した。

「・・・おまえさんここから出たくないのか？」

「んーどうだろ、良くわかんない」

「わからない？」

「うん。自分で何かをしたいとは思わないし、そもそも何がしたいのかわからないから」

（この子は・・・）

「あっでも一つだけある」

「・・・何だ？」

男は訪ねると迷い無くいった。

「ーーーーー星が見たい」

プロローグ もう一つの始まり（前書き）

ようやく投稿してもむちゃくちゃ短い。多めに見てください。
なんだかこの話をしたいなと思いききました。

プロローグ もう一つの始まり

「……のは……のは！」

雪が降る世界、真っ白な地面はとても神秘的で美しい。人の血が垂れていなければ。

「なのは！なのはしっかりしろ！なのは！」

紅いゴスリドレスを着た少女……ヴィータは胸元から血を流している少女……高町なのはに必至で呼びかけている。

「大丈夫……大丈夫だから」

対するなのはは意識が朦朧としているのか、うわ言のように大丈夫と言っている。

どうしてこうなった。ヴィータはこの状況になるまでを思い返していた。

管理局の任務の帰り道の事だった。任務も終わり久しぶりに会ったなのはと軽く話し合っていたヴィータは、妙な気配を感じた。歴戦のベルカの騎士としての長年の経験から何かいる。ヴィータはそう感じた。それをなのはに伝えようとした時、

グシャ

音が聞こえた。まるで肉を貫くような音。

ヴィータが音のした方を向くと、目を疑った。なのはがの胸に刃が突き刺さっているからだ。

それはなのはから刃を抜くと、なのははゆっくりと地面に倒れ込ん

だ。

それは蠍のような形をしているロボットだった。

「な・・・なのはあああ！」

ヴィータはなのはの名前を叫びながら、蠍型ロボットを自身の愛機・グラーフアイゼンで叩き潰し、なのはに駆け寄った。

ここで冒頭に戻る。

「医療班何やっているだよ・・・！早くしろよ！・・・こいつ死んじゃうよ！」

ヴィータが部隊の他の隊員に叫ぶが、他の隊員も、先ほどの同型の蠍型ロボットと相手しており、ヴィータ達の方へくる余裕がないのだ。

ガシヤツガシヤツ

機械音に気がつき辺りを見渡すと、蠍型ロボットが五体ほど囲んでいた。

普段のヴィータだったら直ぐに片がつく相手だが、なのはが重傷を負い、その影響でヴィータの思考回路も一部麻痺していた。

（くそ！せめてなのはだけでも！）

そう思い、なのはをかばうように抱きしめた。

だが、

どさ！

「・・・・・・？」

まるで機械が落ちたような音が聞こえ、その音がした方向を向くと、ヴィータは言葉を失った。

蠍型ロボットの一体の頭から上がない正確には、切り落とされてい

た。

そしてその後ろには人が立っていた。

全身真っ白で、頭に山型の触覚を持ち、さらに黒いローブを身に纏っている。

「・・・」

その者は、無言でさっき蠍型ロボットの頭を切り落としたであろうコンバット型ナイフを逆手に持ち、残りの蠍型ロボットに向かっていった。

「おっおい！」

ヴィータの声を無視し、その者は蠍型ロボットの鋭い一撃をかわし、コンバット型ナイフを一突きした。

さっさとナイフの抜き、後ろから迫ってきたロボットの攻撃を見ずによけてかわしてそのまま距離を取った。

「・・・何かつまらないね」

「・・・は？」

突然その者がつぶやいた。声は中性的で、男か女かいまいちわからない。

「あまりにも弱すぎる。これで終わらせよう」

そう言うのと、その者は左手をずっとロボット達に向けた。すると、

PRESSER
「空間圧殺」

バコン！

いきなりロボット達が見えない何かで押しつぶされた。

「なっ何だ?!」

ヴィータは訳もわからず困惑しているが、ロボット達は煙を上げて機能を停止していた。

その者はそれに目もくれず、まっすぐヴィータ達の元へ向かった。

「……誰だよおまえ」

自分達の直ぐ近くまで来たその者を睨みつけるヴィータ。

「……」

その者は黙って二人を見る。

「……来たか」

「えっ？」

その者は突然別の方向を向くと、ヴィータもつられてそちらを見る。他の部隊員達がロボットを倒し、こちらに向かってきた。

「じゃあね」

「あっおい！」

その者は、それを確認すると、二人に背を向けて、どこかに去ろうとした。すると、

「ま……待って」

なのはがその背に声をかけた。

「!?!?なのは大丈夫か?」

「……その子の言うとおりでよ。しゃべらない方がいい」
「……あなたの名前は?」

二人の言葉を見無視し、なのはは言葉を紡ぐ続ける。

その者ははあとため息をつきながらもなのはの問いに答えた。

「エターナル。仮面ライダーエターナルだ」

「……仮面ライダー……エターナル」

なのははその名前をを覚えるように繰り返していた。

「……またね……」

そう言うとエターナルは今度こそ背を向けると、ふっと消えた。

これが高町なのはとヴィータと仮面ライダーエターナルの最初の出会いである。

プロローグ もう一つの始まり（後書き）

いかがでしょうか？ ちなみにヒロインはなのはでもヴィータでもありません。お楽しみに

EPISODE 1 (前書き)

なっ何とか書けた・・・とりあえず毎週土曜日か日曜日投稿として
います。

EPISODE 1

あの日の事件、高町なのはは、大きな怪我を負った。医師からは二度と飛べないかもしれない。そう宣告されたのはだったが、再び飛びたい。そしてまたエターナルに会いたい。その思いを胸に、つらいリハビリを乗り越えて、ついに完全に復活した。

そして現在。

「ひっくひっく。お父さん、お姉ちゃん・・・どこ？」

火が燃え上がっているところ、一人の少女が泣いていた。

少女は姉と一緒に休暇を利用して父の所へ遊びに来ていた。しかしその途中、空港が大火事になり、少女は一人取り残されていた。

「いやだよ・・・誰か助けてよ・・・」

少女の頭上から女神像が根本から崩れて、落ちてきた。

少女はもうだめかと思い、目を瞑った。しかし・・・

「・・・・・・・・・・？」

いつまでたっても衝撃が来ないので恐る恐る目を開け、女神像の方に目を向けると、黒いローブを身に纏った白い仮面の者・・・仮面ライダーエターナルが女神像を両手で支えていた。

「・・・ねえ、悪いんだけど早くそこから退いてくれるかい？」

「えっ？」

「いやね？このまま投げ飛ばしてもいいんだけどさ、そうすると余

計な被害出そうだから、やめときたいんだ。だからねそこから退いて欲しいんだ」

「あっはい・・・」

少女は慌ててその場からずれるのをエターナルが確認すると、ゆっくりと女神像を地面に降ろした。

「さてと・・・どうしよっかな」

「・・・あっあの！」

頭上から声が聞こえ、エターナルはそちらに顔を向けた。するとそこには以前自分が助けた、少女・高町なのはがいた。

高町なのはは、八神はやての誘いで、旅行に来ていた矢先、空港が爆発。大災害に発展したと聞き、はやては現場の指揮、なのはとフエイトは救助活動をしていた。

なのはは取り残されている人間がいるかどうか探していると、女神像が崩れ、女の子が下敷きになりそうになっているのを見て、あわてて止めようとしたが、それよりも先に何者かが女神像を受け止めた。呆然とそれを見つめていると、支えている者と少女がなにやら話して、少女は横へとずれて、その者は女神像をゆっくりと、床に降ろすと、女神像に隠れて見えなかった姿を見ると、なのはは、驚いた。その者はずっと自分が探していた人・仮面ライダーエターナルだったから。

「・・・あっあの！」

「・・・高町なのはか・・・」

エターナルは静かに少女の名前を呟くと、なのははこちらに降りてきた。

「えっと・・・あのその・・・」

言葉にしたいけどうまく言い合わせられない。そんな感じだった。

「・・・・・・・・何？」

「あの！・・・あの時助けてくれてありがとう」

ずっと言いたかったこと、それがようやく、いえたのだ。

「・・・別にいいよ」

そんな二人をエターナルに助けられた少女ハ不思議そうに見ていた。

ガラガラ！

「！！」

崩落の音が聞こえエターナルとなのはが上を向くと、かなりの大きな瓦礫が落ちてきた。

「きゃあああ！」

「っ！」

少女は悲鳴を上げ、なのはは瓦礫を破壊しようと自身の愛機・・・レイジングハートを上に向けた。しかし、

SEVER
「空間切断」

右手を上げて、指をくいと動かすと、キーンと音がして、

ガラガラ！

瓦礫が見事に真つ二つになっており、三人をよけて、落ちてきた。そんなエターナルを見て、なのはは驚いた。

（いついまの一体何をしたの？ 魔力は感じなかった。レアスキル？）

「いつまで隠れているつもりだい？ さっさと出てきなよ」

「えっ？」

エターナルの言葉に困惑するなのは。この場に自分達以外いないはず。

「・・・気づいていたのか」

すると、どこからか異形の者が姿を現した。

「ひっ！」

「なっ！？」

少女は小さい悲鳴をあげ、なのはも驚きを隠せなかった。

なのはも今までいろいろな魔法生物を相手してきたが、こんな生物は見たことなかった。知らず知らず、なのははレイジングハートを握りしめていた。

そんな二人をかばうようにエターナルは前へと出た。

「まさかドーパントが関わっているとは、この火災の原因は君かい？」

「いや、確かにここで暴れてやろうと思ったが、先にここが爆発してな、俺はそれに便乗したに過ぎない」

「ふーん」

エターナルが異形の者・ドーパントにこの空港火災をやったかと聞くとドーパントは自分では無いと言う。それに対してエターナルはその答えにさして興味もわかなかった。

「まあそんな事はどうでもいい。それより貴様だ。エターナル」

「ん？ボクかい」

「ああ。本来おまえを誘き出すために、火災を発生させるつもりだったのだから」

「・・・と言うことは君は”組織”のメンバーかい？」

「ああ」

やや間があってエターナルが言葉を発した。

「・・・なるほどね。組織も随分と必死になってきたものだ」

少女となのははこの二人が何を言っているのかわからず、ただ困惑していた。

「ふん！命さえ無事ならばいいという命令だからな！」

言うやいなや、ドーパントは火炎弾をエターナルめがけて打ち込んできた。

少女の方は頭を抱えてしゃがみ込み、なのはは障壁を作ろうとしたがそれよりも先にエターナルは二人を抱き寄せ、ローブで二人を包み込み後ろにしゃがみ込んだ。

ドカーン！

大きな爆発音が聞こえて、三人がいた場所は煙がモクモクと立っていた。

「はっはっはっ！俺にかかればこんなも・ん」

高笑いしていたドーパントは、煙が晴れた場所を見て絶句した。何故ならば、

「ふむ、中々良い攻撃だ。しかしボクを倒すには不十分だ」

全くの無傷のエターナルが立っていたからだ。なのはと少女も怪我は無くエターナルを呆然と見ていた。

「ばっ馬鹿な！俺の攻撃を喰らって何で！？」

「やれやれ、エターナルの特徴を知らないのかい？それで良くボクと戦おうと思ったね？」

エターナルはあきれたように首を振った。

「くっ！ま・まだだ！まだこんなもんじゃねえ！」

「いや、もう終わ리と思って良い」

「えっ？」

気がついたらいつの間にかエターナルはドーパントの後ろに回り込んでいた。そして手にはコンバット型ナイフ・エターナルエッジがあった。

「いついつの間に」

「君が知る必要は無い」

ザシュ！

言うやいなやエターナルはエターナルエッジをドーパントに斬りつけた。

「ぐは！」

たまらずドーパントは後ろによろけるが、すぐさま体勢を立て直すが、

「どんどん行くよ」

「なっ！？」

なんとエターナルは再び、ドーパントの後ろに回り込んでいた。

「ばっ馬鹿な！」

ザシュ！ザシュ！

今度はエターナルは何も言わずにドーパントを二度斬りつけた。

「ぐは！」

そっからはワンサイドゲームだった。またドーパントの後ろに回り込み、再び斬りつける。その繰り返しだった。そんなやりとり何度かやった後、

「はあはあ・・・」
「・・・」

ドーパントは荒い息を吐いており、対するエターナルは息も乱れてないようだ。

「さてと・・・ここもやばそうだし、もう終わらせよう」

エターナルはそう言うと、腰に巻いてある赤いドライバーからメモリらしきものを抜き出し、エターナルエッジに差し込んだ。

『ETERNAL MAXIMUM DRIVE』

音声と共に軽快な音楽が流れ、エターナルエッジの刀身にエネルギーがどんどんたまってくる。

「クソがあああああああ！」

自棄になったのか、ドーパントは何も考えず、にエターナルに突っ込んできた。

「馬鹿だね」

そんなドーパントを見て、エターナルはエターナルエッジを構えた。

「うおおおおお！」

叫び声を上げながら殴りかかるドーパントにエターナルは、腰を低くし、殴りかかると同時に、

ザシュ！

ドーパントの腹を切りつけた。

「が、あつ」

「目には目を齒には齒を、悪には厳選たる裁きを」

「ぐあああああ！」

ドーパントは叫び声を上げ、爆発した。そして煙が晴れ、そこにいたのは、

「え．．．人間!？」

そう怪物だと思われていた者は人間の男だったのだ。

(．．．．は、なのは!)

(ふえフェイトちゃん?)

突然自分の親友から念話が来て、驚くのは。

(良かった．．．念話が通じないから心配したんだ)

(えっ?)

(たぶん通信を妨害する何かが働いていたんだと思う)

そんなやりとりをしていると、

ガラガラ!

「．．．．まずいな．．．ここも崩落が始まったな．．．．高町なのは」

「はっはい?」

エターナルに呼ばれて、振り返るなのは。

「とりあえずその子つれてってくれない？」

「えっ？」

「いやね？ボク、こいつを連れて行かないといけないんだ。だからその子をお願い」

そう言いながらエターナルは男を担いだ。

「じゃ」

「まっ待って！」

なのはは、エターナルを呼び止めた。そんななのはを見てエターナルは仮面の下で微笑した。

「また・・・後でね・・・」

「えっ？」

そう言うときエターナルは今度こそ消え去った。

ホテルの一室、空港での救出作業を終えた高町なのはとフィイト・T・ハラオウンに八神はやては自分の夢を語ると、二人は快く承諾してくれた。すると通信が入った。

「三人とも今大丈夫か？」

「クロノ君？」

かけてきたのはフェイトの兄、クロノ・ハラオウンだった。

「どうしたのクロノ？」

「実は、なのはが見た生物についてだ」

「えっ？何でクロノ君が知っているの？」

その件はまだクロノの方にはいつていないはずだ。なのにクロノは知っている。

「実は・・・その生物専門の組織から連絡があつてな。なのはが会つたと言う事を聞いたらしく、是非とも会いたいとの事だ」

「もしかして・・・エターナルさん!？」

「さあ・・・僕は良くわからないけどとにかく会いたいそうだ」

「それで・・・一体どこの組織なの？」

「・・・Re－C?DEと言う組織だ・・・」

EPISODE 1 (後書き)

どうでしょうか？戦闘シーンは正直な所、自分でもだめだと思います。どうか理解の方を。

自分はC？DE…BREAKERの中でも捜し者が好きです。絶対空間って本当無敵に近くと思うんですけどどうでしょう？

EPISODE 2 (前書き)

先週より早く書けました。今回と次回は説明話みたいな物です。

EPISODE 2

「それでクロノ、Re-C?DEって組織って何なの?私聞いたことないんだけど」

クロノに呼び出されて、管理局本局に来た三人の少女内、金髪を背中辺りまで伸ばした少女・・・フェイト・T・ハラウンが義兄にRe-C?DEについて聞いていた。

「・・・実を言うと、僕自身もRe-C?DEという組織については殆ど知らないだ」

「どういう事や?クロノ君が知らんというのは」

クロノの言葉に反応した、茶髪のボブサップ型の髪型の少女・・・八神はやてがクロノに聞いたかった。

「Re-C?DEは、僕自身つい最近知ったばかりなんだ。管理局に協力している組織で、メンバーは七、八人。そしてなのはが遭遇した例の生物の対処をしている。それぐらいかな、僕が知っているのは」

「情報が少ないな」

「まあな」

「ところでクロノ君、一体どこに向かっているの?私あんまりこっち来たこと無いんだけど」

三人の少女の最後の一人サイドポニーの少女・・・高町なのはがクロノに質問した。

今現在四人が歩いているところは、殆ど人が通らない場所だ。事実、殆ど人が見当たらない。

「…………Re-C? DEは情報を殆ど出さず、通信手段も画面越しだ。しかし今回君たちに面会を求め、さらにRe-C? DE側から人を寄越すと言ったんだ。あまり人目につきたく無いんだ」
「なるほど」

クロノの言葉から真意を理解した三人はそのまま黙ってクロノについて行った。

しばらく歩いていると、あるドアの前に立ち止まった。

「ここだ」

そう言うとクロノはノックした。

「…………誰だ?」

男の低い声がした。

「管理局提督クロノ・ハラオウンです」

「…………入れ」

「失礼します」

クロノ達が部屋に入ると、そこは応接室みたいな場所でソファに人が座っていた。その者は、ジャケットを着ており、フードですっぽりと顔を隠しているので、顔はわからない。先ほどの声からして男だろう。

「その三人が…………?」

「はい。高町なのはとフェイト・T・ハラオウンと八神はやてです」
「…………そうか」

（・・・なのはこの人がエターナル？）

（ううん。多分違うと思う。声とか口調が全然違うもん）
「・・・さて行くか」

おもむろに、男は立ち上がるとそう言った。

「そうですかではお願いします」

「え？」

クロノは理解しているようだが、三人娘はわかっていないようだ。

「これから彼がR e - C ? D Eの本拠地に連れてってくれるんだよ。
君たちだけね」

そんな三人にクロノは説明する。

「だって・・・クロノ君は行かんの？」

「・・・君たちだけって話だからね。僕の案内はここまで」

「・・・そろそろいいか？」

「ああ、すみません。お願いします」

「では・・・」

男はジャケットの中から赤いドライバーのような物を取り出し、腰に巻いた。

「それってエターナルさんのと同じ・・・！」

そう、男がつけたものはエターナルがつけている物と同じものだった。そんなのは無視し、さらに男は銀色のZと書かれているUSBメモリらしき物を取り出し、スイッチを起動した。

『ZONE』

男は右腰についている黒いスロットらしき所にメモリを挿入した。

『ZONE MAXIMUM DRIVE』

「では・・・行くぞ」

「ど・・・」

その言葉は続かなかった。次の瞬間男と三人は忽然と消え去ったのだ。

「・・・・・・・・無事に帰ってこいよ三人とも」

管理局の人間のほとんどが知らないReeC?DEの本拠地に行った三人を心配してつぶやくクロノ。その言葉に誰も答えなかった。この後クロノはReeC?DE側に三人もの知り合いがいたのを知るがまた別の話。

「・・・・・・・・ここに？」

三人と男は管理局の廊下では無いところに立っていた。何故ならばそこはどこまで行っても白い廊下で、管理局にこんな場所無いからだ。

「・・・・・・・・来ましたか」

後ろから声がした。三人が振り返ると青年が一人立っていた。褐色の肌にパーカーを着ておりフードを被っていてどこか氷のように冷たい雰囲気がある。

「・・・あいつは？」

「いつもの場所に」

「・・・ならこの娘達の案内を頼む。俺は”こいつ”を返しに行くのと同じでに連れてくる」

「・・・わかりました」

そう言うのと、男はどこかに歩いて行った。

「では・・・ついてきて」

「え、あっはい」

そう言われ三人は青年の後をついて行った。

「あの・・・お名前は？私は・・・」

「知っている。高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやてでしょ？」

なのはの言葉を遮り言う青年。考えて見れば自分達はRe-C？DEに呼ばれたのだから、知っているのは当然か。

「俺はRe-C？DE・・・04」

「いや、あの・・・お名前を・・・」

「後で教える」

「そっそうですか」

それから無言でしばらく白い無機質な廊下を歩く。その途中何度か少し揺れを感じた。

「・・・あの」

「・・・何？」

「ここって・・・もしかして乗り物か何かですか？」

フェイトがためらいがちに青年に質問した。Re-Code:04すると青年は歩くのをやめて、振り返り少し驚いた風にフェイトを見た。

「驚いた・・・よくわかったな。確かにここはRe-Codeが所有する航空艦の中だ」

「やっぱり。これなんだか動いている感じがしているのだもの」

「まあ。それも含めて後で説明する」

そう言う青年は再び歩き始めた。そうしてしばらく歩くと、行き止まりになりドアがあった。青年は何も声をかけずドアを開けた。そこは会議室みたいところで部屋の真ん中に大きな機械的なテーブルが置いてあり、左右に椅子が三つずつあった。さらに上座にもう一つ椅子がある。現在そこには三人座っている。その内二人は、ローブを身に纏ってフードを被っているので顔はわからない。最後の一人は、ピンク色の髪を腰あたりまでのぼしており、歳はなのは達と変わらないだろう。さらに顔を美少女その者だ。

「あれ〜ゆっきーが連れてきたの？ ヴィンは〜？」

「ZONEのメモリを彼に返しに行きました」

「なるほど〜じゃあ、王様連れてくるんだね〜？」

「そうなりますね」

「へ〜。あっあなたたちが例の〜こっちに座って」

ピンク色の髪の女性はテーブルについでいるコントロールパネルらしき物を操作した。すると、地面が開き、椅子が三つ出てきた。

「さあさあ。座って〜」

「はあ」

三人はおそろおそろ、椅子に座った。

「よろしくねー私は守護神のR e - C ? D E :: 0 5 エミリオンだよ」

「エミリオン、あの人の許可無く本名を明かさない」

「いいじゃんーこの子達大丈夫でしょー？」

「はあ」

どうやらこの青年はピンク色の髪の少女・・・エミリオンの事で苦勞しているようだ。エミリオンは我知らずといった感じで三人に話しかける。

「ねえねえー三人はどんな仕事しているのー彼氏とかいるー？」

「えっと」

三人が返答に困っていると、ドアが開いて人が入ってきた。

「エミリオン。お客様を困らせないの」

「えー王様、そんなつもり無いけど」

入ってきたのは二人の人間だ。一人は先ほどの男だろうか。今はジャケットを脱いでいた。髪の毛は逆立っており、顔は強面の青年だ。最大の特徴は左顔に癍痕がついていることだ。

そしてもう一人はローブを先の二人と同じく被っていた。背丈はなのは達と変わらないか。ローブの者は上座の席に座り、癍痕の青年も椅子に座った。

「さて改めまして、R e - C ? D E によるこそ。高町なのは、フェ

イト・T・ハラオウン、八神やはて」

「あっはい。初めまして。えっと・・・」

なのはが、名前がわからず、困惑していると、上座から一番近い席のなのは達から見て左側に座っているローブを被っている者がぶるぶる震えて、いきなり席を立った。

「ああ、もうじれったい！ねえこれもう脱いでいい？」

「えっこの声・・・」

「まっまさか」

「うそやろ・・・」

なのは達が声の主に心当たりがあり、困惑していると、

「うんまあ良いんじゃない？ていうか僕の声聞いてもわからないんじゃないしょうがないし」

「そっそうだね」

そう言うとおもむろにローブを被っている三人はローブを脱ぎ去った。そしてその者達の名前をなのは達は順番に言った。

「れっ零君？」

「アリサ・・・？」

「すずかちゃん？」

「やあ」

「全く、気付くの遅いわよ」

「あっあはははは」

驚く三人に銀髪にハーフな顔立ち、眼鏡をかけている少年・・・夢埜零は挨拶をし、金髪の少女・・・アリサ・バニングスはため

息をつき、紫色の髪の少女・・・月村すずかは苦笑していた。
夢埜零、アリサ・バニングス、月村すずか。三人ともなのは達にと
って小学校からの親友兼幼なじみである。

「落ち着いた？」

『すっすみません』

突然に三人の幼なじみがいた混乱したなのは達だがアリサの鶴の一
声で何とか落ち着いた。

「全く・・・」

「まあまあ」

アリサはため息をつき、そんなアリサをすずかはなだめていた。

「でも何で零君がここにいるの？」

「そや。一体どうなっておるの？」

「それについてもこれから説明するのさ。さてとすーちゃん」

「はい」

零が眼鏡の奥から真剣な目を送るとすずかはエミリオンと同じく、
テーブルについているコントロールパネルを操作した。すると、部
屋が薄暗くなりテーブルが発光し始め、モニターが空中に出現した。
そのモニターの中には癍痕の青年やエターナルが使っていたUSB
メモリににている化石みたいな形をしている物が映っていた。

「これって・・・」

「これはガイアメモリ。地球上のあらゆる記憶を宿しているんだ。
現在これらが大量にミッドチルダにばらまかれているんだ。もっと

も、最近は地球以外の星の記憶も宿り初めているみたいだけど・・・」

「そして、これを人体に挿入すると超人的なパワーを宿したドーパントになるんです。なのはちゃんが遭遇したのは、『マグマ』の記憶を宿した、マグマドーパントなの」

「あれが・・・」

「そんなガイアメモリ犯罪に対応しているのが僕たちR e - C ? D Eなんだ」

「そうなんだ・・・でも何で零君達が？」

なのはが疑問に持つ。それもそうだろう。何せ今までそんな事は聞いた事が無いのだから。そんななのはに零は苦笑する。

「話せば少し長くなるんだけどね・・・今は少し省かせてもらおうよ。僕の義父さんの仕事知っているよね？」

「うん。荘吉さんの仕事やろ？確か・・・探偵家業しているんやったよな」

夢埜荘吉。零の義父で、ハードボイルドな渋いオッサンと言うのが正しい表現だろう。探偵家業と言っても殺人現場に赴き、捜査するわけでも無く、依頼人の願いを聞き届け、依頼を完遂するのが荘吉の仕事だ。零には訳あって、両親がいない。そんな零の本当の両親の知り合いの荘吉が零を引き取ったと、なのは達は聞いていた。

「義父さん何だけど・・・実はガイアメモリ事件の第一人者なんだ」

「え!？」

「でも荘吉さんってミッドに来たこと・・・」

「元々ガイアメモリは地球で作られていたんだ。そして僕たちは、

地球のガイアメモリ製造工場を完全に破壊したんだ」

「けど・・・」

「そう。連中はどうやらミッドチルダにいる犯罪者達と連絡を取り合っていて、僕たちが破壊していたときにはすでにデータやらを持って逃げ去った後だったんだ」

「そんな・・・」

「それから、地球にはまだガイアメモリが残っていたから義父さんはそれに対処。僕はすーちゃんはアーちゃんと一緒にミッドで、ガイアメモリ犯罪の対応。管理局を交渉。そして徐々に仲間を増やして行き、Re-C? DEが誕生したんだ」

「へーでも何でアリサとすずかはRe-C? DEに？」

「私達、以前ガイアメモリ事件に巻き込まれて、」

「それを零に助けてもらって事情を聞いて、手伝っているわけ」

「そうだったやんか・・・けど言ってくればうちらも手伝ったのに」

そうそうとはやての言葉にうなずくのはとフェイト。

「ごめんね。まだあの頃は魔法と言う物は知らなくて、それに”組織”は秘密を知った者に何をするかわからないし」

「あの・・・零君、”組織”って？」

「ガイアメモリを製造していて、ミッドや地球にばらまいた奴ら・・・”エデン”と言う組織だ」

EPISODE 2 (後書き)

いかがでしょうか？仮面ライダーWでのミュージアムをC？DE..
BREAKERのエデンに
してみました。Re-C？DEと敵対していますし。

なのは達のデバイスの声が無いのは多めに見てください。人物が多
すぎると大変なので・・・

試験勉強をそろそろ始めないといけなくなるのでもしかしたら更新
が遅くなるかもしれません

EPISODE 3 (前書き)

なんとか書けました。内容が自分でも書いて行く内よく分からなくなってきました。

EPISODE 3

「エデン……?」

「そっ。奴らガイアメモリを使って、この世にエデン^{楽園}を作ろうとしているらしい」

その楽園がなんなのかはわからないけど、と零は言った。

「そうなんか……あれ?なあ零君」

「何だいはーちゃん?」

「零君は何年くらい前からミッドで活動していたんや?」

「え? うーん……大体、小学六年の頃からかな」

「そうなんか……」

「どうしたの、はやてちゃん?」

「いやな、そんぐらい前から活動していたんやら、噂の一つや二つあってもおかしくないと思ってな」

「あっ」

「確かに……」

ああと零はつぶやき、言った。

「そりゃ僕たちが秘密裏に処理しているからだよ。そして、管理局に頼んで不自然に見られないように情報統制してもらったりしているんだ」

「なっ……」

三人は哑然とした。何せそんな事ができるのは管理局でもトップに

位置する者だからだ。

「さて、それは今は置いておくよ。ドーパントの事についてももう少し詳しく説明するよ」

零は、すずかに合図すると再びモニターにいろいろなドーパントが現れた。

「さてと、さっきも説明したけどドーパントは様々な星の記憶を宿している。そのためドーパントの種類は多種多様。色々いる。加えて、ドーパントは基本的に魔法が殆ど効かない」

「えっ!？」

なのはが驚きの声を上げる。はやてやフェイトも同じ気持ちだろう。何せ管理局は拳銃やミサイルと言った、魔法を使わない兵器を禁止し、魔法を使っている。その魔法が効かないと言うならば驚く他無い。

「地球で製造されたいた頃は、おそらくそんな事は無かったんだろうけど、どうもミッドチルダで製造されるようになってから機能がアップしているようなんだ」

「そうな・・・あれ、でもじゃあ零君達はどうやって戦っているの?」

そう言うなのはに零はクスリと笑う。

「ふっふっ、目には目を歯には歯をガイアメモリにはガイアメモリをとってね」

そう言うとき零は懐からあるものを取り出した。それは・・・

「れっ零、それ・・・ガイアメモリ？」

ガイアメモリだった。それは、モニターに映っていたガイアメモリよりも綺麗なフォルムをしており、端子は青色しているEと書かれたメモリだった。

「そうだよ・・・ああでも安心してこれは純正されたメモリで、これ使ってもドーパントにはそう簡単にはなれないから」

「そう簡単に・・・？」

「まあそれは置いて、ドーパントに勝つためには同じガイアメモリを使わないといけないんだ。そして僕たちは専用のドライバーを介してメモリを使っている」

「なるほど・・・あっそうだ零君」

「何？ なーちゃん」

「あのエターナルさんって一体誰？」

「ん」

「え？」

なのはが質問すると、零は自分を指さす。なのはは意味がわからず、聞き返すとアリサはこめかみをぴくぴくさせ、すずかはそれをなだめている。

はあと零はため息をつき、先ほど取り出したメモリのスイッチを押す。

『ETERNAL』

「えっ？」

その音声になのはは聞き覚えがあった。先日聞いた音声だからだ。

「もっもしかして……」

「零が……」

「……仮面ライダーエターナル？」

「うん」

『えっええええええええええ！？』

二度目の絶叫がR e - C ? D Eの本拠地で響き渡った。

「全く、驚きすぎよあなたたち」

『すっすみません』

アリサが再び三人を黙らせて説教していた。現在三人は椅子の上で正座中である。

「アリサちゃんその辺にしろってあげなよ」

さすがが、アリサを止めようとしたが、

「だめよ。三人とももっとしっかりさせないといけないから説教続行」

『うへ！』

「まあまあ、アーちゃん。まだ説明しないといけない事が多々あるからその辺にしろって」

「全く……零に感謝しなさい」

『はい！！』

じろっとアリサに睨まれて、背筋をピンとするなのは達。

「まず僕があの時なーちゃんのいた異世界にいた理由は何かなーちゃんの体が非常に危なそうだったからついに行ったんだ」

「でもどうやってや？その頃まだ、零君まだミッドの方面で活動していなかったんやろ？」

「ああ。これを使ったんだ」

そう言うとき零はZONEと書かれた銀のメモリを出した。

「それって……」

「私達がここに来たときに使ったメモリ……！」

そうさつき癪痕の男が三人をここに連れてきたとき使ったガイアメモリだった。

「こいつはゾーンメモリ。こいつは任意の対象物を自由に他の場所に転送できるメモリなんだ」

「そっか……！それを使って私達をここに連れて行ったんだ」

「うん。そして先日あの空港火災の場所にいたのは、ドーパントの反応があったからあそこに行ったんだ」

「なるほど」

三人は納得したようにうなずいた。

「さてと……とりあえずガイアメモリに関してはこんな感じかな？後は”エデン”に関してだ」

「ねえ零……こう言っちゃあ何なんだけど……」

「ん？何？」

「”エデン”って組織本当に存在するの？」

「……どういう意味だい？」

「あの私、執務官やっっているいろんな犯罪組織の名前耳にしているんだけど、”エデン”なんて組織聞いた事無いんだ」

零に質問するフェイト。

フェイトは執務官と言う、主に事件の捜査、犯罪者の捕縛と言う仕事をしており、そのため色々な犯罪組織の名前を知っている。にも関わらず、フェイトは”エデン”と言う組織を知らないと言う。疑問に持つのは当然だろう。

そんなフェイトの疑問に零では無くすずかが答えた。

「えっとね・・・たぶんフェイトちゃんが知らなくても無理ないと思うよ」

「えっどういう事？」

「”エデン”は組織に関して殆ど情報が無いの。地球で活躍していた頃よりも」

「そうなの？」

「うん。”エデン”と言う組織の存在を知っているのはここにいるメンバーとRe—C？DEを支援している人だけなの」

「そっそれだけ？」

「うん。あつでも裏社会のかなり深い所まで言っている人はもしかしたら知っているかもしれない」

「まあ、すーちゃんが言ったように”エデン”は中々尻尾が掴めないだ。おかげでミッドではらまかれているガイアメモリの対応だけで精一杯なんだ」

やれやれと肩をすくめて首を振る零。そんな零に今まで黙っていたエミリオンが言葉を発した。

「でもでもー昨日捕まえたあの男から情報引き出せれば、結構良いプラスになるんじゃない？」

「そうだね・・・ネバールどうなんだい？」

零は褐色肌の青年……ネバールに聞いた。

「一応、吐いてはいますがこれと言ってめぼしい情報はありませんね」

「捨て駒……と言う訳か」

「おそろくは」

「そうか……」

「しかし……」

「ん？」

ネバールはいったん言葉を切り、零は目をネバールに向けた。

「”エデン”の現在の幹部の人数はわかりました」

「ホントかい！？それは大きな進歩だ」

零は本当にうれしそうで声が弾んでいる。

「それで、現在の”エデン”のメンバーは何名だい？」

「現在は四人。やはり地球で倒した数の分だけ補充していますね」

「なるほどね……使っているメモリはわかった？」

「そこまでは……」

「なるほど……まあそれだけでも良い情報だね」

そう言うとき零は何かを考え込む仕草をし始めた。

「……零？どうしたの？」

「ん？いや何でも無いよ」

零が考え込んでいるのを見てアリサが声をかけたが、零は何でも無

いと答えた。

ふと視線に気がつき、その方向に向いてみるとなのはがじっと零を見つめていた。

「……………」

「……………何だい？」

「ねえ零君何で、言ってくれなかったの？」

「えっ？」

「何で、言ってくれなかったの？言ってくればいくらでも手伝ってあげたのに」

なのはは少し涙目になって零を見ていた。

「……………」エデン”は、自分達の存在を知った者の存在を許さない。知ったら殺されるか、存在しない者になるか二択だ」

「存在しない者って……………」

「そのままの意味だよ。全ての個人情報抹殺し、死んでも墓を立てることも許されない」

「そんな……………」

「あの時……………」エデン”の事は全然情報が今よりも無くて、もしかしたら”エデン”に君たちが殺されたかもしれないんだ」

「……………」

三人は黙りこくってしまった。やがて……………なのはが口を開いた。

「なら……………」何でアリサちゃんとすずかちゃん良かったの？」

「本当は二人にも隠し通すつもりだったんだ……………」けど二人の家の影響でね……………」ばれちゃって」

アリサとすずかの家は、世間一般で言う裕福な家庭に位置する。

「それに二人の家の影響で”エデン”も二人には手を出せなかったんだ」

それを聞くと三人は押し黙った。

「わかってなのはちゃん。私達も三人に黙っているのは結構つらかったんだ」

「それでも皆を巻き込みたくなかったのよ」

「ただ今になって話したのは、君たちに隠し通せなかったと思った事、そしてなーちゃん」

「えっ」

零に呼ばれて顔を上げたなのは。

「なーちゃんがずっとエターナルを捜している僕と聞いて、もしかしたらなーちゃんの身に余計な危険が舞い降りるじゃ無いかなと思っ
てね」

「零君……」

「ごめんね三人とも隠している」

三人はしばらく顔を伏せていたがやがて顔を上げると三人とも笑顔だった。

「大丈夫ちゃんと話してくれたし。私達も魔法の事隠していたから
これでおあいこ」

「そうだね……少し私達より長く隠していたけど……」

「それでも話くれたからオッケーや」

三人は口々に許すと言った。

「三人ともありがとう」

その後少し話した後、三人に、R e - C ? D E の航空艦を見る許可をもらい、女性陣は部屋を出て行き、零とネバールと癡痕の青年が残った。

癡痕の青年が零におもむろに訪ねた。

「それで……エターナルメモリの完成度は？」

「……まだまだ40パーセントかな？前回の戦闘は、あんまりデータがとれなかったからね」

先ほどとは打って変わって零は、どこか冷たさを持った表情で手に持ったエターナルメモリを見つめていた。

「しかし……あの男、本当に零様をお連れするように言われたのでしょうか。あまり実力はなさそうでしたけど」

ネバールが零に質問した。

事実あの男の実力ならば零が本気を出せば、直ぐに片がついただろう。そうしなかったのは、あの状況で本気を出せばさらに空港が崩れる可能性があったためだ。

「おそらく、”エデン”の方も僕を連れ戻すのは良ければと言う感じだろう。本当の目的はエターナルメモリがどれほど完成しているか見たかったのだろうよ」

「なるほどな……それでこれからどう動く？」

「別に、今まで通りドーパントが出てきたら叩く。それだけ」

「……それでよろしいので？」

「……地球とは違って、ミッドチルダはあまりにも情報流が違いすぎる。下手に動いたらこちらがやられる」

「なるほどな。やはり計画は年単位か？」

癡痕の青年はため息をつきながら零に聞いた。

「おや、癡痕の R e - C ? D E … ? 3 破壊神は直ぐにでも破壊した
いと？」

「そうは言っていない。それに待つことも重要な事だ」

ネバールは癡痕の青年に問うが、癡痕の青年は違うと言う。

「まあ、とにかく今は情報を待つだけかな。のんびり行こう」

そう言うとき零は目を閉じながら眼鏡を外しテーブルの上に置いた。
そして零が目を開けると、いつもの目の色では無く、金銀のオッド
アイとなっていた。

「……この間見たよりも色が少し濃くなっているな。遺伝子コ
ードが活発になり始めているのでは無いか？」

「そうなの？ うーんこの眼鏡だとそろそろ隠し通せなくなってきた
かな？」

零は眼鏡を見ながら呟いた。実はこの眼鏡度が入っていないのである。

「……いつも思いますが、それは掛ける意味があまりで？」

「ネバール、連中はこの目を頼りに僕を捜しているだよ。ならば目

を隠すのは当たり前だろ？」

「なるほど・・・」

「では、現状維持で良いね？」 「ええ」

「異論は無い」

こうして永遠の悪魔と魔法少女達の始まりの出会いは終わり、新たな物語が紡がれ始める。そのとき永遠の悪魔は何を思うか・・・

EPISODE 3 (後書き)

いかがでしょう。来週は投稿出来ないと思います。テストが終わり次第投稿します。

EPISODE 4 (前書き)

試験中に書いていました。何やってんのかと思いの皆様・・・本当
なにやってんだろ自分。

EPISODE 4

「本当かい、それは？」

なのは達とReeC?DEの会合から四年。零達は、これといった進展も無くガイアメモリ犯罪の対処をしていた。そんな中ある人物からの情報に零は耳を疑った。

「まさか、”エデン”が”レリック”を狙っているなんて……」

レリック

時空管理局が回収、管理している古代遺失物ロストログアの一種で、外見はただの赤い結晶だが巨大な魔力を秘めた危険度が高いロストログアである。

「……いよいよ”エデン”も魔法関連に本格的に乗り出してきたのか？それともエネルギーを集めている……？」

指を組んで思考の海に入り込む零。そんな時自室のドアが開き、誰かが入ってきた。

「零、仕事だ」

「ん……」

入ってきたのは癡痕の青年だった。そのまま零が座っている椅子の近くに行き、開かれているモニターを見た。

「奴からの情報か？」

「うん。現在はーちゃん達の部隊が追いかけているロストログアを”エデン”が狙っているんだって」

「何？・・・なるほどだからか」

「？何がさ」

「いや、仕事の話だ。ドーパントが出現した」

「どこ？」

一端思考を中止し、癪痕の青年に聞く零。

「場所はミッドチルダ北部の山脈に連なる線路の上を走っているリニアレール」

「・・・はい？」

思わず聞き返す零。

「いやいや・・・なんでそんな所にドーパントが出るのさ。ふつうドーパントはそんな所に出てこないだろ？」

通常ドーパント達は己の私利私欲のため殆どが人がいる町中で出現する。なのでそんな人里離れた場所にドーパントが出現するとは思えなかった。

「さっき自分で言っただろ？」

「・・・レリックがあっただの？」

零は少なからず驚いていた。まさかこんなに早く”エデン”が動き出すとは思わなかったからだ。

「さらに、もう一つ伝えることがある」

「・・・何か嫌な予感しかし無いんだけど」

少し嫌そうな顔をしている零にやりと笑いかけると癡痕の青年は
こう言い放った。

「現在、そのリニアレールでは機動六課がレリック回収任務に当た
っている」

癡痕の青年の言葉に思わずうめく零。

機動六課。零の幼なじみの一人、八神はやてが設立した新部隊で主
にレリックの回収を任務にしている部隊である。他にも零の幼なじ
み高町なのは、フェイト・T・ハラOWNもその部隊に所属してい
る。

「はあ、めんどくさい事になったね・・・すーちゃん達は？」

「月村ならエミリオンとバニングスと一緒に買い物に出かけた」

「・・・ネバールは？」

「あいつならドライブに行った」

つまり現在R e e C ? D E本部にいるメンバーは零とこの癡痕の青
年の二人だけとなる。

「・・・何で・・・こんな時に誰もいないんだ・・・！」

「おまえが行っていいよ言ったんだろ」

再びうめく零に癡痕の青年はあきれたように言った。言葉通り零が
四人に対して休暇を出したのだ。

「はあ。まあいいや・・・でドーパントは何体？」

「二体だそうだ」

「そう」

零は立ち上がると、椅子に掛けてあった灰色のロングコートを羽織り、フードを目深く被った。

「おまえが出るのか？俺一人で十分だと思うが……」

「最近本部から出てないし、たまには運動こいしないかね」

そう言うとき零は扉付近まで近づき、癡痕の青年の方を振り返った。

「じゃ行こう。ヴェント」

癡痕の青年……ヴェントに零がそう言うときヴェントはふっと笑った。

「心得た。我らが王よ」

八神はやては焦っていた。機動六課の最初の任務、レリック回収任務は新人達の手によって、リニアレールにあるレリックを無事に回収した。途中新型ガジェットドローンも破壊し、任務完了と思った矢先新たにアラームが鳴ったのだ。

「なんや！？何がおこったんや！？」

するとロングアーチの一人が驚愕の報告をした。

「謎の生物がリニアレールのスターズ及びライティングの所に出現！映像出します！」

するとモニターには二体の生物が映った。その生物を見てはやては

驚いた。

「ドーパント・・・！」

「知っているのですか部隊長？」

「いや・・・」

とか言いつつはやては焦っていた。まさかドーパントが出現するとは思わなかったからだ。ドーパントは魔法で倒せない。

（まずい！なのはちゃん達ならまだしも今の新人達で危ない！どうすれば・・・）

そんな事を考えているとはやてのデスクにメッセージが届いた。こんな緊急事態にと思いつつ題名が「はーちゃんへ」と書かれていた。自分の事を”はーちゃん”と呼ぶのは一人だけで、今もつとも連絡が取りたかった人物なので急いでメールを開いた。内容を読んでいくうちにはやてはにやりと笑顔を見せた。

「八神部隊長・・・？」

そんなはやてを不審に思ったのかロングアーチの一人がはやての話掛けてきた。

「大丈夫や・・・最強の助っ人が新人達を助けに行って来れた・・・！」

ティアナ・ランスターは困惑していた。今同僚で親友の青い髪の少女・・・スバル・ナカジマと任務をしていた。任務の内容はレリックの回収。そして無事にレリックを回収して任務終了と思った矢

先、何者かがリニアレールの屋根を貫いて侵入してきたのだ。

最初はガジェットかと思ったが、それは異形の怪物————エ
レファント・ドーパントだった。

「それはレリックだな？」

「！……あなた何者ですか」

目の前の怪物がしゃべれるとは思わず驚くが直ぐに気を引き締めた。

（ティア、ティアこいつ一体何？私見たこと無いんだけど）

（うっさいスバル！私だって無いわよ……でもたぶんこいつ敵だ）

相棒と念話をしながら、ティアナは現状の確認をしていた。現在ここにいるのは自分とスバルだけ。隊長のなのは達は未だ空で戦闘中。

「そのレリックを渡してもらおう。我らが”エデン”のためにも”エデン”？」

聞き覚えのない組織の名前に聞き返すティアナだが、エレファント・ドーパントはその言葉を無視し、ゆっくりとだが、重みがある歩きをしながらこちらに歩き始めた。

「っ！！スバル！」

「おう！はああああ！」

一瞬で自分の言いたいことを理解したスバル^{相棒}は履いているローラーシューズを回しながら、リボルバーナックルがついている右手を打ち込もうとした。

そしてティアナも愛機の双銃型デバイス・・・クロスミラージュから魔力弾をエレファント・ドーパントに撃ち込んだ。しかし、さほど効いていないのかエレファント・ドーパントは対して気にもせず、そのまま歩いていた。

「（やはり防御型！私の弾丸じゃ・・・けど）スバル！」
「おう！ぜあああああ！」

スバルがエレファント・ドーパントの懐に入り込み、右手で思いっきりぶち抜いた。しかし、

「効かな・・・」
「えっ!？」
「嘘!？」

スバルの渾身の一撃にエレファント・ドーパントはその場から一歩も動かず、腹で受け止めていた。

「フン！魔導士が我々に勝てるわけ無からう！」
「くっ!」

スバルは急いで下がろうとするが、
「逃がすか!」
「!!!」

逃げようとするスバルをエレファント・ドーパントは自分の鼻でつかみ取り、そのまま床に叩きつけた。

バコン!!

「ぐは!!」

轟音と共に床に叩きつけられたスバル。あまりのパワーに床に体がめり込んでいた。

「スバル!!」

ティアナは何とかスバルを助け出そうとするがエレファント・ドーパントはそれよりも早く鼻をほどき、未だダメージが抜けなくて身動きが取れないスバルに拳を振りかざした。

「まずは貴様から死ね!!」

「スバル!!」

エレファント・ドーパントの拳がスバルに当たろうとした瞬間、

「くうへき空壁」

ドカン!!

「何!?!」

「えっ・・・?」

スバルに当たる筈だった拳は、スバルの目の前で見えない何かに遮られて止まっていた。

「ほう、今回は重量タイプ・・・姿形から見ると象——————エレファントか」

通路の奥から現れたのは携帯型酒瓶で酒を飲んでいるヴェントだった。

「その頬の瘢痕、貴様 Re—C? DE03 《瘢痕の破壊神》か!」
「ほう、初対面の癖に俺の二つ名を知っているか。少し素顔を見せすぎたか……」

「くっくっ何故貴様がここにいるのかなど、どうでも良い。貴様の首を組織に献上すれば俺の昇進は間違い無い」

「この俺を斃^{たお}す……か。やってみるか?」

そう言うのとヴェントは上着の懷からロストドライバーを取り出し、腰に装着した。そして緑色のCと書かれたガイアメモリを取り出した。

『CYCLONE』

サイクロンメモリを起動させロストドライバーの右側のスロットに挿入、そのまま右に展開した。

「変身」

『CYCLONE』

すると、風がヴェントを包み込み、風がやんだ時にはヴェントは全身を緑色の体赤い複眼を持つ疾風の戦士となっていた。

「貴様は……!」

「仮面ライダー……サイクロン」

今、疾風の力を持つ破壊神が降り立った。

一方、ティアナ達の反対側の車両にいるエリオ・モンディアルは自分の同僚のキャロ・ル・ルシエの使役竜、フリードリヒの上でティアナと同じく困惑していた。新型ガジェットを破壊し、勝利の喜びをキャロと浸っていたところ、突然リニアレールの中からエネルギー弾が打ち込まれてきてよけると、リニアレールの屋根をぶち抜いて、異形の蠍の怪物————スコープオン・ドーパントが現れた。

「チッ、こっちは外れでガキが二人だけか。つまんねーの」

そう言いながらスコープオン・ドーパントは、二人の方をじろりと見る。

キャロは怯え、フリードはグルルルとうなり、エリオはフリードから降り自身の愛機の銃型デバイス……ストラダーを構えた。

「何だ？おまえ達が俺とやるってのか？まあいい、あっちが終わるまでの暇つぶしにはなるだろう」

スコープオン・ドーパントは自身の背中にある毒針をエリオ達に向けて、エリオ達の方に歩き始めた。ひっと短い悲鳴を上げるキャロを守ろうと、ストラダーを握りしめるエリオ。

「駄目じゃないか、そんな小さな子怖がらせちゃったら」
「えっ？」

「何？」

三人が声がした方向を向くと、そこには灰色のコートを目深く被っていて素顔がわからない零がいた。

「てめ……！一体どっからわいて出た」

スコピオン・ドーパントはわめくように零に言い放った。エリオ達も同じ気持ちだろう。何せ魔力も感じず、いきなりその場に気がついたらいたのだから。

「うーん、企業秘密」

「なっ……おまえふざけているのか！」

スコピオン・ドーパントは怒鳴りながら毒針を数発、零に向けて撃ち放った。しかし、

「遅いよ」

「なっ！？」

気がつくとも零はエリオ達の方にいた。

「あっあなた一体？」

「ん？ああ、大丈夫大丈夫。僕は君たちの味方さ。ここは僕に任せてくれない？」

「えっ？」

零は数歩歩くと、コートの中からロストドライバーを取り出した。そして、コートのポケットからエターナルメモリを取り出した。

腰にロストドライバーを巻き、

『ETERNAL』

エタールメモリを起動させ、スロットに挿入した。すると黄色い波動がメモリを中心に発生し始めた。

「変身」

『ETERNAL』

そしてスロットを右側に展開すると、風が吹き白い欠片が零の姿を覆っていく。全身白い姿に、Eを横に倒したような触覚、無限のマークを模した目。さらに胸、右腕、左腿に合計二十五個のマキシムスロット。両腕には青い炎が描かれている。そして最後に黒いローブを身に纏っている。

「デメーは……！」

「仮面ライダー……エタール」

EPISODE 4 (後書き)

次回は戦闘場面がメインになるとと思いますが、あまり期待せずお待ちください。

これからまた忙しくなるかもしれませんが何とか毎週投稿を目指します。

後以前書いたアンケート一応まだやっているので活動報告の方見てください。

EPISODE 5 (前書き)

何か思ったより早く書けました。感想とか、待っているので書いてくれるとうれしいです。

EPISODE 5

「仮面ライダー……」

「サイクロン？」

まるで特撮ヒーローみたいな名前に思わず目を丸くするティアナとスバル。

「フン！何が仮面ライダーだ！貴様など俺がつぶしてやる」

「吠えるな弱く見えるぞ」

ふっと笑うサイクロン。

「けっ、いってろおおおおお！」

吠えながらエレファント・ドーパントはサイクロンに突っ込んできた。対してサイクロンはその場で構えずに突っ立っているままだ。

「ちょ、危ない！」

ティアナは何もしようとしないサイクロンに思わず声を上げた。しかし、

ヒュヨ！

「ぐは！」

「えっ！」

「何？」

いきなりエレファント・ドーパントが何かに斬りつけられたようで後ろに飛んだ。

「なっ何、今何が起こったの？ ティア！」

「うっさい！ 私だってわからないわよ！」

そんな二人を一瞥してサイクロンはエレファント・ドーパントの方を見た。

「・・・弱いな」

「何！？」

ぼそりと呟いたサイクロンの言葉に反応するエレファント・ドーパント。

「弱いと言っているのだ。貴様は相手する価値も無い奴だ」

「ふ・・・ふざけるな！！」

エレファント・ドーパントは激昂して、再びサイクロンに突っ込んでいった。しかし、

ヒィヨ

「ぐは！」

再び何かに斬りつけられたようで、そして今度はさっきよりも吹っ飛んだ。

「戦う気は起きんが、仕事だからな。さっさと終わらせる」

そう言うときサイクロンの周りから風が渦巻いて来た。

「そっか・スバルあの緑の奴の攻撃の正体がわかったわよ」

「えっホント？」

「うん。たぶんあいつ、風を操っているんだと思う。風であの怪物を切り裂いたり、さっきスバルを助けたのもあいつが風の壁を作ったからよ」

「なるほど・・・あれ、でもあの人から風が吹いているとき魔力を感じないよ？」

「そこなのよね・・・」

普通どんな魔法を使おうとも、魔力は感じられる。つまりサイクロンは魔法を使っていないと言う事になる。

「さて、行くぞ」

そう言うときサイクロンはエレファント・ドーパントの懷に一気に潜り込み、腹にアッパーを打ち込んだ。

「ぐお！」

あまりの威力にエレファント・ドーパントは腹を抱えてうずくまった。

「まだまだ、どんどん行くぞ！」

サイクロンはエレファント・ドーパントの首を持つと空中に浮かび上がらせて、怒濤のラッシュを打ち込んでいった。

「おらおらおらおら！！！！！」

「ぐおおおお！」

何度目かの拳を打ち込んだ後サイクロンは素早くサイクロンメモリをマキシマムスロットに挿入した。

「破壊^{こわ}れな」

『CYCLONE MAXIMUM DRIVE』

サイクロンの右手に緑色の風が渦巻き始め、空中のエレファント・ドーパント目掛けてその風を打ち込んだ。

「おらあ！」

「ぐああああ！」

風がエレファント・ドーパントを直撃すると、エレファント・ドーパントは大きな爆発を起こした。

「・・・破壊神」

そんな光景を呆然と見つめていたティアナはぽつりと呟いた。そうまさしくサイクロンの攻撃は破壊^{二つ名}神にふさわしいものだった。リニアレールは周りが穴だらけになったりして傷も多い。

エレファント・ドーパントが爆発した所を見てみると、メモリブレイクされたメモリと男が横たわっていた。

「えっ、人間・・・？」

驚くのも無理は無い。スバルやティアナはドーパントを見たことが

無いので人間だとは思ってもよらなかったのだろう。

「さてと、あちらどうなっているかな？」

ヴェントは変身を解くと、携帯型酒瓶で酒を飲みながら零が戦っているだろう方向を見つめていた。

「仮面ライダー……」

「エターナル？」

聞いた事が無い名前を聞いて、エリオとキャロは二人そろって首を傾げていた。

「エ、エターナルだと!？」

逆にスコピオン・ドーパントはエターナルの名前を聞いて狼狽していた。

（おいおい冗談だろ!？ 何で俺の所にエターナルが来るんだよ!？）

スコピオン・ドーパントはこの任務の行く前にエレファント・ドーパントの男と一緒に上司で組織の幹部の男からこんな事を言われたのだ。

「いいですか、お二人とも。R e e C ? D E が出てきた場合その者の首を取ってきたら昇進のチャンスが与えられます」

「おお！」

二人とも是非ともReeC?DEが出てきて欲しいと思った。

「しかし”エターナル”は別です」

”エターナル”?

「エターナルが相手だった場合は戦わないことをおすすめします」

「?どういう事です」

「もし戦うことになったらエターナルのマキシマムは絶対に使わせてはいけません」

「何故です?」

「それはあなたたちが知らなくていいことです」

そう幹部の男に言われて二人は黙った。基本”エデン”の上下関係は非常に厳しい。幹部に口答えしただけで殺される例も少なくない。

「ただ一つ言うと、”エターナル”下手したらいずれ全てのガイアメモリを支配する存在になる可能性が出てきます」

「全てのガイアメモリを・・・?」

「話は終わりです。さっさと行きなさい」

(くそ!どうする!?あの方は冗談とかそういうのは言わないから冗談抜きで奴はやばいってことだ。それに奴のマキシマムって一体・・・)

「何考えているさ。まあいいや。さっさと終わらせるよ」

エターナルはローブをはためかせると、スコープオン・ドーパントの元に走っていった。

「!くっ、くそ!」

スコープオン・ドーパントは覚悟を決めたのか、自分の元に来るエターナルに拳を繰り出した。

「甘い!」

エターナルはその拳を躲し、青い炎を纏ったパンチをスコープオン・ドーパントに打ち込んだ。

「ぐは!」

「まだまだ、簡単にやられてくれるなよ?」

そう言うときエターナルは青い炎のパンチを何発もスコープオン・ドーパントに打ち込んだ。

「こ、このおおお!」

スコープオン・ドーパントは背中の中尾から毒針を無数にエターナルに打ち込んだ。

対してエターナルはエターナルエッジを取り出し、青い斬撃波を繰り出し毒針を全て叩き落とした。

「なん・・・だと・・・?」

「どうしたの? もう終わり?」

「くっ・・・まだまだだ!」

そう言うときスコープオン・ドーパントは尾の針をエターナルに目掛けて連続で打ち込み始めた。

「はっ！」

エターナルは躲したり、エターナルエッジではじき返したりして全
て防ぎきっていた。そして、

「はっ！」

「何!？」

エターナルはスコピオン・ドーパントの尾を掴むと、

「はあああああ!!」

「ぐああああああ!!」

そのままエターナルエッジで切り裂いた。

「ぐおおおお」

痛みで苦悶の声を上げているスコピオン・ドーパントを尻目にエ
ターナルはロストドライバーからエターナルメモリを抜き出し、エ
ターナルエッジにあるマキシマムスロットに挿入した。

「さあ終わりだ」

『ETERNAL MAXIMUM DRIVE』

エターナルメモリのマキシマムが発動されるとスコピオン・ドー
パントに異変が起きた。

体に電流らしきものが流れ始めたのだ。

「な、何だこれは・・・!？」

「知らないのかい？僕のエターナルメモリは特別でね、他のメモリを無力化する力があるんだよ」

「!？他の・・・メモリの・・・無力化だと？」

スコーピオン・ドーパントは信じられないと言ったふうに首を振った。

そんなスコーピオン・ドーパントにふっと仮面の下で微笑したエターナルは動けないスコーピオン・ドーパント目掛けて駆けだした。そして右手のエターナルエッジを持ち替えてジャンプし、そのまま青い炎が渦巻いた右足で回転蹴りをスコーピオン・ドーパントに打ち込んだ。

「ぐああああ!!」

「目には目を歯には歯を悪には厳選たる裁きを」

スコーピオン・ドーパントは爆発し煙が晴れると男とメモリブレイクされたメモリが落ちていた。

「終わったようだな」

「まあね」

もう一体のドーパントであろう男を肩にしょってヴェントが後ろから現れた。

「ちょっと待って」

「スバル早いわよ!」

「・・・何あの子達？」

「・・・どうやら勝手についてきたようだ」

スバルとティアナがヴェントを追ってこちらに来たのだ。

「あれ・・・あつ」

スバルはエターナルの方を見ると驚いた顔になった。

「何だ、おまえの知り合いか？」

「ん？えーと・・・どこかで会ったような」

「えっと、四年前の空港火災で・・・」

四年前で自分の記憶の中にある人物の中から該当しそうな顔を探していく零。やがて思い出したように手をぼんと叩いた。

「ああ！あの時の女の子。大きくなったね」

「はっ、はい！あの時はありがとうございました」

「いえいえ」

「だから早いつて言ってるでしょ・・・時空管理局の者です。先ほどの怪物の件とあなた方の力の事でお話があるので同行願いますか」

ティアナはようやく追いついて職務を全うしようとする。

「やだ」

即答するエターナル。

「なっ・・・」

「めんどくさいしね。話ならなーちゃん達から聞いてよ」
「なーちゃん？」

聞き覚えの無い名前に首を傾げるスバル。

「……それ私のこと。なのはだから一番最初の文字でなーちゃん」

空から声が聞こえてきた。声がした方を見るとバリアジャケットを身に纏ったなのはがいた。

「なのはさん！」

「みんな大丈夫？」

「はっはい。けどこの人達は……」

「大丈夫。私達の味方だよ」

「はあ……」

そのとき、

「!!!ヴェント！」

くうへき
「空壁」

エターナルがヴェントに叫ぶとヴェントは全員の周りに風の壁を展開した。すると、いきなりどこからかエネルギー弾が放たれた。

「なっ何？」

突然の事に混乱するなのは達。

「ぐは！」

「ぐお！」

「っ、しまった！」

ドーパントの男達から一瞬目を離すと、男達から短い声がして慌てて男達の方を見るともうすでに息絶えていた。

「くそ……！やられた」

「……奴か？」

「ああ処刑人だ」
アサシン

男達の首筋には黒い痣らしき物が浮かび上がっていた。

リニアレールから離れた山脈そこには一体のドーパントがいた。ボディは黒く、目は赤く怪しく光っており、不気味さが目立つ。

「終わりましたか」

ドーパントの顔の右横にモニターが開き、そこに映っていたのは先ほどのドーパントが始末した男達の上司の組織の幹部の男だった。

「……ああ」

「ご苦労様です。それで”エターナル”の方はどうでしたか？」

「……範囲は狭いが、やはりメモリの無力化はできるようになっている」

「そうですか。まずいですね、このままだと我々のエデン楽園のための計画に大きな支障が出てくるでしょう」

「……どうする？始末するか……？」

「……やめておきましょう。エターナル単体でも強いと言うのに加えて破壊神が側にいるのです。いくらあなたでも無理があるでしょう」

「……了解した。これより帰投する」

「はい。詳細な報告は帰ってからお願いします」

そう言い残すとモニターが閉じられた。

「……エターナル。いずれ全てのガイアメモリを支配する存在か……」

「で、どうだったかね？」

「エターナルは完成し始めたようです。このまま泳がせていたらまずいかと……」

豪華な屋敷の一室。そこには先ほどドーパントと通信していた幹部と他の幹部が会合をしていた。

「どうするんですお父様？早く零を確保しないと」

上座に座っている初老の男の方を向いて、言う女性。

「慌てる事はない。零もわかっているはずだ。自分はあまり外に出歩ける事はできないと」

「それはそうですが……」

まだ何か言いたそうな女性を手で制すると、初老の男はおもむろに立ち上がった。

「だがレリックの方もなんとか手に入れないといけない。カルマ君現在どれくらい回収できたかね？」

「現在は六個です」

「そうか・・・諸君レリック及び、零の確保。そろそろ本腰を入れようと思う」

その言葉に他の幹部全員が反応した。

「全ては我々のエデン^{楽園}のため」

『楽園のため』

EPISODE 5 (後書き)

いかがでしょうか？ 零達REC？DEはそろそろ機動六課と協力していきます。

EPISODE 6 (前書き)

夏休みに入っただので、しばらくは書けたら投稿するってスタンスです。

EPISODE 6

「ぐ、あっ」

Re—C? DEの本部その自分の自室で零は頭抱えてうめいていた。

「やはり……エターナルの副作用か? これはまずいかな……」

「零君、お土産……って大丈夫!? どうしたの零君?」

ドアを開けてすずかが入ってきて、頭を抱えて苦しそうにしている零を見て驚いた。

「やあ、すーちゃん。大丈夫大丈夫」

「大丈夫って……」

すずかは零の元に駆け寄り、頭をさすった。すると自然と頭の痛みが引いてきた。

(痛みが引いてきた……しかし何故……?)

「大丈夫……?」

「ああ……大丈夫だよ」

「ならいいけど……何かあったら直ぐに言ってね?」

すずかは零の手を両手で優しく包み込みながら言った。

「すーちゃん、ありがとう」

「もしもし……って、なんやお邪魔やったか?」

いきなりモニターが開いたかと思うとそこには、はやてが映っていた。

「ん？」

零は良く聞こえなかったがさすがには聞こえていたようだ。

「なっ何言っているのはやてちゃん！」

現に真っ赤になって動揺している。

「?どうしたのすーちゃん」

「なっ何でも無いよ零君! うん何でも無い」

わたふたしながら言うすずか。そんなすずかを不思議に思いながら、零ははやての方に目線を送った。

「さてと・・・メールの話？」

「せや。そのことについて何やけど・・・」

あの時零は出撃する前にはやてにメールを送り、助けることと手に入れた情報を書いたのだ。

「まさか”エデン”もレリックを狙っているなんて・・・目的はわからないの？」

「まあね。僕たちも色々探っているんだけど、中々尻尾が掴めないんだ」

「そっかー・・・ねえ零君相談何やけど・・・」

「協力してくれ、かな？」

「うっ、気づいておったか・・・でどうや？」

聞いてくるはやてに零はため息をついた。

「はーちゃん。今君の立場わかってる？唯でさえオーバーSランク魔導士をかなり投入しているような状態の今にさらに戦力を増やすことが、どれほど危ない橋渡っていると思うのさ」

はやての部隊機動六課には管理局には数少ないSランク魔導士がかなり投入されている。そのせいかかなり風当たりも強い。

「うっ、せやけど・・・って何で零君が知つとるん？」

「ん？こないだレジアスがモニター越しに愚痴を言っていた」

零の言葉に啞然とするはやて。

「えっ何零君、レジアス中将与知り合いなんか？」

「うん」

ミッド首都グラナガンでガイアメモリ事件を追っている過程で出会い、最初は零達を警戒していたが今じゃすっかり意気投合しており、ヴェントやエミリオンは酒を飲みに行く仲にまでなっている。さらにガイアメモリ事件の協力をしてもらう代わりに零達もグラナガンでの犯罪の対処に協力していたりしている。

「まっまじかいな・・・」

「はあ・・・まあ僕たちも”エデン”に好き勝手させる訳にはいかないしね」

その言葉を聞いた瞬間ばあと、顔が明るくなるはやて。

「じゃあ・・・」

「待って、とりあえずそちらに全戦力を投入する訳にはいかないから、とりあえず後日またこちらから連絡するから待っていて」

「わかった。ほな零君またな・・・そうそうすずかちゃんちゃんとやらない・・・」

はやてが最後まで言葉を言う前にすずかがモニターを切った。

「すーちゃん？」

「何でも無いわ。何でも・・・」

「そう・・・」

こういう場合女性にあまり深く聞かない方がいいと義父から言われたので零は何も聞かない。

「さてと、すーちゃんみんな集めてくれるかい？」

「わかった。じゃあまた後で」

そう言うとすずかは部屋から出て行った。一人部屋に残った零は無言で立ち上がり、そのまま部屋の一面の壁の前に来た。

そして、壁を三回ほど同じリズムで叩いた。すると、一部の壁が浮き出てそのまま右にスライドした。その中には白いアタッシュケースが入っており、零は指紋認証・暗証番号・鍵、三つのロックを解除し、ケースを開けた。

中にはガイアメモリ——零達が使う同種のメモリが計十六本詰まっていた。そして他にもメモリが収まる型が十個あった。

「AtOZ・・・運命は誰に味方するかな・・・ねえ——克己」

かつて同じ研究所にいて自分に世界という物を教え、そして――
――お互い裏切り合った唯一無二の親友の事を思い出し、零は静かに親友の名を呟いた。

「さてと、みんなすーちゃんから聞いたと思うけど、機動六課にレリックに群がるドーパント専門で何人か派遣したい」

「いや群がるって……」

思わず呟くアリサ。それを無視し、話を続ける零。

「じゃ、誰が行くー？」

すつと手を挙げるネバール。

「はい、ネバール」

「……まずあなたとエミリオンは除外でしょう」

「えー何で？」

ネバールの言葉に不満を漏らすエミリオン。

「……零はここからあまり離れられません。それにあなたは守護神でしょ？ 守護する者の近くにいないでどうするんですか？」

「ぶー」

エミリオンがぶーたれるのをさすが宥めているのを見て零は苦笑しながら改めて回りを見渡した。

「じゃあ僕とエミリオンは除外ってことで。誰が行く？」

今度はアリサが手を挙げた。

「あーちゃん？」

「私が行くわ。最近運動してないから、いい機会だと思う。後あーちゃん言うな」

ふむと考え込む零。しばらくすると顔を上げた。

「わかった。じゃあまず一人目はあーちゃんで。次は？」

「俺が行こう」

「ヴェントが？」

名乗り出たのはヴェントだった。

「ああ。レリックを現在”エデン”^{奴ら}が集めているならばそちらに戦力を集中させるだろう」

「あゝ要するに……」

単純な話、ヴェントは強さを求める人間だ。そのため常に強者との戦いを望む。だから戦力が集中するであろう場所に行くのだろう。

「……それに気になる奴が一人いるしな」

最後の方の呟きはうまく聞き取れなかったが零は気にせず話を進める。

「じゃあ、最後の一人はどうする？」

すずかとネバーの方を見るがどちらも手を挙げなかった。ネバー

ルの方は興味が無いといった感じで、すずかの方はちらちらと零の方を見ながら手を挙げようかあげまいか考えている。

そんなすずかを見てアリサはため息をついて、手を挙げた。

「？何あーちゃん」

「最後の一人、ネバールを推薦するわ。後あーちゃんいうなって言っているでしょうが」

その言葉にネバールは無表情でアリサの方を向き、すずかは驚いた顔をしていた。

「何でだい？」

「もしすずかまで行ったら誰が本部の家事やるのよ」

その言葉に殆どの人間はあゝと思った。

Re－C？DEのメンバーは戦闘においてはかなり優秀なのだが、その反面家事など生活スキルが皆無な者が多い。

男性陣は全滅。エミリオンは出来無いこともないが、やる気が無い。後の二人のすずかがメインでアリサが手伝うといった風に家事をしている。

なので、家事が出来るすずか^{二人}とアリサが抜けるとRe－C？DEの本部がとんでもないことになる。

「そう言えばそうだったね・・・わかった。じゃあネバールいいかい？」

「・・・構いません」

「よし、じゃあ機動六課に行くのはあーちゃん、ヴェント、ネバール。本部に残るのは僕、すーちゃん、エミリオンでオッケーだね？」

その言葉に全員頷いた。

「うん、僕はこれからはーちゃんと連絡を取っていつ向こうに行くことになるか打ち合わせるから六課に行くみんなは準備だけはしておいて・・・じゃあ解散」

そう言うと零はさっさと部屋から出て行った。他のメンバーも皆、部屋を出て行った。

部屋を出て無機質な白い廊下を歩いているとアリサは後ろからすずかに声を掛けた。

「すずか」

「あっアリサちゃん」

アリサが声を掛けるとすずかは振り向いた。

「すずか、感謝しなさいよ?」

「えっ?」

「だーかーらー人が折角好きな人から離れないようにしてあげたんだから感謝しなさい」

最初は何を言われたのか良くわからなかったが、やがて理解した途端すずかの顔はぼんと音が出るくらい赤くなった。

「なっ何言っているのアリサちゃん!?」

狼狽するすずかを尻目にアリサは大きなため息をついた。

すずかが零に思慕の念を抱いているのはR e - C ? D Eのメンバーはもちろん、なのは達も周知だ。零本人は気づいていないようだが・・・

正直な所すずかがいつから零を好いていたかは他のみんなは知らない。おそらく初めてすずかから零を紹介されたときからすずかは零の事が気になっていたのだろう。

「いいすずか？あの超鈍感男を落とすにはさらに色々やらないと駄目よ？」

「いっ色々？さらに？」

「そうよ。今まで色々なアプローチをあいつ仕掛けてみたけど、あいつはほぼ感じなかった」

アリサの言う通りすずかはなのは達からのアドバイスを受けて、零に対し色々なアプローチを仕掛けたが、確かに零は喜んだりしたりもした事があったがそれだけで、結局親友以上の関係になることは無かった。

「うん、そうなんだけどねやっぱり零君どこか普通の人と違うから・
・・・」

「・・・確かにね」

零は昔から少々変わった少年だった。自分の興味があるものを見つけたら直ぐにそこに行き、周りの人間が気がついた時にはすでにいなくなっている事が多々あった。もっともその度にすずかが見つけ出すのだが・・・

「・・・やっぱり零君引きずっているのかな？」
「すずか？」

小さく呟いたすずかに聞くアリサ。

「えっうん何でも無いよ」

「そう・・・さてと私もそろそろ準備しないと・・・じゃあす
ずか頑張るのよ？」

「うっうん・・・」

アリサはそれだけ言うとう自分の部屋に戻った。廊下の角にアリサが
消えるのを見たすずかはその場で大きなため息をついた。

おそらく零の家族を除けば自分が零と一番付き合いが長いと自負し
ている。あの日の夜に聞いた話は自分以外知らない事だろう。誰も
知らない零の秘密を知っているといううれしさと反面、その内容を
誰にも打ち明けられない苦しさもある。

「零君・・・あなたはどこに行こうとしているの？」

すずかの呟きに答える者は誰もいない。

「じゃあそういう訳で」

「おっけーや来る日はこの日で」

自室ではやてと最終の打ち合わせをしていた。

「しかし・・・はーちゃんこれは親友としての忠告だよ」

「・・・なんや？」

「レジアス・ゲイズは機動六課を潰すつもりだ。明確な理由をばか
し、地上の人間ではなく本局の人間で固められているからね」

「確かにな・・・けど、どうしても必要な事やからな」

「・・・予言の事？」

「!？」

「その顔を見ると当たりのようだね」

「……何で零君が知っているん？」

「僕にわからないことなんてそうは無い」

くすりと笑う零に内心はやてはまたかと思った。零はたまに全てを見透かすような目をする。今もそんな目をしている。事実今までの人生で零に自分の秘密をいきなり知られたこともたまにあった。それでも探ろうと思ったなら探せる秘密なのでいいが、今回は零が絶対に知れない事だというのに。

「はあ、まあええわ。零君のそれはいつものことやし」

「そうそう。気にしない気にしない」

少し話しをした後はやてとの通信を切り零はふうとため息をついた。

「……いいのか？あんな事を言って」

そう言うのはヴェントでソファアに座っておりネバールは壁に寄りかかっている。

「何が？」

「予言の事だ。まだ話すのは早かったんじゃないのか？」

「大丈夫さ。はーちゃんもそんなに深く考えないよ」

「ならいいが……」

「……それで、我々をここに呼んだ理由は？」

零はあの後ヴェントとネバールを自分の部屋に呼びつけたのだ。

「いやあ、ちょっと二人に釘を刺しておこうと思って」

「釘？」

「そ、頼むからあっちで面倒な騒ぎを起こさないでね。処理するこ

「つちが大変だから」

「・・・善処しよう」

「わかりました」

その言葉に満足そうに頷いた零は直ぐに真剣な表情になった。

「・・・いいかい二人とも、能力はあまり使わないでね」

「わかっている。管理局に目をつけられたらたまらんしな」

「ヴェントはもう聖王協会に知られている存在なのでは？」

「・・・もう俺は協会とは関わりは無い」

「そうですか・・・」

「ふうん。素直じゃ無いね」

「おまえに言われたくない」

「えっ何のこと？」

まるでわからないと言った顔の零にヴェントはため息をつき、ネバールはクスリと笑った。

EPISODE 6 (後書き)

いかがでしょうか？次いつ更新になるかはわかりませんが頑張って投稿します

EPISODE 7 (前書き)

こないだ総アクセス数が12000超えました。やったー

EPISODE 7

「じゃあ午前の訓練はここまで」
『ありがとうございます!!』

機動六課訓練スペースで午前の訓練を終えた先日リニアレールにいたフォワードメンバー四名がなのはと一緒にいた。

ブウウウン

「えっ？」

訓練スペースから機動六課本舎に戻る途中、バイクと車の音が聞こえてきてそちらの方を見たら徐々に近づいてくるバイクと車があった。

「あれって……」

「誰かな？」

フォワードちびっ子組のエリオとキャロが二人そろって首を傾げた。

「ティアティアあれ誰だろう？」

「さあ？」

もう一組のスバルとティアナも首を傾げていた。

「ああ……もしかしてもう来たのかな」

「なのはさん？」

一人なのはだけわかったようで頷いていた。
やがて徐々にこちらに近づいてきた。そう近づいてきた

「ねえティア……」

「ええ……」

車とバイクはこちらに近づいて来た。スピードを落とさずにだ……

「……って、ちょっと！その車とバイク止まってください！」

なのは慌てて止まるように大声を上げるが……車とバイクは止まる気配は無い。

「ちょ、みんなよけるよ！」

『はっ、はい！』

そう言うのと皆が脇に逸れた。そして皆がいた場所に車とバイクが止まった。

「ふむ……よけたか」

そう言いながらバイクから降りた男はヘルメットを被らず、ゴーグルだけをつけていた。

「久しぶり……と言うほど時間はたっていないか高町」

「この声もしかして……ヴェントさん？」

ゴーグルを外すとその顔はヴェントだった。

「ああ」

ガチャリ

音が聞こえて、その方向を見ると車のドアが開き、ふらふらとおぼつかない足が出てきたのは……

「アリスちゃん？」

アリスだった。その顔は青く、今にも吐きそうだった。

「だっ、大丈夫アリスちゃん？ 顔色悪いよ」

「うえゝもう最悪……」

「何をそんなにうめいているんですか？」

ネバールが運転席から降りて不思議そうに聞いた。

「ネゝバゝルゝ、忘れていたわあんたの運転……」

アリスはじろつとネバールを睨みつけた。しかしその眼光はひどく弱っていたが。

「一体何があったのアリスちゃん？」

「ネバールの運転はとんでもないのよ」

「どういう事？」

「ここまで来る道のりで法定速度ぎりぎりのスピードで車を走らせ、他の車を色々と荒っぽい運転で追い越したりしていたから揺れるわ揺れるわもう大変よ……」

「うわ……」

アリサの顔を見る限り相当ひどかったようだ。

「なやははは・・・けどヴェントさんとネバールさん危なかったですよもう少しで当たる所だったですよ？」

アリサに苦笑を返し、なのははヴェントとネバールの方を向いた。
いくら躲せたからといっても危うくひかれそうになったのだから無理もない。

「ん？零がそうしろといったんだが」

「えっ、零君が？」

「ふむ。高町は驚いている時の顔がすごくおもしろいから何か驚かせることをしたらいいよと言ったんだが・・・当てが外れた」

「いや・・・あれじゃ駄目でしょ」

はあとため息をつきながら携帯型酒瓶を取り出すヴェントに突っ込みを入れるアリサ。

「ふふふ、そっかー零君が全く・・・今度あったらO・H A・N A・S Iしないかね？」

黒い笑みを浮かべながら笑うなのはにその場にいる殆どの人間が、怖！！と思ったのは言うまでもない。

「うお！」

「どうしたの王様？」

「いや・・・なんか急に寒気が・・・」

「あくもしかしてヴェント達が行く前に言った言葉かな」

「えっちょ、ホント？」

「零君・・・何いったの？」

Re-C? DE本部で一人の青年が悪寒に震えていたのは言うまでもない。

「零君のお仕置きは後でと言う事で・・・じゃあはやてちゃんにの所に行きましょうか。案内します」

「ああ」

「お願いね、なのは」

「・・・」

ぞろぞろと再び隊舎に向かって行くメンバー。そんな時ティアナは視線を感じ、その方向を向いたが誰も向けておらず気のせいかと思いきななかった。

しかしティアナは当たっていた。誰にも気づかれないように静かにヴェントはティアナに視線を向けていた。

（あの日から随分大きくなったものだ。なあ、心友ともよ）

人知れずヴェントは心の中で今は亡き心友ともに語るのだった。

「はやて久しぶり。元気みたいね」

「せやな、アリサちゃんも元気そうで何よりや」

親友同士で話しが弾むアリサとはやて。

「ちょっとはやて、ヴェントさん達が・・・」

「ああ、せやったな。ごめんな。改めまして機動六課部隊長八神はやてです。よろしゅうな」

あ後ははやてのいる部隊長室に行き、フェイトや副隊長達も連絡を受けてそこにいた。

「で、そちらにいるのが……」

「スターズ2ヴィータだ」

「ライトニング2シグナムだ」

赤毛の三つ編みの少女とピンク色のポニーテールをした女性がそれぞれ自己紹介した。

「ヴェントだ……」

「……ネバール」

対する二人は素っ気ない。
むっとなる二人。

「……ええと、ほならここでのアリサちゃん達の役割を説明するわ」

何となく険悪な雰囲気振り払う様にはやては仕事の話に話を替えた。

「まずはレリックを狙うドーパント専門の遊撃部隊として働いて貰います。コールサインはどうしよっか？」

「そうねえ……わたしはRe-C?DE02、ヴェントはRe-C?DE03、ネバールはRe-C?DE04でお願い」

アリサとはやては話をどんどん進めていく。

「でフォワードとも一緒に前線で戦ってほしいやけど・・・」
「断る」

はやての頼みをネバールが一蹴する。

「貴様、主はやての頼みを断るのか？」

シグナムネバールを睨み付ける。ヴィータも口には出していないが、同じ気持ちの様だ。

「こらネバール！」

アリサがとがめる様に言うがネバールはいつも通りの表情でいた。

「えっと・・・一応教えてもらってかまわへん？」

「・・・俺の仕事じゃない」

表情を変えず言い切ったネバールにその場にいたヴェント以外の者は目を丸くしていた。ヴェントは気にせず酒を飲んでおり、アリサもああと顔を覆っていった。

「・・・はい？」

一番早く回復したはやてが再び聞き返えた。

「だから俺のここでの仕事はドーパント対応だけだ」

「えっと・・・」

「ごめんみんな。こいつこういう奴なのよ」

アリサがすまなそうに言う。ネバールは基本とことんドライな性格

をしており、零に言われた仕事以外は一切やらない主義なのだ。

「あー……零君が言っていたのはこの事やったやんやな」

はやてが小さい声で誰にも聞こえない様にぼそりとつぶやく。

「はーちゃん、ちょっと言っとかないといけない事があるだ……」

「なんや、零君？」

普段はきはきと答える零にしては珍しく齒切れが悪い。

「その……六課に行くメンバーなんだけど……」

「アリサちゃん達？」

「あーちゃんは良いんだ。ただ僕は気にしていないけど他のメンバーがね……」

「他のメンバーって確か……」

「ヴェントとネバールの事なんだ……」

「二人がどうかしたんか？」

正直な所はやてもそうだがなのはもフェイトも余り二人と話を交わしたことは無い。

「二人とも正直に言う……性格がちょっと……ねえ？」

「性格が……？」

「うん……僕たちREC?DEでは大丈夫なんだけど、多分ヴェントは大丈夫だと思うけど、ネバールはもう何言っても意味無いから気にしないでね？」

「はい？」

「会えば解るよ」

（なるほどこれはまたやな）

はやては心なかでため息をついていた。

ネバールは相変わらずの表情で、シグナムとヴィータは睨み付け
し、アリサは手のひらで顔を覆っており、ヴェントも我知らずと言
った風だ。

フェイトはおろおろしているし、なのはも困惑している。

「さてと、話はおしまいや」

席を立ちながらそう言うはやて。

それにならない次々と他の者も立ち上がる。そんな者の中にははやてに
声を掛ける人物がいた。

「主はやて、よろしいですか？」

「なんやシグナム？」

シグナムだった。

「実はこの者達のどちらかと模擬戦をしたいのですが……」
「なんやて？」

「この者達を使うガイアメモリの戦士の力を知りたいのです」

キラキラと目を輝かせて言うシグナムにああとRe-C? DEメン
バー以外は納得した。

シグナムは戦闘^{バトルマニア}狂だ。故に自分の知らない力を持つRe-C? DE

に興味を持ったのだろう。

「えーと、誰かやって貰う訳には……」

こうなったシグナムは止められない。さっさとやるに限る。

「……俺がやろう」

そう言うのはヴェントだった。

「あー……あんたがやるなら良いわ」

「ふむ、改めて名乗らせて貰おう。機動六課ライティング2烈火の将シグナム」

「Re-C? DE03 癍痕の破壊神ヴェント」

それぞれ自分の肩書きを名乗り、見つめ合った。そこにはお互いを強者と認め合った二人がいた。

「すぐに訓練場へ行こう。構わんな?」

「ああ」

そう言う二人はさっさと部隊長室を出て行った。

さっさと行ってしまった二人に部屋に残っている者の殆どはしばしばかんとしていた。

「……どういう事だ」

「何がだい?」

「とぼけるな!!! Re-C? DEの半数を機動六課に送った事だ

!!」

「……モニター越しとはいえるさいよ————レジラス」

零は半眼でモニター越しの人物————レジラス・ゲイズを見つめた。いつか連絡が来るとは解っていたがこんなに早いとは。自分の席に座っているはずかは心配そうに零を見つめ、エミリオンは面白そうに事の成り行きを見つめていた。

「レジラス……貴方も解っているはずだ。ドーパントは僕たちしか倒せないことを」

「だからといって!!あの機動六課にこれ以上戦力を増やすなど!」

再びの怒鳴り声に零は顔をしかめる。まさかここまで本局と地上の溝が深いなんて。

「……レジラス、貴方の怒りも解らなく無いけど、半分は残っているんだ。地上の方は僕たちで対処するからさ」

レジラスはまだ興奮しているのか息が荒い。それでもやがて落ち着いてきたのか呼吸が整ってきた。

「……すまない。取り乱した」

「全くだよ、そんなに怒っていると……禿げるよ?」

「禿げるか!!まだまだふさふさだ!!」

「今はね……」

「やめんか!!怖くなってくだらう!」

怒鳴るレジラスにクスクス笑う零。すずかは苦笑いをし、エミリオンはニコニコしている。

「さてと・・・レジラス、あなたの懸念もわからなくもない。だが忘れたかい？僕たちの契約を」

「むっ・・・」

レジラスは苦い顔をする。管理局とR e — C ? D Eとの間に結ばれた契約はこうだ。

- 1、管理局はガイアメモリの事件と判断された事件はR e — C ? D Eへ捜査を任せ、情報を託す。
- 2、R e — C ? D Eはその代わり他の事件の協力を約束する。
- 3、なおガイアメモリ事件に関して管理局はR e — C ? D Eに情報を求めているいけない。

「これだろ・・・」

「そうそう。良く覚えているね」

「ふん！忌々しい事にガイアメモリは貴様らしか対応できんからな」

「まあね・・・ガイアメモリは魔法が効かない。質量兵器だって怪しいものだ」

「そもそもこちらは貴様らに情報を与えているのに、貴様ら情報を与えんのだ」

「・・・レジラス、あなただってわかっているはずだ。あの事件を体験したのだから・・・」

その言葉にレジラスは少し暗い顔になった。

あの事件、まだ零達がミッドで活動し始めた頃で、R e — C ? D Eもまだ出来ていなかった頃だ。当時管理局は交渉していた零の言葉に耳を貸さず、ガイアメモリ事件を独自で解決しようとした。

その結果、たった一体のドーパントに担当魔導士の大半をやられ、町にもかなりの被害が起きた。

零はそのドーパントを難なく斃したため、これにより管理局上層部はガイアメモリ事件を零達に委任し、先の契約を交わした。

「別に僕たちはあなた達のしがらみについて興味は無い。僕たちには僕たちのやるべき事があるからね」

「……お前達は何をしようというのだ。ガイアメモリ事件を解決するだけとは到底思えない」

「それは秘密」

人差し指を口に当ててにこりと笑った零に対してレジアスはまた苦い顔をした。

EPISODE 7 (後書き)

いかがでしょう。感想とかくれるとありがたいです。次投稿は何時になるかは解りません

EPISODE 8 (前書き)

今回から少し文章の構成が変わります。

EPISODE 8

機動六課訓練場。そこには二人の人間が立っていた。

一人は機動六課副隊長シグナム。すでに騎士甲冑を纏い、剣型デバイスレヴァンティンを手に持っている。もう一人はRe-Case DE 03ヴェント。こちらはいつも通りの私服で酒を飲んでいる。

「じゃあ、二人ともあまり本気の勝負はやらないことええね？」

「はい」

「問題無い」

訓練場に浮かぶモニターに映るはやてにそれぞれ答える二人。

「ほなら……試合開始！」

シグナムはレヴァンティンを構え、ヴェントはロストドライバーを腰に巻いた。

「では見せてもらおうか……仮面ライダーとやらの実力を」

その言葉にヴェントは少し嫌そうな顔をした。

「ん？ どうした」

「いや……あまり俺を仮面ライダーなどと呼ぶな」

「何故だ？」

「元々その名は零が名乗れといったものだ。あまりそれを使いたくない」

「そうなのか」

「誰が好きこのんでそんな特撮ヒーローみたいな名を使うか」

「へっくし！」

「やだ、零君風邪？」

「んー誰かが僕の噂しているのかな」

Re-C? DE本部で一人の青年がくしゃみをしていたのは別の話

「まあいい。私は貴様と戦えればそれでいい」

「そうか」

『CYCLONE』

ヴェントはサイクロンメモリを起動させ、ロストドライバーの右側のスロットに挿入、そのまま右側に展開した。

「変身」

『CYCLONE』

音声と共に緑色の風がヴェントの体を包みそして風がやむと緑色の体の仮面ライダーサイクロンがいた。

「では……」

「行くぞ！」

そして同時に二人は地面を蹴り開いてに接近した。シグナムはレヴァンティンをサイクロンは右手の拳を風を纏わせながら放った。

ガキーン！

レヴァンティンと拳をが当たると、当たりに余波の風が吹いた。

(っ！拳一つでこれほどの力とは……！)

(ほう、中々いいな)

二人とも正反対の事を考えて、距離を取った。そして、少しお互い動かずにいた。

『！』

二人は再び同時に動き出し拳と剣を交えた。

「はあ！」

「ふん！」

シグナムは剣をサイクロンに斬りつけるが、サイクロンは腕に風を纏わせたりしながら防ぎ、サイクロンは、拳に風を纏わせながら打ち込むがシグナムは剣と鞘で防ぐ。

一見お互い決定打が決められずにいるように見えるが、確実にサイクロンの拳はシグナムにダメージを与えていた。

(くっ……手が痺れてきたか。あいつの拳は恐ろしいな)

サイクロンの拳はReeC?DE内最強を誇り、生半可なシールドでは直ぐに破壊こわれてしまう。もっともシグナムはそのことを知らないが……

(どうする……そろそろ……)

「そろそろけりをつけるか」

「！！」

今自分が思ったことを言われて動揺するシグナム。

「何故自分の考えがわかった？　と言いたそうな顔だな」

シグナムは答えず、サイクロンはそのまま続けた。

「知れたこと。俺自身の拳は俺が一番知っている。いくら剣や鞘で防いだところで、ダメージはたまってくるそうだろう？」

凶星だった。

「まあいい。次で決める」

そういうとサイクロンはサイクロンメモリを取り出し、右腰についているマキシマムスロットに挿入した。

『CYCLONE MAXIMUM DRIVE』

するとサイクロンの右手の拳に風が渦巻き始めた。

「ならばこちらも……レヴァンティンカートリッジロード」

レヴェンティンがカートリッジをロードすると刀身が炎に包まれた。

「行くぞ……」

「来い……」

再び固まる二人。見学している者達も固唾をのんで見守っている。そしてどこともなく一枚の葉っぱが落ちてきて、やがてその葉が地

面に落ちたとき、

『! !』

二人は動き出した。

「破壊こわれな」

「紫電一閃!」

サイクロンの風とシグナムの炎がぶつかり合い、強い衝撃波を辺りに出した。その余波は見学していた者達の所まで来た。

「きゃあ!」

「くっ!」

「ど……どうなったんや」

モニターを見るが土煙のせいで見えてこない。

(どうだ……)

シグナムは片膝をついて、荒い息をしながら辺りを見渡した。先ほどの自分の紫電一閃とサイクロンの拳の勝負はお互い衝撃波で吹き飛ばされて、サイクロンは位置がわからない。

「……奴は一体どこに……」

「……ここだ」

「! !」

声がした方向に慌てて向くとそこにはゆらりとサイクロンが現れた。

「いつの間に……」

「気配を読むのは得意なのでな」

それだけ言うとサイクロンは拳に風を纏わせた。

「くそ！」

シグナムは慌てて立ち上がり、レヴァンティンを構えようとするが、

「遅い」

サイクロンがそれよりも早くシグナムの懐に入って、右のストレー
トに思いっきりぶちかました。

「ぐ……ぐふお！」

あまりの衝撃にシグナムの騎士甲冑が一部破損した。

「すさまじいな……その拳……私の……騎士甲冑を超えて私にダメ
ージを喰らわせるとは……」

「ふっ……だがこれで俺の勝ちだ。勝利はこのヴェントが頂く」

「そうか……また……戦おうではないか……」

それだけ言うと、シグナムは意識を落とした。

「……いつでも相手になろう」

土煙が晴れた後そこにいたのはシグナムを肩で背負ったヴェントだ

った。

「シグナム大丈夫なの？」

フェイトが心配そうな声を挙げる。

「心配はいらん。ちゃんとダメージが体に残らないように当て所を考えた。今日一晩ゆっくり寝れば大丈夫だろう……さて医務室はどこだ？」

「えっ？」

「いや……一応運んでおこうと思ってな」

じゃあ私が案内しますと言ってフェイトはヴェントを連れて行った。

「ティア、ティアすごかったね!!」

「まあねあれがガイアメモリの戦士の力……」

「すごかったねエリオ君！」

「うん」

フォワード陣はサイクロンを褒め称えていた。

「まさか、リミッター付きとはいえシグナムに勝つとはなあ」

はやて自身サイクロンの実力を改めてみてすごいと思った。

「てことは、ネバールさんやアリサちゃんもあれぐらい……？」

「いやいや、ヴェントの強さは反則だから。あれと同レベルなんてRe-C?DEじゃあ零とネバールぐらいよ」

なのはの予測をアリサが否定する。Re-C?DEの強さ順はヴェ

ント、零、ネバール。その下にエミリオン。さらにその下にアリサとすずかといった感じた。

「アリサちゃん……？」

いきなり黙り込んだアリサを見てなのは声を掛けた。

「どうしたのアリサちゃん？」

「いや……そういえば本部の零達どうしているかなと思って」

「零君達？」

「うん……あれなんかどんどん不安になってきた。すずか一人であるの二人の面倒見切れるかしら……心配になってきた」

「あ、にゃははは……」

エミリオンは知らないが零の事は良く知っているので不安なアリサを見てなのは苦笑いしか出来なかった。

件の零達と言うと、

「あー」

「暇だね」

だらけきっていた。零とエミリオンは。なおずかは本部の掃除をしていた。

現在零達がいるところは本部のラウンジに当たる所で、二人とも大きめのソファでぐでーとしている。

「ふー二人とも掃除おわっ……って二人とも何しているの？」

さすがが掃除を終えラウンジの扉を開けるとだらけている二人を見て呆れた。

「やあ、すーちゃん。いやね、何かやること無くてもう暇なんだ」
「私も王様と同じく」

はあとため息をついてすずかはラウンジにある冷蔵庫からペッドボトルを取り出し、キャップを開けて、中の水を飲んだ。本部は思った以上に広く普段はすずかとアリサの二人が分担してやっているのだが、アリサが機動六課に行ってしまったのですずか一人でやる羽目になっているのだ。

「もう、そんなに暇なら少しは掃除手伝ってよ」

「えー……だってすーちゃんがやらなくて良いって言ったんだよ？」

「そーそー」

うっ、となってしまう何も言い返せないすずか。以前も他のメンバーに家事をやらせてみたが、零は几帳面な性格をしており、少しでも測り間違えるとやり直ししたらどんどん変な事になっていった。ヴェントは適当に洗剤や調味料を入れたりして、零と同じく変な事になり、ネバーは頭は非常に良いのだがそれだけで家事スキルは一切無い。

エミリオンはやろうと思えばやれるし彼女の料理は一級品だ。唯やる気が無く、気まぐれでしか料理を作らない。

「はあ……」

すずかが再びため息をつくとき零の近くにモニターが開いた。零はそのモニターを見ると顔色が変わり、起き上がりソファに座り直した。

「零君……？」

「もしかして王様……」

「うんドーナパントが現れた。場所はミッドにあるショッピングモール。数は一体」

エミリオンも真剣な表情になり、すずかも零の側に来た。

「で、誰が行くの？」

「じゃあ僕が……」

「駄目よ。零君は本部で待機よ」

零が名乗りを挙げようとしたがすずかが駄目と言った。

「……」

「そんなえーって顔にしても駄目。それに零君こないだ外に出たばっかりでしょ？」

「そうだけど……」

「とにかく、今回は私が行く。良いよね？」

やがて渋々といった風にはーいと零は答えた。そんな二人を見てエミリオンは相変わらずニコニコしていた。

「いやーこうしてみると二人ってなんだか姉弟みたいだねー」

それは昔から良く言われることだ。暴走する零をすずかが止めるそんな関係は二人が初めて会ったときからずっとそうだ。逆にそれ以上の関係にずっと進められないのだが………

「ふっふふふ姉弟かー……ホントそれ以上の関係になれないん

だよね」

ぶつぶつと文句を言いながら体育座りしているすずかに零は義父の教えのそういうときの女性は強く言わず控えめに言う事と言う教えを守りながら声を掛けた。

「あーすーちゃん？行くなら早く言って欲しいんだけど……」

ためらいがちに言零。その言葉にはっとして立ち上がるすずか。

「ごっごめん零君……じゃ、じゃあ行ってきます」

それだけ言うはずかはそのくさにラウンジを後にした。

「どうしたんだろうすーちゃん？」

「はあ……王様の鈍さは筋金入りだね」

「えっ？」

「何でも無いよ」

ミッドのショッピングモール。そこには蜂の記憶を持った怪物——
——ビードーパントが暴れ回っていた。

「はっはっはははは！！すげえぜこの力これさえあれば管理局の連中に吠え面をかかせてやれるぜ」

ビードーパントは自身の能力で無数のビー兵士を作り出していた。

「…………それは出来ませんよ」

「！誰だ！！」

このショッピングモールはすでに殆どの人間が避難しており管理局員がここら一帯を封鎖しているので人がいるはずがないのだ。それは紫色のローブを羽織り、顔をフードで目深く被ったすずかだ。った。

Re-C? DEは”エデン”にその正体を知られないために、仕事の時は素顔を隠す必要があるのだ。もっともヴェントのように素顔が割れている者もいる。

「まあ、さっさと終わらせようっと」

そう言うとすずかはロストドライバーを取り出し、腰に巻いた。そして懷から黄色で月の形のLと書かれたメモリを取り出した。

『LUNA』

幻想の記憶を宿したメモリ――ルナメモリを起動させてロストドライバーのスロットに挿入し、右に展開した。

「変身」

『LUNA』

すずかの体を光りが覆い、やがて光りがやむと黄色の体をした幻想の戦士がいた。

「てめは……………!」

「あんまり名乗りたくないけど……………仮面ライダーナ」

EPISODE 8 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待っています

EPISODE 9 (前書き)

何とか書けました。これからしばらく部活の合宿なので更新出来ません

EPISODE 9

「仮面ライダーだと……？」

「……あまりその名で呼ばないでくださいね？ 恥ずかしいですから」

ビードーパントの言葉にルナは少し嫌そうに答えた。

「フン！ 仮面ライダーだかなんだかしらねえがこの俺に勝てる訳ねえ！」

そう言うときビードーパントは生み出したビー兵士をルナに襲わせた。

「……………」

ルナは慌てることもなく自分の周りに群がっているビー兵士をぐりぐりと一瞥すると、そのままその場で一回転した。

「はっ！」

するとルナの両手が鞭のように伸びて、ビー兵士を蹴散らしていた。

「なっ……………！？」

さしものビードーパントもこの攻撃は予測出来なかったのか驚いていた。

「ふう……………残念でしたね。私のルナメモリは対多人戦でも

個人戦でもどちらでも対応出来るんですよ」

すずかの言葉通りルナメモリは使用者に幻想的な能力を与えトリックキーな戦法が可能になる。

「くそ……！なめるな！」

再びビードローパントはビー兵士を生み出し、ルナに襲わせた。

「同じ事を……」

またビー兵士を蹴散らそうとしたが、嫌な予感がしてその場から離れた。

ヒュン

するとビー兵士の数体が針を飛ばしきて、先ほどまでルナがいた場所に突き刺さっていた。しかも針が刺さっている場所から周りの地面が黄色く変色していた。

「これは……」

「はっはっは！驚いたか。こいつらの針にはいろんな種類の毒があるんだよ！痺れたり、眠ったりいろんな毒がある」

わざわざ教えてくれてありがとうと胸中で呟いてルナは対策法を考えた。

（どうする……奴の話が本当だとすると、少々面倒ね………零君から他のメモリを借りていないし）

そこでふとビードーパントについての対処法が思いついた。

（そうだ……………当たれば怖いけど当たらなければ良いんだ）

「これで終わりだ!!」

ビードーパントのかけ声と共にビー兵士は再びルナに毒針を繰り出した。しかし、

「……………はっ!!」

ルナは腕を伸ばしビー兵士の一体を掴むとそのまま掴んだビー兵士に近づき全て躲した。

「くそ!逃げんな!」

ビー兵士はまたルナに毒針を打ち出した。

「……………」

対するルナは掴んでいたビー兵士を盾にした。

「なに!?!」

そして針が刺さったビー兵士をそのまま他のビー兵士の所に投げつけて、動揺して所を腕や足を伸ばし全てのビー兵士を叩き落とした。

「なっ……………!」

「確かにあなたの兵士の毒は恐ろしい……………ですが、当たらなければどうって事ありません」

それだけ言うとルナはビードローパントの頭を腕を伸ばし掴んでビードローパントに近づいた。

「ぐお！」

「はっ！」

ルナは回し蹴りの要領でそのまま右足を伸ばし何度もビードローパントに叩きつけた。

「う……ああ」

「まだまだ行きますよ！」

それからルナは何度も体を回転させながらその度に両手足を鞭のように伸ばしながらビードローパントに叩きつけた。

「くそがあ！」

ビードローパントは負けじと腕から針を何発も打ち出した。

「無駄だと言ってます」

そんなビードローパントの針をルナは伸ばした腕ですべて叩き落とした。

「う……そだろ」

「これで終わりにします」

そう言うとルナはルナメモリを抜き、右腰のマキシマムスロットに挿入した。

『LUNA MAXIMUM DRIVE』

ルナの体は六体に分身した。

「増え……！」

「さあ、終わりです」

分身した三体は腕を伸ばしビードーパントに叩きつけた。そして残りの三体はビードーパントに近づきクロスチョップを叩きつけた。

「ぐああああああああ！！！」

「目には目を歯には歯を、悪には永久の懺悔を」

ビードーパントは爆発し、煙が晴れた後一人の男とメモリブレイクされたビーメモリが落ちていた。

「さてと……」

すずかは変身を解くと、ローブの中から通信端末を取りだし零に連絡した。

「……………あつもしもし零君？……………うん倒した……………大丈夫だよ。メモリの相性も良かったし……………うんじゃあ犯人はいつも通り管理局に……………そう、この人”エデン”の人間じゃ無い」

”エデン”はメモリの実験の為、組織の人間以外も売人^{バイザー}の手を通じて売られている。そんな事件の場合は管理局のガイアメモリ担当の人間に引き渡し、逆に”エデン”関係者の場合はR e e C ? D E 本部に連行し”エデン”の情報を引き出すために尋問する。専ら^{もっぱら}その

役目はネバールがやっているのだが。

「じゃあ……………うん、本部に戻るね……………!？」

突如視線を感じ、ぱっと辺りを見渡すすずか。しかし辺りにはビードーパントの男が倒れているだけだった。

「……………うん何でもなし。じゃあまた後で……………うん」

通信端末を切るとすずかは再び辺りを見渡した。

(確かに感じたんだけど……………誰もいない……………)

すずかは首をひねるが管理局員の声が遠くから聞こえてきたので急いでその場を後にした。

「……………驚いたな。気づくとは……………」

ショッピングモールから少し離れたビルの屋上から処刑人アサシンのドーナツがすずかを見下ろしていた。

今回は”エデン”の命令では無く独断ですずかを見に行ったのである。

「……………しかし、組織は何を考えている？」

前々から処刑人アサシンは組織の考えについて行けない事がある。前回のリニアールの時もそうだ。やろうと思えば自分はエターナル一人ぐらいならば何とか倒せる。にも関わらず組織は手を出さなくて良い

と言った。

「……………組織はわざと泳がせている？」

「……………ここにいましたか」

処刑人アサシンの後ろから足音が聞こえてきて後ろを振り向くと後ろで手を組んでこちらに来る幹部の男……………カルマがいた。

「……………何の用だ？今日は……………仕事が入っていないはずだ……………」

「いえいえ。あなたが任務以外でこういった場所に行くのが珍しいので」

どうだかと処刑人アサシンは内心毒づく。元々この男はこの世界に来てからの幹部で普段から何を考えているのかわからない男なのだ。しかし、組織の新参の幹部にしては組織の運用を一部組織のトップから任されるほど信頼されている男なのだ。

「なるほどあれがRe—C？DEの一人ですか」

双眼鏡なども使わず肉眼だけでそれを確認したカルマアサシンに処刑人は少なからず驚いていた。

（こいつ一体……………何者だ？）

「さてと……………私もそろそろ戻らないといけませんね。あれらを開発するために」

「……………あれ？」

「ええ。エターナルが残した遺産の一つですよ。あれが完成すれば中々おもしろいことになりますよ？」

ニヤリと笑うカルマに色んな死線をくぐり抜けた自分が少しぞくりとした。

（なんだこの男……………一体）

「ではまた仕事が入ったら連絡します」

カルマはそれだけ言うのとビルの屋上に通じるドアに向かって行った。

「……………T2に唯一対抗出来る”R2”……………もつとも今はまだまだ試作段階のR1ですがね」

カルマはスーツのポケットから一本のメモリを取り出した。それは”エデン”幹部が使うゴールドメモリでは無く、零達が使うT2にそっくりで違うのは端子の色が青色では無くプラチナ端子で、漆黒の翼のような形でLと書かれたメモリだった。

『LUCIFER』

とある管理外世界。そこではその世界の政治を制するために二つの勢力が長年争い続けており泥沼状態となっている。そんな管理外世界だが今戦争が終わろうとしている。一つの傭兵部隊により。

「第五部隊壊滅！！」

「第三部隊も壊滅！！」

「バカな！！AAAランクの魔導士が三人もいるんだぞ」

司令塔で次々来る報告に司令官は悲鳴に近い声を挙げる。

どうしてこうなった。そんな事を考えながら司令官は今回の戦闘の事について思い返していた。

今回の戦闘で敵側がこの泥沼状態を打開するために傭兵部隊を雇ったという情報を手に入れた。部隊名まではわからず、人数は少数精鋭部隊であったためたいしたことは無いと思っていたが……………

「駄目です！！第六部隊とも連絡が取れません！！！」

「くそ！！どうなっている」

次々と自分達の陣営の部隊がやられていく様である。わかっている情報はその傭兵部隊は質量兵器を使っており、さらにどんな攻撃を受けても死なない事。

（くそ！一体何のどこの傭兵だ）

司令官が考えていると通信係から再び連絡が来た。

「てっ……………敵部隊まっすぐこちらに向かっているとのこと！！！」

「！！何だと！？」

直ぐにこの司令塔の一階の映像を出すと次々に一階を守っている部隊員が同じジャケットを着ている者達によって殺されている。

そしてジャケットを着ている者の一人が監視カメラの方を向きニヤリと笑った。

ぞくりとその目の奥に宿っている狂気に震える司令官。笑った後その者は拳銃で監視カメラを撃ったため、映像は砂嵐みだいになった。

「さっ……………さっさと奴らを殺せ！！早く！！！」

司令官は怯えたように声をあげた。

しかし司令官の願いは空しく、次々とその階を守る魔導士はやられていきついに彼らはついにこの司令室にたどり着いた。

「よお。あんたがここの司令官だな？」

まるで旧友に会ったかのような親しさで話掛けてくるリーダーらしき男。

「まあ、以外とイケメンね！！嫌いじゃないわ！！」

厳ついおっさんの筈なのに女口調で話す男。

「おい克己！さっさと終わらせようぜ！」

「まあ待て……………なああんたに聞きたいことがあるんだが」

リーダーらしき男……………克己と呼ばれた男が司令官に向かって歩き始めた。

「うわあああああ！！来るなあ！！」

司令官は半狂乱になりながらもデバイスを起動させ魔導弾を克己に撃った。

全弾克己に当たったが……………

「……………良い腕してんな」

何故かけろっとしている。司令官は驚愕した。
デバイスには殺傷設定と非殺傷設定という物がある。当然戦争中な

ので司令官も殺傷設定だ。なのにこの男は血も流さずけろっとして
いる。

「何で……………」

「はっ…………なあ、この写真の小さい方のガキ見たこと無いか？」

克己は司令官の顔面の近くに写真をつきだした。

「しっ……………知らない」

「あっそ。じゃあ……………死ね」

写真を戻すと克己は一瞬で司令官の眉間に拳銃を突きつけて迷い無
く撃った。

パアアン！！

司令官は気づくまもなく絶命した。

「何だよ克己……………またやっちゃったのか」

すでにその場にいた者達は克己以外のメンバーによって克己が話し
ている途中で殺害された。

「まあいいじゃない。克己ちゃんも色々あるんでしょ」

オカマの男がクネクネしながら言う。

「……………もうここに用は無い。行くぞ」

克己は本当に興味なさそうに出口に向かった。他のメンバーも相互

い肩をすくめて、克己に続いた。

克己は司令塔を出ると、ポケットから何かのスイッチを取り出し、ある程度離れると押した。

ドカン！！！！！！

すであちらこちらから煙りを出している司令塔から一際大きな爆発が起こり、司令塔は崩壊していった。

「うわ……克己えげつねえな」

克己はその言葉に応えずただただ写真を見つめていた。

「前々から思っただけけどその写真って誰が映っているの？」

メンバーの一人真っ赤な髪をした女性が質問した。

「お前達が気にする事じゃ無い」

克己は写真を見つめながら答えた。

「お前達は先に帰っている」

克己の言葉にメンバーは反論することもなくそのまま行った。

「……………零。お前はどこにいるんだ？」

写真を見つめながら克己は呟いた。

その写真には少年時代の克己と小さい無表情の零が映っていた。

EPISODE 9 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待っています。

R2は自分のオリジナルです。

あとアンケートを後書きのほうでやっているのによかったら見てください

EPISODE 10 (前書き)

お久しぶりです。今回は中々ネタが浮かびませんでした

EPISODE 10

「なるほど、うん報告ありがとうすーちゃん」

Re-C? DE本部の零の自室で零はすずかから今回の件の報告を聞いていた。

「うん……………」

すずかはどこか浮かない顔で言った。

「?どうしたのすーちゃん」

「えっうん何でも無いよ」

そう言うがすずかの顔は晴れない。

「仕事で何かあったの……………」

「そういうわけでは無いんだけど」

「いやいやそれは無いでしょ?」

エミリオンはそう言うがすずかは黙っているだけだ。

「どうしたのさすーちゃん。言ってみてよ」

「実は……………」

「視線ね……………」

すずかが感じた視線の事を聞くと零は手をあごに当てて目を閉じて

じつくりと考えた。しばらくそうしているとやがて目を開けた。

「もしかしたら処刑人アサシンかもしれない」

「処刑人？」

「うん……………ん？ああ、すーちゃん知らないんだっけ処刑人アサシンの事？」

「えっ、うっうん。何それ？」

「処刑人アサシンってのは文字通り処刑人のドーパント事さ。おそらく秘密保持のため組織の敗北者達を殺す奴の事さ」

「殺すって……………」

「まあ連中は秘密主義の組織だからね」

肩をすくめながら零は答えた。

「そう……………それでなんのメモリを使っているの？」

「わからない」

「……………へ？」

予想外の答えに一瞬すずかの頭をフリーズしたが、直ぐに我に返り、

「わっわからないって零君どういう事！？」

零に詰め寄った。

「おっ落ち着いてすーちゃん」

まあまあとすずかを落ち着かせる零。

「僕だっアサて調べたいけど情報が少なすぎるんだ。実際僕たちは処刑人シンの姿さえ見たことが無いんだから。男か女かもわからないし」

ため息をつきながら言う零。

「そうなんだ……………」

「まあ今度出てきたら絶対にその姿見るけどね」

ニヤリと笑う零にすずかとエミリオンは唯苦笑するしかなかった。

「さてと……………なんかニュースやってないかな」

そう言うときエミリオンは零の自室にあるテレビをつけた。

『ご覧ください！ミッドタワーもすでに完成間近。式典も予定通りの日程で行われるそうです』

テレビにはレポーターらしき人物がでかいタワーの前に立っており、どうやらそのタワーの説明をしているようだった。

「何だいミッドタワーって？」

「知らないの零君？今ミッドでは有名なんだよ。こないだ買い物に行ったら色んな店でキャンペーンをやっていたよ」

「そうだよ王様！ミッドの住人で知らないの王様ぐらいじゃない？」

「うっ……………しつ仕方ないだろ。僕はあまり本部（くさくさ）から出られないんだから」

その言葉にすずかと常にニコニコしているエミリオンは表情を曇らせた。“エデン”はあらゆる所に密偵を放っている。それこそ人通りが多いところや、人が少ないところも。零は“エデン”にとって無くてはならない存在故、その身柄は常に狙われている。なので零が外出するときは仕事をするとき以外殆ど無い。管理局との交渉も

ヴェントとかを通じてしている。

「ほ……………他にも何かニュースやってないかな？」

すずかは話題を変えるために、エミリオンに質問する。

「ええつとね〜どうだろ」

『臨時ニュースをお伝えします。第17管理外世界で起きていた紛争がついに終末を迎えました』

「あれ、この世界、紛争終わったの!？」

すずかが驚きの声をあげる。何せこの世界の紛争は何年もそれこそ零達が生まれてくる前から起きている物だ。驚くのも無理は無い。

「一体何が決まり手だったんだろうね〜」

エミリオンも不思議そうな声を挙げる。

『まだ確定情報ではありませんが勝利した陣営はある傭兵部隊を雇ったという情報です』

傭兵という言葉にピクツと零は反応した。

『あ、たった今入ってきました情報によりますと傭兵部隊の名前まではわかりませんが、現場での写真が入手出来たものと言う事を出します。こちらです』

そう言うモニターに写真が映った。画像少しぼやけていて顔はわ

かりづらいが確かに何人かの顔が映っている。

ドタン！！

大きな音がしてその方向にすずかとエミリオンが向くと、零が立ち上がり、その反動で椅子が倒れた音だった。

「どうしたの零君？」

すずかが言葉を掛け零の顔を見ると言葉を失った。何故なら普段は冷静沈着で常に落ち着いている零は驚きの表情をしているから。

「……………止めて」

「えっ？」

「写真で映像を止めて！！」

零の剣幕に押されながらもエミリオンはモニターを写真で止めた。そして零はそのままモニターに近づき写真を凝視した。

「れっ零君……………？」

「どうして……………君がそこにいる？」

「王様……………？」

「何故だ……………克己……………！！！！」

ふらふらと壁に近づきそして思いっきり壁を殴った。

「……………って何しているの！？」

一瞬零の行動が理解出来なかったがやがて我に返り慌ててすずかは零に駆け寄った。

「ちょっと零君！」

「大丈夫だよ……………またすぐに治る」

その言葉通り零の拳は血が滲んでいたがすでに治りかけていた。

「そうだけど……………でも一体何が……………」

「ごめん……………ちょっと一人にしてくれないかな……………」

弱々しく言う零にすずかは声を掛けようとするが、肩を掴まれて後ろを振り向くとエミリオンが静かに首を振っていた。

「じゃあ零君……………夕飯までには来てね？」

その言葉に零は返さず、そのまますずかとエミリオンは部屋から出て行った。

ボタン！

一人になった零は大きく息を吐いた。

「はあ……………まさかこんな場面で君を見るなんてね……………ねえ克己」

モニターに映る赤いメッシュを所々に入れている黒髪の青年とポケットから取り出した常に大事にしている写真に写っている少年を見比べながら零は静かに呟いた。

「ん？」

「どうしたの克己ちゃん？」

「いや……………誰か……………懐かしい奴に呼ばれた気がしてな」

とある倉庫、そこは克己達傭兵部隊NEVERの秘密の隠れ家の一つだった。

「あらそう……………それより克己ちゃん！次はどここの戦場行く？」

体をクネクネしながら克己に聞くオカマ……………泉京水が聞いた。

「そうだぜ。克己！早く戦いたくて体がうずうずしているぜ！」

そう言うのは普通の人間よりも何倍もでかい大男、雷全だった。

「あんた達少しは静かにしなさいよ」

倉庫の一室から出てきたのは赤髪の女性、ネリルがうるさそうに言った。

「何だよネリル！お前つれないなあ」

「うっさい。あんた達がうるさいせいでバイクの点検が中々進まないのよ。どうしてくれるのよ」

「まあまあ……………てあれコウは？」

京水が辺りを見渡すがもう一人のNEVERのメンバーがいなかった。

「ああ……………コウならあそこよ」

ネリルが指さした場所を見ると、大量につまれているコンテナの上に一人の青年、コウが無表情でライフルを磨いていた。

「おいコウ！なにしてんだ？」

「……………銃を磨いている見ればわかるだろ？」

「そりゃそうだな」

ガラガラ

倉庫の扉が開く音がして全員ぱっと扉の方を見た。

「あれ、みんないたんだ」

入ってきたのはNEVERのジャケットでは無く普通の私服を着ている青年だった。それを見た五人は警戒を解いた。

「何だ、マキベルか。驚かせるなよ」

「全くだ……………それで何かあったのか？」

克己が寝っ転がっていたソファーから降りてマキベルの方に歩いて行った。

「とりあえず、依頼の方は結構入ってきたね。後は……………例の物だ」

「……………R2か？」

「うん。まずはやっぱりまだ出来ていないそうだよ。未だ試作段階を超えていないそうだよ」

「当然だ零の残した物だぞ？そう簡単に作られてたまるか」

ニヤリと笑う克己はどこか楽しそうだ。

「克己はホントにその”零”って人が好きなんだね」

「まあな……………」

そんな克己を見て他のメンバーはひそひそと言葉を交わしていた。

「あの克己ちゃんがあそこまで評価するなんて……………」

「全くだぜ……………なあ、誰か零って奴知らないのかよ」

「さあ？私は知らないわよ。コウは？」

「……………同じく知らない」

そうNEVERメンバー克己以外”零”という人物について知らないのである。何度か克己質問してみたこともあるがその度に、

お前達は知らなくていい

そう言って答えずにいた。克己にはあまり強く出られないので、メンバーはあまり深く聞かなかったのだが、

「けどよ、克己の奴はR2はその”零”って奴が作ったって言ったよな」

「そうねえ。それだけだとガイアメモリの関係者かしら？」

「……………関係者ってレベルじゃ無いよ」

『うわー!!』

いつの間にかマキベルが近くまで来ていた。

「マキベル……………驚かせるなよ。つうか、お前”零”って奴知っているのか？」

「うん……………一度だけ克己と飲んできたとき克己が漏らしたんだ」

『しかし、皮肉なものだな』

『何がだよ克己?』

『いや……………この俺がガイアメモリを求めるなんてな』

『ちよつと……………僕結構必死に情報を集めているんだよ? 今更やめろなんて言ったら殴るからね?』

『そうは言っていない。唯零が作った物を使うのかと思ってな』

『へ……………?』

『ん? 何だどうした?』

『いや……………克己……………” 零” って人がガイアメモリを作ったの?』

『ああ。そうだぞ』

「……………って訳なんだ」

「おいおい……………」

「あらまあ克己ちゃんたらすごい交友関係ね」

「それより肝心の克己は?」

「……………資料らしき書類を持って部屋に戻った」

すでにその場に克己はおらず、メンバーは各々散っていった。

「全くマキベルの奴余計な事しゃべりやがって……………」

自室のデスクの上で足を組んでいる克己は外の会話を聞き、舌打ちしていた。

その後しばらくマキベルの報告書を読んでいた。

パラ……………パラ……………

紙を捲る音だけがしていた。やがて飽きたのか、書類を机に放った。

「はあ……たいした情報も無いな………」

内容が自分の期待した物が全然無くがっかりした様子だった。

「……………なあ、零お前は一体どこにいるんだ？」

克己は天井に顔を向けて静かに呟いた。

同じ頃零も自室の天井に顔を向けていた。

「克己……どこにいるんだい？」

「もし次に会ったら……………」

「もし今度会ったら……………」

「俺が……お前を………」

「僕が……君を………」

『殺す』

EPISODE 10 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待ってます。あとアンケートまだやって
いるので活動報告の方をみてください

ビギンズナイト（前書き）

十話行ったことと、PVが二万超えた記念に零とすずかの出会いを書きました

ビギンズナイト

「綺麗な瞳だね」

「えっ？」

今日初めて会った男の子は女の子の顔を見てこう言った。

「綺麗……………」

「うん。すごく綺麗」

すると男の子はいきなり女の子の頬を両手で挟み込み自分の顔に近づけた。

「ふえ！？」

「うーん。近くで見るともっと綺麗だな」

近くで話していた男性が気づき少年を少女から放した。

「うわ…………！何するんだい義父さん」

「お前……………初対面の女の子の顔をいきなり触っちゃ駄目だろ？」

「……………ああ。わかったか？……………零」

「はい」

「全く……………すまない大丈夫かな……………すずか嬢」

「はっはい」

顔を少し赤くしながら女の子……………すずかは言った。

これが夢埜零と当時七歳の月村すずかの出会いだった。

「しかし……おもしろい子ですね」

月村邸の一室、そこには二人の男女とメイドが一人いた。

「まあな。扱い方が少し大変だ」

「あら……ハードボイルドなあなたがそんな事を言うなんておもしろいですね」

白いスーツを着た男……夢埜莊吉のぼやきに対面に座っている女性……月村忍は紅茶を飲みながらクスリと笑った。

夢埜莊吉と月村忍、探偵とご令嬢。何の接点もなさそうな二人だがそれなりの親交がある。

以前とある事件に巻き込まれた忍を助けたのが莊吉なのである。それ以来の仲なのである。

「さてと……あの子何なんですか？」

「……………」

あの子とはすずかと一緒に近くの公園に遊びに行った零の事だろう。忍も莊吉がかなり危険な仕事をしていることは知っている。その延長線で零を保護したのかも知れない。しかし、莊吉は零を養子と言った。莊吉が子供を引き取るとはよほどの事なのだろう。

「……………あの子は俺のある依頼人の願いで救い出された子だ。そして、あの子には特別な力を持っている」

「特別な力？」

ボタン！

大きな音がしてそちらの方を向くと扉を開けて肩で息をしているメイドがいた。

「どうしたの？」

忍がそのメイドに近づきどうしたのかと聞くと、

「申し訳……………ごいません……………忍お嬢様。すずかお嬢様と零様が……………誘拐されました」
『!?!』

その言葉に忍と荘吉は驚きを隠せなかった。

「何をしていたの!?! いくらあなたが一人とはいええそんな……………!」

「それがお嬢様……………誘拐犯の一人がUSBメモリみたいな物を取り出し、そのスイッチを押し体に差し込むと変な怪物になって……………」

「変な怪物……………?」

USBメモリという単語に反応した荘吉はスーツの内ポケットから写真を取りだしそのメイドに見せた。

「すまない……………犯人が使ったメモリとはこういうのか？」

荘吉が見せた写真にはどこか化石を連想させるデザインのメモリだった。

「あっそうです!! ことです!」

「莊吉さん……………」

「やはりガイアメモリか……」

今は使われていない廃ビル。その最上階ですずかと零は捕まっていた。

二人とも拘束などは一切されていないが、周りには銃などで武装された男達がいるため逃げ出せない。すずかは怯え零にしがみついていたが、しがみつかれている零は些かの恐怖も見せず、むしろ犯人達を興味深そうに見ていた。

「はっはっは!! ボスやりましたね!」

「ああ。これで月村家から金をぶんどってやる!」

犯人達は下品な笑い声をビルに響きかせた。

「零君……どうしよう?」

「大丈夫さ月村すずか。直ぐにでも義父さんが迎えに来てくれるさ」

不安がるすずかに零は安心させるように言う。

「おいおい何だ坊主! かっこつけやがって」

すると犯人の一人がニヤニヤ笑いながらこちらにやってきた。すずかはひっと短い悲鳴を上げ、零の後ろに隠れてしまった。

「何だい? 僕達に構う暇があるなら拳銃持ってニヤニヤしていなよ」
「お前それ変な人じゃねえか!」

「安心したまえ七歳の少女を誘拐している時点で既に変態だ」

「ちげえよ！金銭目的だよ！」

「そうかな？本当は口で始まってンで終わる……………」

「ちーがーうー！俺はノーマルだー！」

犯人の一人をいじくり回して楽しんでいる零。すずかの目にはものすごく腹黒そうな笑みを浮かべていた。

正直なところすずかはこの夢埜零と言う少年がよくわからなかった。もっともついさっきあったばかりなのでそう簡単にわかるわけでは無いのだが、この少年は既に自分ぐらいの年齢ならば体験していることも

ものすごく興味を持ち、目をきらきらさせながらしてるのだ。

「おい、何やっているんだ」

「ボス！」

ボスと呼ばれるこのグループのリーダーらしき存在がこちらに近づいて来た。

「けっガキはおとなしくしていりゃあ良いんだよ」

「何ともまあ汚い言葉使いだ」

「れっ零君」

零は小馬鹿にしたような目でボスの方を見る。そんな零を見てすずかは慌てた。

「テメエ……………なめてんじゃねえぞ。そもそも月村の穰さんしか知らないからなお前は見せしめで殺してやるよ」

そう言うと男はポケットから零達を誘拐するときに使ったUSBメ

メモリ……ガイアメモリを取り出した。

「へえガイアメモリを使うのかい？」

「ほお………お前みたいなガキがガイアメモリの存在を知っているなんてな。じゃあ………これがどういう使い方をするかわかるよな？」

『MAGMA』

ガイアメモリを起動させ、右腕にあるコネクタに挿入し、ボスはマグマの記憶を宿したドーパト………マグマドーパントに変わった。

「ひっ！」

再び自分の前に現れた怪物にすずかは短い悲鳴を上げ、零にしがみついた。しがみつかれた零は唯々じっとマグマドーパントを見つめた。

「ねえ、月村すずか」

「なっ何？」

「もし君が望むならばこのドーパントを僕が斃^{たお}してあげよう」

「えっ？」

「だからさここから助かりたい？」

「助かりたいけど………無理だよ！！あんな怪物相手に………」

そうすずかが言うとき零はくっくつと笑った。

「零君………？」

「いや、ごめんごめん。あいつが怪物なら僕は……悪魔さ」

「え………？」

「さてと月村すずか。君は決断しないのか？」

「決断……？」

「そうだ。僕は……今まで自分で何かを決めて決断した事が無い。それが僕の………罪の一つ」

「罪………」

「そして、僕は”あの日”決断を迫られた。そして僕は生まれて初めて決断したんだ」

「零君……」

「さあ、月村すずか君はどういう決断をする？」

零の眼鏡越しの目はすずかの顔を黙って射貫いた。

「……………けて」

「何？」

「助けて！零君！！」

「わかったよ……すーちゃん」

「話は終わったか？」

「ああ。君を斃^{たお}す相談がな」

「笑わすな！！ガキのお前に何が出来る！！」

「どうかな？」

そう言うとき零はどこから取り出したのかロストドライバーを取りだし、そして首から提げている袋からメモリ……エターナルメモリを取り出した。

『ETERNAL』

「ガイアメモリだ！？何でお前みたいなガキが持っている！？」

「さあ……何でだろう」

『ETERNAL』

「変……身」

零はドライバーにエターナルメモリを挿入そのまま右に展開した。

『ETERNAL』

すると零の体は風に包まれてエターナルに姿を変えていった。しかし通常時のエターナルと違い、腕のアングルは青い炎では無く赤い炎。胸と右腕と左腿^{もも}のあるマキシマムスロットは無くローブも無い。そして変身じに赤い炎が上がった。

エターナル・レッドフレア。これがこのエターナルの状態である。

「何だそれは……………?」

「零君……………」

マグマドーパントとすずかは信じられないような目でエターナルを見る。他の犯人達も同じ気持ちのようだ。

「ん?このエターナル……………まだ完全では無いな」

そんな周りの視線を気にせず、エターナルは自分の体を見た。

「なっ何なんだお前!?!」

「うん?ああ、これはエターナルだよ」

「エターナル……………」

「うん…………エターナル、いずれ全てのガイアメモリを支配する存在さ」

「いずれ全てのガイアメモリを支配する存在だと……………ふざけんじゃあねえ!!」

マグマドーパントはエターナルの言葉が気に入らなかったのか、激昂し火炎弾をエターナルとすずか目掛けて打ち込んだ。

「ちょっとボス!何してんですか!?月村すずかも一緒に殺しちゃ意味ないでしょ!」

「うるせえ!!あのガキぶっ飛ばす!!」

部下の言葉に耳も貸さずどんどん火炎弾を打ち込んでいった。やがて辺りを煙が覆い、何も見えなくなっていた。

「はあはあ、これでどう……………」

マグマドーパントは煙が晴れた場所を見て言葉を失った。何故ならばそこにはすずかの前で片膝をつき、腕をクロスさせたエターナルとその後ろに無傷のすずかがいた。

「バカな……………」

「……………はは、すごいや。わかるよ、このエターナルは僕が使っていたれば、やがて全てのメモリの王者の力を発揮する」

「零君……………」

「大丈夫かいすーちゃん?」

「うっうん」

「それは良かった」

それだけ言うとエターナルは立ち上がり、マグマドーパントに向かった。

「このガキ！」

再びマグマドローパントは火炎弾をエターナルに打ち込んだ。

「考えが無いね!!」

エターナルは全て躲し、マグマドローパントに接近した。

「何!!」

「はっ!!」

エターナルは両手に赤い炎を纏わせマグマドローパントにたたき込んだ。

「ぐあ!!」

『ボス!!』

手下どもが揃って声をあげる。

「おっおい……………やばいんじゃないか？」

「ああ……………まさかあのガキもガイアメモリを持っているなんて…………」

「こりゃ、逃げた方が……………」

「……………残念だが、逃がさんぞ」

『!!』

知らない声が聞こえて慌てて後ろを振り向くと、自分達の仲間の一人の肩を掴んでいる白スーツの男……………荘吉がいた。

「てめ……!!」

肩を掴まれている男は慌てて拳を莊吉に振りかぶったが、莊吉は難なく躲し、腹に右ストレートをぶち込んだ。

「ぐお………!!」

それだけで男は腹を抱えてしゃがみ込みうめいていた。

「さあ……お前達の罪を数えろ」

その言葉は犯人達にとって死刑宣告に聞こえた。

「くそがあ………」

マグマドーパーントはエターナルの猛攻になすすべ無く片膝について荒い息を吐いていた。

「さあ、これで終わりだ………」

『ETERNAL MAXIMUM DRIVE』

エターナルは腰のマキシマムスロットにエターナルメモリを挿入するとエターナルの右足に赤い炎が渦巻き始めた。

「このガキがあ………」

マグマドーパーントは考えもなくそのままエターナルに突っ込んだ。

「バカだね……………」

エターナルもマグマドーパントに向かって走り出し、そのままジャンプした。そして右足で思いっきり蹴りを打ち込んだ。

「ぐおおお！！」

「さあ、お前の罪を数えろ」

マグマドーパントは爆発し、後に残ったのは倒れているボスと呼ばれた主犯格とメモリブレイクされたメモリだけだった。
すずかはエターナルを見て不覚にもこう思った。

かっこいいと

「大丈夫かい？すーちゃん」

エターナルは変身を解除しながらすずかの元に歩いて行った。

「うん……………大丈夫だよ」

「そう、それは良かった」

クスリと笑う零の顔を見るとすずかはかあと顔が赤くなるのを感じ、顔を背けた。

「？どうしたのすーちゃん」

「なっ何でも無いよ」

「それなら良いけど……………」

（どうしたんだろ私……………零君顔を見ると顔が赤くなっちゃう）

「そっそれにしてもすごかったね……………零君」

「ん？ああ、別にこんなの対したこと無いよ……唯の悪魔の力さ」
「えっ？」

すずかは零の顔を見ると、わずかに悲しみの色が出ていた。

『零！忘れるなよ……お前は俺と同じ悪魔だと言う事を』

（克己……………）

「……違うよ」

「えっ」

「零君の力は悪魔なんかじゃ無い」

「すーちゃん……………」

「だって私を助けてくれたでしょ？だから零君は私の英雄だよ」
ヒーロー

にっこりと笑うすずかに零は言葉を失った。そして、

「……………」

「どうしたの零君？」

泣いていた。膝をつき唯々泣いていた。

「うっあっ……………」

ギュム

すずかは零を抱きしめて頭を撫でた。

「えっと…………大丈夫だよ…………大丈夫だから…………」

泣き続ける零をすずかは子供をあやすかのようになで続けた。そんな二人を莊吉は黙って見つめていた。

ビギンズナイト（後書き）

いかがでしょうか？感想とか待っています。

こないだWの映画をDVD借りて久しぶりに見ました。リターンズ見た後ではNEVERの印象が変わりますね

EPISODE 1 (前書き)

い 最近、オリジナル作品書いているんですか、中々文章が思いつかな

EPISODE 1

森が生い茂る場所。その道にバイクと自動車が走っていた。

「ちょっと……ネバール！あんた運転……」

「……………」

車の助手席に座っているアリサは運転している青年……ネバールに声を掛けるが、ネバールは聞こえてないようでそのまま運転していた。

「ちょっとネバール！！もっと運転しつかりやりなさい！」

ネバールの運転は非常に荒く、ネバール本人は何とも無いが、他に乗っている者は必ずと言っていいほど酔う。アリサも例外ではない。

「……………何？」

ようやく聞こえたらしく、ネバールはアリサの方を向いた。

「だーかーら！運転をしつかり……きゃ！」

いきなり大きく車が揺れアリサは短い悲鳴を上げた。

「こら！危ないでしょ！」

「……………問題無い」

「問題大ありよ！！て……うふ、気持ち悪くなってきた……………」

何でこうなったとアリサはつい数時間前の事を思い出していた。

「ホテル・アグスタの警備？」

「せや」

部隊長室に呼ばれたアリサ達ははやてから新たな仕事の説明を受けていた。

「ホテル・アグスタって確か、富豪とかの避暑地で有名なあそこでしょ？」

「うん。実はなホテル・アグスタで大規模なオークションが行われるんやけど、その中にはロストログアも含まれているんや」

「ああ……何とか無く読めてきたわよ」

アリサははやてが言うとしていることが何となくわかってきてジト目ではやてを見る。

「いやあ三人にホテルの警備を頼みたいんや」

頭をかきながらあはははと笑うはやてにアリサはため息をついた。

「はやて………わかっていると思うけど私達Re-C?DEは存在を隠さないといけない存在なのよ？そんなホテルなんてたくさん人が来るようなところで大それた事出来ないわよ」

Re-C?DEは”エデン”に対抗するためにその存在は秘匿されている。知っているのは管理局のほんの一握りだけだ。

「それはわかっているんやけど………実はな、そのロストログアの中にレリックがあると勘違いして”エデン”が来るかも知れないや」

”エデン”が？」

自分達が相手する組織の名前を聞いて、話を殆ど聞いていなかった。エントとネバールも話に耳を傾けた。

「けど……レリックは無いんでしょ？ だったら”エデン”が来るとは限らないんじゃない……」

そう言うアリサだがネバールは何か気づいたらしく珍しく口を開いた。

「成る程………嘘の情報を流したな」

あっと言うアリサとふっと笑うヴェント。そんな二人にはやてはにやりと笑った。

「せや……数日前からホテル・アグスタにレリックが運ばれると言う偽情報を流したんや」

「成る程ね………現在、”エデン”はあまり動いていない。だからこそ何かアクションが欲しいわね……」

「そこで偽情報で誘き出し、組織の人間を捕まえるという訳か」

二人とも納得したように言う。

「で………誰の知恵だ」

くっくつと笑っているはやて顔がヴェントの一言で固まった。

「なっ何言っているんや？ヴェントさん」

「お前が”エデン”相手に自分で考えてこういう事が出来るとは思えん。大方誰かの入れ知恵だろう」

冷や汗をかくはやてにヴェントは追い打ちを掛ける。

「まあ十中八九、零だろう」

その言葉にはやてはぎくりとしていた。

「はやて……………」

アリサがジト目ではやての事を見つめる。

「あっはははは……………はいそうです。零君に相談しました」

最初は笑っていたが三人の視線に耐えられなかったのかはやては白状した。

「全くもう……………何で自分の手柄みたいに言ったの？」

「いやあ、零君に自分の考えにしていって言われたもんでつい……………」

頭をかきながらはははと笑うはやて。

そんなはやてを見て大きくため息をつくアリサだった。

「しかし、”エデン”は来るかしら？」

バイクと車もホテルの地下駐車場に停めた三人。アリサは顔を青くさせながら言った。

「どうだろうな、零の情報操作なら奴らも引つかかる可能性は大いにある」

ヴェントは酒瓶を取りだしながら言う。

ガシ！

「……何をする」

酒を飲もうとしたヴェントの手をアリサが掴む。

「あんた……いくら酒に強いからって飲むのやめなさい」
「断る」

「……即答ね」

ヴェントの酒好きに呆れるアリサ。

「ああ………三人ともここにいたのね」

後ろから声を掛けられて後ろを振り向くと金髪の白衣を着た女性……シャルがいた。

「シャルさん？何でここに」

「私も今回警備に参加するのよ」

「………医務官なのか？」

シャルは機動六課の医務官を務めているのだ。

「人手が足りないのよ……さてとこの話は置いて、三人の配置を教えようと思って」

話を変えるとシャルは三人の顔を見渡した。

「まず、ヴェントさんとネバルさんはホテル内で警護を、アリサちゃんは外でフォワードと一緒に警護をお願いね」

「ちよっと待ってください」

「何アリサちゃん？」

真っ先に異議を唱えたのはアリサだった。

「オークションってたくさんのお金持ちや上流階級の人が集まるんですよ？」

「ええ………」

「だったら……何でこの二人をホテル内に配置するんですか!？」

アリサの叫びももつとも言える。何せヴェントはヴェントで愛想が悪く、ネバルに至っては人間が持つ常識という物を一欠片も持ち合わせていない。そんな者達を社交辞令がモットーの場所に入れるなんて言語道断とアリサは思っている。

「さあ……はやてちゃんが決めたから………」

シャルも困ったように言う。

「……………」とアリサちゃんは言っていたけど……………」

「その心配は……………」

「無さそうだね」

ドレスに着替えたなのは、フェイト、はやてはある方向を見つめていた。そこにはたくさんの人が集まっており、その中央には二人いた。

言わずともヴェントとネバールである。しかも周りの人は全員女である。

ヴェントは緑色のワイシャツに黒スーツに黒ズボン、決め手に黒いサングラスを付けていた。

ネバールは青色のワイシャツにヴェントと同じ黒スーツに黒ズボン。長髪を首の後ろで束ねていた。

「しかし……………すごいなあ」

「うん……………」

はやてとなのはも感心と言うよりは呆れの方が大きいだろう。

「確かにあんなの私達、見たこと無いからね」

「せやな……………零君もこんなに無かったよね？」

零も中学時代はかなりモテていた。さすがにヴェント達までとはいかないが。

「ああ……………それはすずかちゃんの原因かな」

「すずかが？」

「うん……………零君って実はものすごく人気があるんだよ？」

「そうなの？確かにそこそこ人気だと思ったけどそこまでじゃあ……………」

フェイトの言葉になのははああと言う。

「そっか……フェイトちゃん知らないんだっけ。実はそれ全部すずかちゃんの仕業なんだけどね」

「すずかの？」

「うん……零君に近づく女子全部すずかちゃんが遠ざけていたから」

零君は全く気づいていなかったけどと付け加えた。

「そうなんだ……………」

「恋いは盲目っていうけどなあ……」

二人はすずかを思い浮かべて苦笑いしていた。

「へくし！」

「どうしたのすーちゃん？」

「風邪かな？」

「どうだろう？ 零君みたいに誰かが噂しているのかな」

一人の少女がくしゃみをしていたのは言うまでもない。

ホテルの外、その警備を任されたティアナは一人機動六課のメンバーについて考え込んでいた。
隊長陣の高町なのはは時空管理局のエースで、フェイト・T・ハラオウンは優秀な執務官で、八神はやてはSSランクの魔導師で四人の守護騎士を従えている。

自分のパートナーであるスバルは訓練校を主席で卒業し、エリオ

は十歳という幼い年齢ながらも陸戦Bランクで将来有望でキャロは竜を操るレアスキル。

そして極めつけにR e e C ? D Eと呼ばれるあのメンバーだ。ガイアメモリと呼ばれる道具を使い戦い、アリサとネバーはまだ戦った所を見たことは無いが、ヴェントはリミッター付きとはいえ副隊長のシグナムを斃したのだ。他の二人も同等の力を持っているのだろう。

結局ティアナは自分には何にも取り柄がない凡人と思ってしまう。

（関係無いわ！私は……兄さんの……ランスターの力を証明するだけよ！！！）

ホテルの外の一角でアリサはローブを纏いふてくされていた。

「もう……何で私が外の警備なのよ納得いかないわ」

すると、自身の端末が鳴りアリサは取り出した。

「誰だろう？」

通話ボタンを押すと、モニターが開いて連絡相手の顔が映った。

「ヤッホーアーちゃん。元気か……いい、ってなんだか機嫌悪そうだね……」

零だった。はあとため息をついて若干零を睨んだ。

「あんたの能天気そうな顔を見ていますますます悪くなったわ。後アーちゃん言うな」

ええ、と言う零を無視して話を続けるアリサ。

「所で、”エデン”は今回来るのかしら？」

「うーんどうだろうね。僕も巧妙な情報を流したんだけどね………」

「ふーん………って言うか聞いてよ零」

「どうしたのさ？」

「ホテルの警備何で私が外で、あの性格若干破綻している二人が中なのよ!？」

「それは僕が提案したからさ」

「………はい？」

アリサは一瞬零が何言っているのかわからなかった。

「だからさ、僕がアーちゃん達の配置決めただよ」

「………何ですって!？」

思わずモニターに叫ぶアリサ。ここに人がいたら確実に変人扱いだ。

「っ………いきなり大きな声出さないでよ」

「いやいや、何であんたが六課のでの私達の任務を配置を決められるのよ!？」

「えっ、実はこないだはーちゃんから連絡が来てさ」

「うんうん」

「アーちゃん達の配置どうしたらいいって連絡でさ」

「成る程、あとアーちゃん言うな」

「でさ、とりあえずなーちゃん達はホテル内で警護だって言うから

さ、男性陣が少ないからヴェント達を入れたんだ」

「……………何ですって？」

「いやあ、ヴェント達のスーツ姿見た？あれ、僕が手配したんだよね。二人には結構似合うと思ってさ」

「ねえ、零……………」

「何だいアーちゃん？」

「アーちゃん言うな……………つまりそんな理由で私は外でこんなローブを着て警備をしているわけ？」

「あのーアーちゃん？」

「……………だって」

「へっ？」

「私だってドレス着たかったわよー！！」

「えっ！？」

「零のバカーふざけんなー」

「えっちょ……………あっ何かすーちゃんが呼んでいるみたいだから切るね」

「って待ちなさ……………」

言い終わる前に零はさっさと切ってしまった。
アリサは肩をわなわな震わせて、天を仰いだ。

「零……………あんた絶対殴り飛ばす！！」

「うっ……………」

「どうしたの零君？」

「まずいな……………何でアーちゃんあんなに怒っていたんだろう？」

「はあ……………零君は女心をまるで理解していないね」

「えっ？」

「何でも無いよ……………」

ホテル内現在なのは達は二組に分かれて警備を行っている。

「そう言えばヴェントさんはいつRe—C?DE入ったんですか？」

一組目のなのはがヴェントに質問した。

「さあ……よく覚えていないな。気づいたらいた、みたいな感じだな」

「そっそうですか……………」

ヴェントの答えになのはは少し呆氣にとられた。

するとヴェントはワイシャツの中に指を入れたと思うと、中から古そうなペンダントを取り出した。

「それは……………」

「これか？今は亡き心友^{とも}の物だ」

「あっ……すみません」

「気にするな……元々これは心友が持っていた物を無断で持っている物だからな。……………唯、これはある意味では俺がRe—C?DEに入る切っ掛けを与えた物でもある」

「そうなんですか？」

「ああ……」

ペンダントを見ながら言うヴェント。サングラスに隠れている瞳の奥にはわずかに悲しみがあるようになのはは見えた。

一方同じ頃警備二組目のフェイト、はやて、ネバールは、

『……………』

沈黙している。

（フェットちゃん。何かしゃべってなあ）
（むっ無茶言わないでよはやて）

フェイトとはやては念話で話ながら、さっきから全くしゃべらないネバールの方を向いた。
相変わらず無表情で歩いていた。

正直なところフェイト達はネバールについてよくわかっていない。
他のR e — C ? D E メンバー……アリスは元々幼なじみで長い付き合いだし、ヴェントはシグナムとの試合以来、シグナムとよく組み手をしていた。そんな中ネバールは誰とも殆ど話さず、普段どこにいるかもよくわからない。

そんな中ネバールになついている者が一人だけいた。

はやてのユニゾンデバイスリインフォース・ツヴァイだ。初めて顔合わせしたときからリインは何故かネバールを気に入ったらしく、自身の仕事の休憩時はよくネバールの頭に乗っかっている。

リインは人見知りな所があるので初対面の者に懐く事はあまり無いので理由を聞いてみると、

『なんだか一緒にいると落ち着くのです』

だそうだ。

ネバール自身もあまりいやがっていないのでそのままなのだが、

(リイン……………どうやったらこの人と仲良くなれるんや?)

はやては心中、自分のユニゾンデバイスに呟いた。

EPISODE 11 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待ってます。次回はいよいよアリサ変身回です

EPISODE 12 (前書き)

最近オリジナル小説を書いています。こちらをメインに書いているのでいつ投稿になるかはわかりませんがそちらも投稿したら読んでみてください

EPISODE 12

「ふむ、どうやらここにはレリックは無さそうだねカルマ君」

「そうのようで」

ホテル・アグスタの中、二人の男が話していた。

一人は初老の男で見ただけでも高そうなスーツを着ているのがわかる。もう一方のカルマと呼ばれた男性は無表情で初老の男性に付き従っていた。

「うーむ……どうやら当てが外れたね」

「やはり、あの情報はダミーだったのでは？」

あの情報とは零が流した”ホテル・アグスタのオークション時にレリックと一緒に出展されるという情報だ。

「やはり、零の仕業かな……………」

初老の男性がため息をつきながら言った。

「それで、どうされます？我々は元々レリックがここにあると思いか来たのですから、帰りますか？」

カルマがそう提案すると初老の男性は首を振った。

「待ちたまえ、カルマ君。我々としてここに招待された身だぞ？そう簡単に帰るわけにはいかんよ」

「そうでした……申し訳ありません」

そう言うと二人はホテル内を歩き出した。

「……ローバンさん？ローバンさんじゃないですか！」

「おや……久しぶりだね」

ふと初老の男性……ローバンに声が掛けられて、その方向を振り向くとそのには数人の男女がいた。

「いやあ、久しぶりですな」

「はっはっはっ何、仕事が忙しくてね。中々休みが取れないんだよ」

「娘さんがいらっしゃるでしょ？そろそろお任せになられたらいかがですか？」

「何、まだまだ若い者に世代交代は早いよ」

「そうですか……おやそちらの方は？」

男性が苦笑しながら言うのとふと、カルマの方を向いた。

「ああ……彼は私の会社の人間でね、今回のオークションに付き合ってもらったんだよ」

「そうですか……初めまして」

「初めまして、カルマと申します」

手袋を付けた手でカルマは握手した。

しばらく談笑していると、カルマの端末に連絡が入った。

「失礼」

それだけ言うとカルマは少し離れて、なにやら話していた。やがてローバンの元に戻ると、耳の近くで言った。

「どうやらガジェットドローンが出現したらしいです」

「そうか……………」

ローバンは男達に断りを入れその場を後にし、カルマと歩きながら他人に言葉が聞こえないように話した。

「ふむ……カルマ君、今回連れてきたメンバーは何人だい？」

「二人です」

ふむと言いながら手をあごに当てて目を閉じて考え込むローバン。
やがて考えが纏まったらしく、目を開けた。

「よしカルマ君出してもらえるかい？」

「……………レリックは無いのですよ？」

さすがにカルマも今回はローバンの指示に少し異議を唱えた。

「なに、別にレリックが無くても構わないさ。彼らもこの警備に参加しているんだろ？」

「はい」

彼らとはRee-C?DEの事だ。既にあるつてからRee-C?DEがこの警備に参加する事は知っている。

「そうそう。マグレラ君も行くように言っといてくれ」

「幹部の一人を出すのですか？」

「ああ。そろそろ本格的にRee-C?DEを始末しようと思ってね」

「……………わかりました。では早速」

「ああ頼む」

カルマがマグレラに連絡を取っている所を見ながらローバンはあることを考えていた。

（零……お前は必ず私が手中に収める。必ずだ）

ホテルの外、アリサは自分に向かってくるガジェットを見ていた。

「ごめんなさい、アリサちゃん。私たちフォワードの方のサポートで精一杯で……」

モニター越しでシャルが申し訳なさそうに言った。

「あー気にしないで下さい。私一人でも大丈夫ですから」

対してアリサは問題なさそうに手をひらひらさせた。

「そう……なら良いけど……」

「あ、ガジェットが近づいてきたのでそろそろ通信切ります」

そう言うときアリサは通信を切った。

「さてと……あんた達、私の憂さ晴らしに付き合っただけだよ？」

アリサはローブの中からロストドライバーを取りだし、腰に巻いた。そして懐から赤い”H”と書かれたガイアメモリを取り出した。

『HEAT』

ヒートメモリを起動させると、そのままドライバーのスロットに挿入した。するとドライバーを中心に赤い波動が発生した。

「変身！」

『HEAT』

言葉と共にアリサはドライバーを右に展開した。すると、アリサの体は赤い炎に包まれて、やがて炎が消えるとそこには赤いボディに赤い複眼をしたガイアメモリの戦士が立っていた。

「仮面ライダー……ヒート」

ヒートはそう言う足に炎を纏わせた。

「はっ!!」

かけ声と共にヒートはガジェットに向かって走り出した。そして、一番自分に接近していたガジェットを思いつき蹴飛ばした。それだけでガジェットは爆発した。

「私さあ……今ものすごく機嫌悪いからさ……ぼこぼこにしてあげるわよ？」

ゆっくりとガジェットの方を向くヒート。その仮面の下でどう猛に笑っていた。

意志も感情も無いのに一瞬ガジェットはおびえたように動きを停止させた。しかしすぐさまヒートめがけて動き出した。

「ふっ……私だって……ドレス着たかったわよー！」

かなりどうしようも無い理由で戦っているヒートだった。

ホテル内ヴェントは零からのメールを見ていた。

「零君なんて……」

「どうやらドーパントが出たようだ。アリサの所に一体向かったようだ」

なのはに簡潔に答えるヴェント。残りのメールの内容を見て、一瞬眉をひそめた。

「ヴェントさん？」

「高町……俺とネバールも出る」

「えっ？」

「時間がない」

そう言うヴェントはさっさと歩き始めた。

「ちよっヴェントさん!？」

なのはの声を無視し、ヴェントはネバールに電話を掛けた。

「ネバール……零からのメールは見たな？」

「ええ……確認されたドーパントは二体。それも別方向から向かっている」

「さらに一体は幹部クラス……人気の無いところから来る奴はお前に任せる」

「……………わかりました」

通信を切るとヴェントは駆けだした。

ホテルの近くに現れたガジェットをスバル達フォワード陣は戦っていた。

「スバル、クロスシフトA行くわよ！」

「おう！」

スバルが前線に上がり、ウイングロードを展開した。ティアナはカートリッジを大量にロードし、足下にオレンジ色の魔方阵が展開された。

（証明するんだ……ランスターの弾丸に貫けないものは無いということ……！）

「クロスファイアシュート！」

ティアナの周りに展開された無数の魔力弾がガジェット目掛けて打ち出された。

その殆どはガジェットに当たったが、一発だけ逸れスバルに目掛けていった。

「え……」

唐突な事でスバルは反応出来ず、シールドも展開できなかった。その場にいた誰もが当たったと思ったが、

「ヴェ……ヴェントさん？」

スバルに当たる前にサイクロンに変身したヴェントが魔力弾を防いだのだ。

ヴィータが遅れてやってきてティアナに向かって怒鳴りつけた。

「このバカ！！味方撃ってどうする！！」

「あ……あ」

ティアナは呆然としていた。

「あの……ヴィータ副隊長………今のは……コンビネーションの内で……」

自分に当たりそうになったのにスバルは相棒の弁護をする。

「ふざけんなタコ！今のは直撃コースだよ！！」

そんなスバルもヴィータは怒鳴り散らす。

「……二人とも下がれ」

黙っていたサイクロンが言葉を発した。

「ヴェントさん……」

「味方さえ撃つような奴は戦場にて目障りだ。去れ」

ヴェントの今まで聞いた事がないような冷たい言葉にその場にいた者は言葉を失う。

「さてと……ヴィータよ。さっさと片付けるぞ」
「おっおう」

ホテルの裏側、そこにはスーツを着た男がぼんやりと突っ立っていた。

「はあ……やる気起きねえな。カルマの奴何でこんな所に俺を配置したんだろ?」

男はぶつくさ言いながら自分と同じ組織の幹部の事を思った。

正直なところ男はカルマの事がよくわからない。常に無表情でつつきにくだためだ。

「はあ、どうしよっかな」

「……見つけた」

「ん?」

後ろを振り向くとそこにはネバールが立っていた。

「あり……どちら様?」

「探したぞ”エデン”幹部の一人カミヤ・マグレア」

ネバールの言葉を聞き先ほどから浮かべていた気怠そうな態度は無く、獰猛な笑みを浮かべていた。

「へえ、もしかしてReeC?DE方?」

カミヤの質問には答えず、ネバールは腰にロストドライバーを装着した。

「黙りかよ。まあ、その腰のロストドライバーが証拠だな」

そう言うとかミヤはガイアドライバーを腰に装着し、自身が愛用するゴールドメモリを取り出した。

『SOUND』

ガイアメモリを起動させるとカミヤはドライバーにメモリを挿入した。

すると、辺りに音が奏で始め、やがてカミヤの体はサウンド・ドールパントになった。

「……………」

ネバールは無言のまま水色の”I”と書かれたメモリを取りだし、起動させた。

『ICE AGE』

そのままドライバーのスロットに挿入した。

「変身」

『ICE AGE』

右にドライバーを展開すると、ネバールの体が氷で覆われて、それが砕け散ると中には水色に白いラインが入ったガイアメモリの戦士がいた。

「それがお前の……………」

「仮面ライダー……アイス」

仮面ライダーアイスとサウンド。ドーパントの戦いはきって降ろされた。

「何よこいつら……全然相手にならないわね」

ヒートは仮面の下でやれやれとため息をついた。

その直後、

「!!」

ヒートは何か来るのを感じ、慌ててその場から動いた。すると、その場にエネルギー弾が撃ち込まれた。

「誰……」

よと言おうとしたヒートは敵の姿を見て言葉を失った。

異質

そのドーパントを表すならばそう表現するのが一番良いだろう。全身ドス黒く所々赤い紋様が入っており、さながら零のエターナルとは正反対の存在。

「あんた……一体……」

「……………Re—C?DEだな?」

無機質で中性的な声が辺りに響く。しかしヒートはその声を聞いて背筋が冷たくなった。

(何、こいつ……今まで戦ってきた奴とは何かが違う!)

アリスもこれまで様々なドーパントと戦ってきたがそれらのどのドーパントとも違う。そんな存在だ。

「悪いが……貴様を……処刑させて貰う」

「あんた……アサシン処刑人!？」

ヒートに近づいて来たアサシン処刑人は黒い炎を拳に纏わせてヒートに打ち込んだ。

「くっ!」

ヒートも腕に炎を纏わせて防御しようとするが、

「はっ!」

「きゃあ!」

アサシン処刑人の拳に打ち負かされてヒートは数メートル吹っ飛んだ。

(なっなんて力なの……………)

「終わり……だ」

処刑人^{アサシン}は黒い炎をヒートに打ち込んだ。

炎はヒートに直撃し、黒い炎の火柱が立った。

「たわいも……ない」

処刑人^{アサシン}はつまらなそうにその場を後にしようとした。

ヒュン！

「！！」

火柱からナイフが飛んできて、処刑人^{アサシン}は慌てて防御した。

ナイフは火柱の中に戻っていき、人影がゆらりと火柱の中に浮かび上がってきた。そして人影が思いつきり腕を振ると青い炎の波動が火柱を弾け飛ばせた。そして中から出てきたのは、

「エター……ナル」

ヒートを庇うようにエターナルが炎の中から出現した。

「零………あんた何でこんな所に」

「何……アーちゃんの方に来るドーパントが普通そうじゃ無かったから来たまでだよ」

「アーちゃん言うな……まあ助かったわ。けどよくすすかが許可したわね」

その言葉にギクとなったエターナル。

「あんた……すずか達に内緒で来たわね？」

「しっ……仕方ないじゃ無いか！」

「……おい」

苛立ったように処刑人^{アサシン}が二人に話掛けた。

「やあ、君が処刑人^{アサシン}かい？」

「……お前……達が……言う奴……ではある」

「そうかい………さてと、僕の幼なじみを傷つけた罪は重いよ？」

エターナルは手に持ったエターナルエッジを処刑人^{アサシン}に向けた。

こうして対局に位置するガイアメモリの戦士の戦いはきって降ろされた。

EPISODE 12 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待っています。

EPISODE 13 (前書き)

夏休みも後僅か・・・やだなあ

EPISODE 13

エターナルと処刑人^{アサシン}の間に緊張が走っていた。どちらも相手の實力は知っているので容易には動くことが出来ない。アリサも黙って二人の行動を見守っていた。

じりじりとゆっくりと横に移動しながらタイミングを計る二人。

『!!』

次の瞬間二人は同時に動き出し、拳をお互いの胸に打ち込んだ。

「ぐっ！」

「はぁ！」

その衝撃でお互い数メートル吹っ飛んだ。

（なっ、なんてドーパントだ！？いくら完全じゃ無いからって僕のエターナルと同じぐらいの力だと！？）

（ほお……これがエターナルの……力か）

お互い相手の實力に驚愕しつつ次の行動に移った。

エターナルはエターナルエッジを右手に持ち、処刑人^{アサシン}に突っ込んでいった。対する処刑人^{アサシン}も黒い剣を取りだし、エターナルを迎え撃つ準備をした。

「はぁ！」

「……………」

エターナルの剣戟を処刑人^{アサシン}は無言で捌いていた。

そのまま何度が斬り合いをしてエターナルエッジと剣が鏝迫り合いになった。

「中々やるね……！このエターナルと対等にやり合うなんて……！」
「……やはり……お前は……危険だ……ここで……排除……した方が……よさそうだ……」

「何……」

剣とナイフとでは込められる力が違うせいか、エターナルが徐々に押され始めた。

「ぐ……お」

エターナルは何とか踏ん張ろうとするが、ゆっくりと確実に押され始めた。

「零！」

アリサが叫び声を上げる。

「零………？」

処刑人^{アサシン}は零の名前に訝しげに唱えたと同時に、剣がの力が緩んだ。

「！！」

それを見逃すエターナルでは無く、一瞬の隙を逃さず処刑人^{アサシン}の腹に蹴りを打ち込んだ。

「くっ！」

処刑人^{アサシン}は腹を抱えつつもエターナルの方を見るが既にエターナルの姿は無かった。

「どこに……」

辺りを見渡していた処刑人^{アサシン}は後ろから殺気を感じ、後ろを振り返るとエターナルがエターナルエッジを振りかぶろうとしていた。

「ちい！」

処刑人^{アサシン}は後方に大きくジャンプし、躲した。

「まだまだ」

「！！」

再び声が後ろから聞こえ、慌てて後ろを振り返ると、エターナルが既に立っていた。

「はあ！」

かけ声と共にエターナルは青い炎を拳に纏わせて処刑人^{アサシン}に打ち込んだ。

「ぐあ！」

思わず処刑人^{アサシン}は後ろに転がり、何とか止まり片膝をついたがダメーシが大きいのか荒い息をしている。

（バカな……どうやって……あの距離……を移動……した）

エターナルの移動の仕方に疑問を持っているとエターナルは新たなメモリを取り出した。

「さて……君をこれ以上好き勝手させる訳にはいかないからこれで終わりにしよう」

新たに取り出した”R”と書かれたメモリを起動させた。

『ROCKET』

エターナルはロケットメモリを腰のマキシマムスロットに挿入し、マキシマムを発動させた。

『ROCKET MAXIMUM DRIVE』

「これで終わりだ………！」

エターナルは両手を大きく広げた。すると、エターナルの頭上に無数のミサイルが出現した。

「なっ………！」

「はあ………！」

エターナルは大きく広げた両手を^{アサシン}処刑人に向かって突き出すと、ミサイルは^{アサシン}処刑人目掛けて飛んでいった。

^{アサシン}処刑人は避けようとするがミサイルの方が早く、^{アサシン}処刑人目掛けて打ち込まれた。

ドカーン!!

大きな爆発音と共に、処刑人^{アサシン}は大きな爆発に巻き込まれた。それを見てエターナルは満足そうにローブをはためかせた。

「ふっ……………」

「ふっ…………じゃ無いわよこのバカ!」

アリサが唐突にエターナルの頭を思いっきり叩いた。

「痛!アーちゃん何するのさ!?!」

「あんたアホか!こんな所でロケットのメモリを使うんじゃないわよ!危ないでしょ!後アーちゃん言うな!」

「良いじゃ無いか!結果的に倒せたから!」

「うっさい!ロケットは周りに何も無いところで使えって言った筈でしょ!」

「うぐ…………仕方無いじゃないか!行くとき適当に取ったのがこれだったんだ」

「あんたね…………」

エターナルの言葉にアリサは大きくため息をついた。

「あはははは…………ん?」

エターナルはしばらく笑っていたが、はっと我に返り処刑人^{アサシン}がいるであろう爆煙が漂っている場所を見つめた。

「どうしたの零?」

「っ!アーちゃん下がって!!」

次の瞬間、爆煙の中から処刑人^{アサシン}が現れ、黒い炎を拳に纏わせてエターナルに向かって来た。

「はあ！」

「くっ！」

エターナルは手のひらで何とか受け止めようとし、二人の手が触れあったとき、

「えっ……………」

「なっ……………」

『大丈夫だよ…………僕が守るから』

『ホント……………?』

『もちろんだよ約束』

『うん!』

綺麗な花々が咲き誇る野原で無邪気に笑う二人の同じ瞳をした少年と少女。本当に仲良さそうに笑っていた。

「っ!?!」

「なっ!?!」

お互い同時に我に返り、急いで距離を置く二人。

(いっ……………今のは……………)

(何だ……………?)

お互い自分の手のひらを見つめて考え込む二人。

「零……?」

そんなエターナルを不思議そうに見るアリサ。

『……………戻ってください』

突如、アサシン処刑人の横にモニターが出現し、モニターには一人の男……カルマが映っていた。

「……………何故」

アサシン処刑人が少々不満そうに言う。

「今回はそもそもR e — C ? D Eを倒せたら倒すといった任務です。カミヤさんが離脱したのであなたも離脱してください。では」

それだけ言うとカルマはさっさと通信を切った。

「お前……………名は?」

アサシン処刑人はエターナルに対して言った。

「夢埜……………零」

エターナルはアサシン処刑人をまっすぐ見つめて答えた。

「零……………か……………また……………会おう」

それだけ言うとアサシン処刑人は踵を返し、どこかに消え去った。

エターナルは変身を解き、処刑人^{アサシン}が消え去った方向をじっと見つめていた。

「……この、バカ!!」

アリサが零の頭を思いっきり叩き、思わず零は頭を抱えてうずくま
った。

「あんた何考えているのよ!!」 エデン”相手に名前明かすなんて
!!」

アリサが怒鳴るのも無理は無い。零は長年”エデン”に狙われ続け
ている。そんな組織に本名を明かすなんて自殺行為だ。

「大丈夫だよアーちゃん。たぶん彼女はそんな事はしない」

「アーちゃん言うな。って、どういう事？」

「何となくだけど……彼女は言わないよ」

「ふーん……ん？ あんた何で処刑人^{アサシン}が女性だとわかったのよ？」

「えっ？ そういえば、何でだろ」

「はあ？」

首を傾げる零に呆れるアリサ。

「あっ、じゃあ僕そろそろ戻るね」

思い出したかのように顔を上げる零。

「そうね……さっさとすずかに怒られてきなさい」

「うっ!……勘弁してよアーちゃん。あんまりそのこと考えたくない
んだから……」

「アーちゃん言うな。自業自得でしょ？ほらさっさと帰った」

少々落ち込みながら零はロストドライバーを再び腰に巻き、ゾーンメモリを起動させた。

『ZONE』

そして腰のマキシマムスロットに挿入した。

『ZONE MAXIMUM DRIVE』

「じゃあねえ」

そう言うとき零の体は忽然と姿を消した。

「はあ……………そう言えばこれどう説明しようかな……………」

アリサはエターナルと処刑人との戦いで出来た森の木々が軒並み倒されていた場所や、ロケットのマキシマムで出来た大きな穴を見て再び大きなため息をついた。

「ただいま」

Re-C? DE本部に零ののんきそうな声が響き渡る。次の瞬間その声に反応して、すずかが光の速さの如く零の前に現れた。

「お帰りー零君……………」

すずかは顔は笑っているのに目が笑っておらず、見る者全てが寒気

を起こすような笑みをしている。

「やあ……すーちゃん。ただいま」

だらだらと汗をかきながら挨拶をする零。

「ねえ、零君。私今すっごく怒っているの……」

ゆらりとゆつくりと零に歩み寄るすずか。

「ちょっすーちゃん？」

「何で……」

「えっ？」

「何で私に何も言わずに外出たのー！ー！！」

「ごめんなさーい！」

「全く……いくらアリスちゃんがピンチだからって、私やエミリオンちゃんに何も言わずに行くのはやめてね」

「はい、すみません」

ぶんぶんと怒るすずかに零は正座しながらその説教を聞いていた。

エミリオンも苦笑いしながらその光景を見つめている。

ふと零は処刑人アサシンの拳をとらえた方の手をじっと見つめていた。

「大体……って零君どうしたの？」

説教を続けていたすずかが零の様子が変わったことに気づき、零に問いかけた。

「……………今日さ、処刑人^{アサシン}とやり合ったんだ」

「うん……それは知っているけど……それがどうしたの？」

「いや……………」

零は頭の中で考え込んでいた。

あの時、処刑人^{アサシン}の手を触れたときに流れた映像。あれは何なのか？
あの少年と少女は誰なのか？そればかりが零の頭の中を駆け巡った。

（あれは一体……何なんだ……………？）

一つの部屋、そこに置かれている簡素なベットの上で風呂に入って濡れた頭にタオルを乗せ片膝を手で抱いている少女がいた。

タオルの下から見えるわずかな金髪は美しく、全体的な体型もすらりとしている。

そんな少女……………処刑人^{アサシン}……ゼロは今日の戦闘でエターナルの手に触れた自分の手を見つめていた。

あれは何だったのか。わからない何も。

ゼロには記憶が無い。気がついたら妙な研究所みたいな場所にて変な研究者達から殺しの技術を習った。

ゼロはそのことについて何も疑問に持たなかった。そしてある日その研究者の上の人間らしき者がゼロの前に現れて、ある一つのガイアメモリをゼロに差し出した。

そしてゼロは言われるがままそのメモリの所有者になった。

以来ゼロはそのメモリを使い、裏切り者や組織にとって邪魔な存在を消していった。

しかしゼロはどれだけ人を殺しても、どれだけ何かを壊しても、心のどこかに空虚感があった。それがなんなのかゼロはこれまでずっとわからなかった。

ところが今日エターナルと戦い、エターナルの手を触れたときに流れた映像。そして一瞬ほんの少しだけだが、心の空虚感が埋まった気がした。

「……………あれは何なんだ？……………私の無い記憶なのか？」

ゼロはタオルを取り払い、ベットから降りて壁に掛けられている鏡の方を向いた。

そこには腰まで届くぐらいの金髪に整った顔。そして零と同じ金と銀のオッドアイ

「夢埜……………零……………」

夢埜という名字は気にならないが零という名前。呟くたびにどこか懐かしいという気持ちがわいてくる。

「お前……………の存在は……………私の……………心を……………埋めるのか……………?」

その呟きは誰にも答えなかった。

オークション会場でローバンとカルマは話し合っていた。

「カルマ君……………あの二人が接触したのは本当かね？」

「はい、まさかこれほど早く接触するとは思いませんでした」

そうかと言い、ローバンは深いため息をついて、じっと目を閉じて考え始めた。カルマも黙ってそれを見守った。

「ふむ……………とりあえずは現状維持かな？まだあの子の記憶が戻った

とは思えんし」

「確かに、先ほど通信したら普段と変わりませんでした」

「それは何より……おや、オークションが始まるようだ。そろそろこちらに集中しようか」

「はい」

EPISODE 13 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待っています。零とゼロの関係は追々明かされていきます。

EPISODE 14 (前書き)

夏休みも後僅か。

更新速度も遅れてくるかも知れません

EPISODE 14

「それで、あの後どうなったの？」

Re-C? DE本部の自分の自室で零はモニターに映っている相手……ヴェントに問いかけた。

「取りあえずは俺の方はヴィータと協力し、ガジェットを破壊した。ネバールの方は幹部の一人と戦ったそうだ」

「幹部と？」

「ああ。だが途中で逃げ出したらしい」

「そう………今は何しているの？」

「今は周りの巡回だな。もつともこれ以上敵が来ることは無いと思うがな……」

「………だからって酒飲むなよ」

モニター越しに酒を飲むヴェントをジト目で見つめる零。

「何……俺が酒に強い事は知っているだろう？」

「そうだけどさ………そう言えば初めて会ったときもヴェントは酒を飲んでいたよね？」

「そうだったか？と言うより良くそんな事覚えているな……」

「僕が記憶力が良いのは知っているだろう？ そうだね………もう六年くらい前かな」

「そうか………あれからもう六年経ったのか……」

ヴェントの憂い顔を見て、零も黙りこくる。しばらく沈黙が二人の間を漂う。

「ねえ……ヴェント」

「何だ………」

「後悔している？ Re—C？ D Eに入ったこと」

「……………何故そう思う」

「いや、何となく」

その言葉を聞き、ヴェントはあと深いため息をつく。そんなヴェントの反応にむっとなる零。

「何だいその反応は？」

「お前……別に立場など関係無い」

「えっ？」

「俺は俺の道に行く。それだけだ」

「……そう」

「それに心友^{とも}のためでもある」

「何だよそれ」

零は苦笑しながらヴェントを見る。ヴェントもふつと微笑している。

「さてと……実はもう一つ懸念事項がある」

「？何だい」

ヴェントはティアナ弾丸ミスについて説明した。

「そう……………あの子が……もしかして……」

「ああ……引きずっているな、あの日のことを……」

「なーちゃんは何やっているんだか……教え子の心情も察してあげるのも教導官としての務めでもあると思うんだけど……なーちゃん、そこら辺は肉体言語わからせようとしているからね」

管理局の魔王としての異名を思い出しながら零はため息をついた。

「もし、この状態が続くならば六課のフォワードは連携陣が崩れる恐れがある」

「そうか……ヴェント」

「何だ？」

「いざっていうときはやってもいい。けどやり過ぎないこといいね？」

「心得た」

それだけ言うとヴェントは通信を切った。

ヴェントの通信を終えた零はふう、と息をはいて天井を仰いだ。
零の心の中にはヴェントが言った言葉が残っていた。

（心友か……ねえ、克己僕たちはいつから親友になったんだっけ？）

最初で最高の親友に語りかける零であった。

数日後、ホテル・アグスタでの任務を終えたヴェントは機動六課の敷地内にある森の中の木の一つに酒を

飲みながら寄りかかっていた。

その視線の先には汗だくになりながらも射撃訓練を行うティアナがいた。

ここ数日ティアナは通常訓練が終わった後もずっと自主訓練を行っており、ヴェントはティアナに気づかれないようにそれを見ていた。

「あれ、ヴェントの旦那じゃないすっか」

声をした方向にヴェントは顔を向けると、そこには機動六課のヘリの操縦者のヴァイスがいた。

「ヴァイスか」

「どうしたんすかこんな所で？」

「少しな……………」

それだけ言うとヴェントは再びティアナの方を向いた。

「ん？…………ああティアナすつか」

「まあな」

「旦那…………あいつに何か言っちゃってくれませんか？」

「……………何？」

「いや、俺が言っても全然駄目だったし、旦那の言う事なら聞いてくれるかと思って」

「どうだろうな…………」

「旦那ここ数日ずっと見てたんでしょ？ティアナが気になるんじゃない」

……………」

「別に、俺はあいつ自体にはあまり興味が無い」

「へっ？なら何で……………」

ヴェントは一口酒を飲むと、ヴァイスの問いに答えた。

「俺があいつを気に掛けているのは心友^{とも}の遺志だ」

「心友……………」

「まあな、しかし……………」

ヴェントはそのままティアナの方に近づいていった。

ティアナは肩で大きな息を吐きながらも訓練を続けていた。
また誰かを傷つける。兄の無念を晴らす。それだけが今のティアナの心を占めていた。

「……………その辺にしといたらどうだ？」

いきなり声を掛けられて、びくつとするティアナ。恐る恐る声が出た方向を見ると、ヴェントが酒を飲みながら近くに木に寄りかかっていた。

「ヴェントさん……………」

正直なところティアナはあまりヴェントと仲がいいとはいえない。と言っても嫌いというわけでも無い。

何故ならばあまりヴェントと話すことがないからだ。

基本Re-C? DEメンバーはアリサを除きあまり話そうとしない。ヴェントはもっぱら酒ばかり飲み、たまにシグナムと組み手をしている。その御陰かシグナムとはものすごく仲がいい。ネバールはいつも人気が無いところでボケーとしたりしている。後はリインと一緒にいることが多い。

「……………何の用ですか？」

「特にというわけでは無いが、あまりやり過ぎると体をこわすぞ?」「ご心配なく。私凡人なんで、これくらいしない」と

とりつく島もないといった感じでティアナの声はどこか冷たい。

「凡人か……………なあ、ランスターよ」

「……何です？」

「お前は何のために戦っている？」

「何のため……？」

「管理局員のため？ 執務官になるため？ 違う……お前は唯兄の無念を晴らすために戦っているんだろ？」

「!!」

今度こそティアナは真っ直ぐヴェントの方を見た。

「何で……あなたが兄さんの事を……」

震えるような声でティアナはヴェントを見る。しかし、ヴェントは唯黙ってティアナを見るだけだった。

「……話は以上だ。忠告はしたぞ」

それだけ言うとヴェントはさっさと森から去っていた。

ティアナは長い間その場で立ち尽くしていた。

「私は………」

Re-C? DE本部の自分の自室で零は書類作業をしていた。

ピカア……

「ん？」

突然メモリの保管場所から青い光がほんの僅かあふれ、直ぐに消え

た。

零は不審に思い、保管場所のロックを解除し、メモリが保管されているアタッシュケースを開けた。

中はRe—C?DEメンバーに与えたメモリ以外ちゃんと保管されていた。

「気のせいかな……けど今は……いや大丈夫だろ」

零は再びメモリを元の場所に戻した。

「零君ーごはんできたよ」

「わかった直ぐ行くよ」

内線ですずかに呼ばれた零は直ぐに自室を後にした。

保管場所で拳銃のような形で”I”と書かれたメモリが怪しく光っているとは知らずに……

『TRIGGER』

ミッドチルダ首都グラナガンの高層ビルとビルの上にポツンとある一つの屋台。

大抵の人間なら知らないが、知る者がいればそこは隠れ名店と皆口を揃えて言う。

そんな屋台に一人の男が酒をちびちびと飲んでいた。

「すまない。遅れた」

そこに一人のオレンジ色の髪をした青年が入ってきた。

「遅かったな、どうした？」

「いや、中々妹が寝付かなくてさ。おっさん、ビール一本に適当に何か見繕って」

オレンジ色の髪の青年が屋台の主に注文すると、男の隣に座った。

「妹か……確か、今年で10歳か良いのか？一人にしといて。もう夜遅い」

男の言うとおり既に今日は夜遅く、家に一人の少女を残しておくのは少々危険と思われる時間帯だ。

「大丈夫さ。あいつもそんなやわな性格はしていないさ」

オレンジ色の髪の青年はあっけらんと答えた。

「そうか、なら俺から言う事は無いな」

それからしばらく二人は酒を飲みながら談笑を続けた。

「しかし、お前ホント外見変わらないよな」

酔っているのか少々顔が赤い青年。

青年が男と出会ったのは、二年ぐらい前の事だ。青年は管理局に勤めていてその任務中に男に出会ったのだ。

その時青年は色々誤解をし、男を犯人と間違え、戦闘を挑んできたことがあった。

しかし、青年は男にボコボコにやられてしまい、誤解が解けると青

年は直ぐに男に謝った。

その時からの縁で青年と男はよくこうして酒を飲みあう仲や青年が暇なときに模擬戦をやる仲になっている。

「まあな、色々やっているのな」

男は酔っている風には見えず、ちびちびと飲んでいた。

「ふーん。まあ良いけど」

青年は特に気にした様子は無く、ビールを飲む。

「つて、それよりもお前の力ってどうなっているんだ？」

「ん？」

「ん？じゃ無いよ。魔力を使わずにあんな事をしているなんてホント何で？」

男は魔力を使わず、と言うより魔力の源であるリンカーコアが無いのだ。なので男が使っている力は魔法による物ではない。

「さあ、何だと思う？」

「んー魔法じゃ無いんだったら、希少能力か？」
レアスキル

「まあ、あながち間違いでは無いがな」

「そうか、で結局何なんだよ？」

「教えん」

「えー俺たち心友^{とも}じゃ無かったのー？」

微妙に傷ついた顔で言う青年に男はふっと笑った。

「まあ、時期が来たら話しても構わん」

「時期ねえ。それっていつ？」

「お前が俺に勝つまで」

「いやいや、それ無理だろ？拳でバリアジャケットを越してダメー
ジ通すなんて奴倒すなんて無理だから」

くっくつと笑う男に青年が手首を左右に振る。

それからしばらく飲んでいた二人だが、青年がふと腕時計を見ると
おもむろに立ち上がった。

「さて、明日も早いからそろそろ帰るよ」

「そうか。二日酔いにならないと良いがな」

「まあな」

勘定を済ませ、屋台から抜ける二人。しばし一緒に歩き、やがて分
かれ道についた。

「じゃあ、またな……ヴェント」

「ああ、またな飲もうデューダ」

そう言うときデューダ・ランスターはくるりと後ろを向くと手をひら
ひらさせながらそのまま帰路に着いた。

少しの間それを見ているとやがてヴェントもズボンのポケットに手
を入れると帰路に着いた。

「ん……」

ヴェントは機動六課で当てられた自室のベッドで目を覚ました。

「……………」

ヴェントは無言で起きると、近くに置いてあった水が入ったペットボトルを取り、キャップを開け中身を口に含んだ。

「……何故今頃あの夢を見るのだろうか」

ヴェントは窓から見える月を見ながら呟いた。

数ある心友こころともとの思い出。その中の一つでしかないのに。

「ディーダ……お前がこの世から亡くなって六年……お前の遺志を最後まで尊重しよう」

ヴェントは常に肌身離さず持っているペンダントを見て語った。

「しかし、あまりにも見ていらなかったら俺も行動する気だ」

ヴェントの鋭い眼光が薄暗い部屋を刺した。

このときヴェントはその言葉が現実になるとは思わなかった。

EPISODE 14 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待っています。

EPISODE 15 (前書き)

ご報告があります。

実は親の仕事の都合により、パソコンがあまり使えない状況になりました。

なので、しばらく更新が遅れる可能性があります。

どうかご了承ください。

EPISODE 15

ヴェントとティアナの会話から数日後、ヴェント達は六課のフォワード陣等と一緒に六課の訓練場でなのは対スバル・ティアナペアの模擬戦を見ていた。

しかし徐々に雲行きが怪しくなってきた。

「ねえ、ヴェント……………」

アリサが隣にいるヴェントに話掛けてきた。しかし、ヴェントは何も答えず唯黙って戦闘の行く末を見つめていた。

ティアナとスバルの戦闘は危なっかしいを越え、既に危険と言えるレベルだ。

そしてスバルが正面から、ティアナが上空からクロスミラーージュをダガーモードに切り替え、なのはに斬り掛かった。対するなのはは

「レイジングハート…………モードリリース」

呟いた。

「二人ともどうしちゃったのかな……………模擬戦は喧嘩じゃ無いんだよ…………練習中は言う事聞いている……………模擬戦は喧嘩じゃ無いのも、本番で勝手に動くんじゃない練習の意味、無いじゃない」

なのははバリアジャケットこそ展開しているが素手でスバルの拳を防ぎ、上空から斬り掛かってきたティアナの刃も素手で止めた。御陰で手から血が滲み出てきたが、なのはは気にした様子もなく淡々と無表情で言った。

「あ……………あ……………あ」

スバルは何も言えず、必死に言葉を探していた。

「……………っ!!」

ティアナは素早くなのは達よりも上に存在するウイングロードに飛び移り素早くクロスミラーージュを構えた。

「私はもう！誰も傷つけないから!!」

泣きながら自分の心情を吐露するティアナ。

「ティア……………」

そんな相棒にスバルは何も言えない。

「少し……………頭冷やそうか」

ティアナの慟哭になのはは気にしていない様子で指先をティアナに向ける。

「うわああああ!!ファントム……………」
「シュート」

ティアナが魔力弾を放つより先になのはがティアナに大量の魔力弾を放った。それら全てがティアナに直撃した。

「ティア……………っバインド!?!」

「じつとして。よく見てなさい」

スバルが慌ててティアナの方に向かおうとするがなのはにバインドを掛けられていて動けなかった。

そんな中のははさらなる追撃を打ち込もうとしていた。

魔力弾が撃ち込まれたところからティアナが両手をだらんとして状態で現れ、なのはの方を見ていた。

「あああああああ ああ ああ ああ ああ ああ」

絶叫した。唯々絶叫した。

「シュート」

再びなのはがティアナに対して魔力弾を放った。

しかし、

「なっ!？」

同時刻 R e - C ? D E 本部の自分の自室で零は驚いていた。自室で自分が保管していたメモリの一個が光り輝いていた。

「まさか……」

その現象に覚えがある零は焦った。
過去の記憶ではこの後、共通してメモリ達は同じ行動を取ろうとしたのだ。

「やばい……！」

そうなる前になんとしてもメモリを押さえつけなくてはいけない。

しかし、メモリは空中に浮かび始めた。

「くそ！」

いつになく焦った零は急いでメモリを掴もうとしたが、

キィイイン！

それよりも先にメモリはより輝き始めた。

「うっ……！」

思わず目を閉じた零。次に目を開けたとき既にメモリは無かった。

キィイイン！

「えっ……」

「なっ!？」

機動六課訓練場スペースでなのはの放った魔力弾が突如ティアナの前に現れた謎の光が全て弾いてしまった。

その光はやがて徐々に収まってきてその中心にあったのが、

「ガイアメモリ!？」

”エデン”が使っているメモリでは無く零達が使っているメモリに酷似したメモリ。

同じ頃見学していたアリサ達は驚いていた。

「うそ……何で」

「アリサ……?」

アリサの呆然とした声にフェイトは怪訝そうな顔をする。

「おい!何であんな所にガイアメモリがあんだよ!！」

ヴィータがヴェントに詰め寄るがヴェントは答えず、じっとティアナの方を見つめていた。

このときティアナは正常な状態ではなかった。

なのはに大量の魔力弾を撃ち込まれて、傷こそ負わなかったが頭は既に正常な思考はしていなかった。

そんな時再びなのはの魔力弾を撃ち込まれそうになったとき何かがティアナを魔力弾から庇った。

それはガイアメモリだった。ヴェント達を使うメモリと同じ形をしたタイプだった。

ティアナはそのガイアメモリを見たとき、体に何かが走るような感じがした。

「ティア……？」

自分を呼ぶ相棒の声がしたがティアナは気にならなかった。唯このメモリが欲しい。それだけが今ティアナの体を動かしていた。

「まさか……ティアナ！やめなさい！」

自分を呼ぶなのは声がしたがティアナはそれすらも気にならなかった。

やがてそのメモリの側まで来て、迷うことなくそのメモリを握った。すると、メモリから光が消えた。ティアナは手のひらにあるそのメモリを凝視した。

そのメモリは青く、ディスプレイには”T”と銃みたいな形で書かれていた。

「……………」

そしてティアナは、

『TRIGGER』

迷うこと無くそのメモリを起動させた。

「あああああ！！」

ティアナの再びの絶叫と共にトリガーメモリは独りでティアナの体内に入ってしまった。

するとティアナの体は右手が銃火器そのもので青い体をした異形の怪物……銃撃手の記憶の力を持ったトリガー・ドーパントになった。

「ティア……………?」

信じられない物見たかのようにスバルはよろよろとトリガー・ドーパーントに近づいた。

「……………」

トリガー・ドーパーントは無言でライフルを構えると迷うことなくスバルに対してエネルギー弾を撃ち込んだ。

「!」

避けようとするがスバルは先程なのはにバインドをかけられたままなので満足に身動きが取れない。

避けられないと思い、思わず目をつぶるスバル。

しかし、

ガキーン!

「なのはさん!」

「……………」

エネルギー弾とスバルの間になのはが割り込みシールドで防いだのだ。

「ティアナ!何しているの!ガイアメモリがどれだけ危険かわかっているでしょ!」

「……………」

なのはの叫びにティアナは無言で再び右腕のライフルからエネルギー弾を数発撃ちかました。

「くっ！」

なのはは再びシールドで防いだが徐々にしかし確実にシールドに罅が入り始めた。

「!？」

なのははこれに驚いた。いくらリミッターを掛けているとはいえ、なのはのシールドを破る攻撃はそうは無い。

そしてついにシールドが破れ、エネルギー弾の一発がなのはに襲いかかってきた。

しかし、突如として現れた風がなのはの前に防護壁となってエネルギー弾を別の所に方向を変換した。

「ヴェントさん……………」

その風を起こした本人は険しい顔でトリガー・ドープアントを睨みつけながら先の零の会話を思い出した。

ティアナがトリガー・ドープアントになった直後、Re-C?DEメンバーの端末が一齐に鳴り出した。

三人は急いで端末を取りだし、通話ボタンを押した。

「みんな！」

モニターに映っていたのは零だった。その表情はいつになく険しい。その後ろには同じくまじめな表情をしているすずかとエミリオンの姿があった。

「まずい事になった。T2の一個が誰かと引き合ったみたいでミツドのどこかに飛んで行った。急いで回収してほしい」

「あー零知っているわ」

「えっ？」

「本人が私達の目の前にいるからよ」

「なっ……」

零は驚いた顔をした。後ろの二人も同様の顔をしていた。

「おい！お前らだけで話を進めてんじゃないやねえ！私らにもわかるようにしろ！」

ヴィータが声を荒げながら言った。よく見ると他の者達も同じように聞きたがっていた。

「……………すまないけどメモリの回収を頼めるかい？」

零は静かに三人に言った。

「何言ってるの？私達を誰だと思っているの？」

「問題ありません……直ぐに回収します」

「……………」

アリサとネバーは直ぐに行こうとするがそれをヴェントが手で制

した。

「ヴェント？」

「……………」

アリサは疑問の声を挙げ、ネバールは無言でヴェントを見た。

「……………俺が行く」

ヴェントが一步前に進み、ロストドライバーを腰に巻いた。

「なっ！？相手が通常のドーパントじゃないのよ！？T2はさすがのあなたも……………」

言いかけた言葉をアリサは止めた。

ヴェントが笑っているからだ。

クッククツと滅多にこんな風に笑わないヴェントなのでアリサは驚きを隠せなかった。

「この俺が……………負けるとでも？」

「いや、そういう訳では」

「……………ヴェントやるならさっさとやった方が良い。なーちゃん大変そうだから」

零の指さす方向を見るとなのはのシールドが破壊されそうになっている。

「なのは！」

フェイトが声を挙げる。ヴェントはそれを一瞥すると自分の周りに風を纏わせやがて全身を包み込んだ。

風がやんだ後ヴェントの姿はそこに無かった。

「ちょっと！零！良いの！？」

「良いも悪いもないさ。ヴェントがやりたいならやらせればいいさ。それにアーちゃんも知っているだろ？ヴェントがどういう人間なのか」

「アーちゃん言うな……わかっているわよそんぐらい」

「どっどっという事？」

フェイトがおずおずとアリサを訪ねた。

「……Re-C？DEメンバーは私や零、そしてすずか以外の人間はこの世界に来てから知り合った者達なんだけど、ヴェントはこの世界で一番最初にRe-C？DEに入ったのよ」

フェイトはちらりとフェイトを見て、再びなのはの方を向いた。そこにはヴェントの風がなのは達を守っていた。

「Re-C？DEに入る前は知らないけど、あいつRe-C？DE入ってから一度も戦いで負けたこと無いのよ」

「えっ？」

「それで零はあるときこう言ったのよ”勝ちしか知らない男”それがヴェントだって」

アリサの言葉にネパール以外は驚愕した。

何せ負けたことが無いなどフェイト達も無いからだ。

「さてと、所でメモリは何？」

「トリガーメモリだよ」

「他は惹かれていない？」

「大丈夫さ。その辺は」

フェイト達はしばらくポカンとしていたがキャロははっと我に返り、ためらいがちにアリサに尋ねた。

「あの……アリサさん」

「ん？何キャロちゃん」

「さっきヴェントさんメモリを使わずに風を起こしていましたよね？」

あつと他のメンバーも思う。確かにヴェントはガイアメモリを使わずに風を起こしていた。

それに気がついたのかアリサと零はやばつと言った顔をしている。

「ヴェントさん……」

なのはは自分を守ってくれた人の後ろ姿を見て呟く。

「……高町、ナカジマを連れてさっさとここから離れろ」

「！なっ何言っているんですか！？ティアナを助けないと！」

そうなのはが言うとうヴェントは後ろを振り向いた。

その顔を見てなのはは凍り付いた。

ヴェントの表情は眼光が鋭く見る者が畏縮するような顔だ。

「お前がランスターを助けるだど？笑わすな。お前なんぞにランスターは任せられん」

「なっ！？ティアナは私の生徒ですよ！？私は……」

なのはは言葉を最後まで続けられなかった。ヴェントが風を切って拳をなのはの顔面すれすれで止めた。

「そこまでしておけ。どのみちお前に出来ることは無い。さっさと戻れ」

「……っ………はい」

ヴェントの言い分が通ったのかなのははスバルのバインドを解いて下がっていった。

それを見送るとヴェントは改めてトリガー・ドーパントの方を見た。トリガー・ドーパントはヴェント達が話している間何も行動せず、唯それを観察していた。

「さて、ランスターよ。お前の目を覚まさせよう」

『CYCLONE』

ヴェントはサイクロンメモリを起動させるとロストドライバーのスロットに挿入した。

「変身」

『CYCLONE』

ヴェントの体を風が包み込み、風がやむとそこにはサイクロンがい

た。

「さあ、始めよう」

EPISODE 15 (後書き)

いかがでしょうか？感想待っています。

フォーゼ見ました。

学園ものは初めてなので新鮮です。アストロスイッチが四十種類あるのが驚きです。

EPISODE 16 (前書き)

今回は間に合いました。

前回の話でまさかの展開と思っただ方。さらなるまさかだと思っています。

EPISODE 16

機動六課訓練スペース。そこにはサイクロンに変身したヴェントと、トリガー・ドーパントに変身したティアナが睨み合っていた。

トリガー・ドーパントがサイクロンを見下ろすような状態だが、お互い一步も動かずにいる。

そんな両者を見学スペースで見ている者達は固唾をのんで見守っている。

「！」

先に動いたのはトリガー・ドーパントだった。

素早く右手のライフルを構えると、サイクロンにエネルギー弾を撃ち込んだ。

「ふっ！」

サイクロンは右手をエネルギー弾に向けると、手のひらに小さな竜巻を作った。

そして、エネルギー弾を竜巻の力でそのまま別方向に吹き飛ばした。

ドゴォン！

大きな音と共に、トリガー・ドーパントが撃った弾はビルに直撃し、かなりのビルの壁を抉り取った。

「……なかなかの威力だな。まさか”過剰適合者”か？」

ガイアメモリとそれを使用する者にも相性という物がある。過剰適

合者とはある特定のガイアメモリと極端に適合率が高い人間の事を指す。そして、ガイアメモリの力を最大限に引き出すことが出来る。しかし反面、過剰適合者はその適合率のあまりの高さから、使い過ぎると死に至る場合もある。

「過剰適合者」ならさっさと片を付けないといけないが……」

そこで一端口を閉じるとサイクロンはトリガー・ドーパントの方を見た。

「なあ……ランスターよ。お前が望んだ力はそんな物か？……お前の望みは何だ？……兄の無念を晴らし、執務官になるのでは無かったのか？」

「……………」

トリガー・ドーパントは答えず、再びライフルをサイクロンに構えた。

「そうか、ならば……」

サイクロンは両手の拳に風を纏わせるとトリガー・ドーパントの方を向いた。

「俺が本当の強さというものを見せてやろう」

そよ……

トリガー・ドーパントの近くに風が吹き、訝しんだ次の瞬間、サイクロンはトリガー・ドーパントの目の前まで近づいており、トリガー・ドーパントは反射的に右手のライフルを胸の前まで持ってきた。

ドゴン！

サイクロンの拳がトリガー・ドーパントのライフルに打ち込まれトリガー・ドーパントは思いつき後ろに吹き飛んだ。

何とか体勢を立て直そうとするが、それよりも先にサイクロンがトリガー・ドーパントの真上まで来て、トリガー・ドーパントに怒濤の拳のラッシュを打ち込んだ。

トリガー・ドーパントは何とかそれを躲すのに精一杯で何とか隙を突いて、何とか一つのビルに飛び移る。

トリガー・ドーパントは自分のいた場所を見ると、スバルの作り出したウイングロードはサイクロンの拳に耐えられなかったのか、粉々になって消えていった。

トリガー・ドーパントは姿が見えなくなったサイクロンを探し左右を見るがどこにもいなくて、ばっと上を向くと、サイクロンが拳を振りかぶろうとしていた。

「おらあ！！」

怒声と一緒にサイクロンは拳に風を乗せて、トリガー・ドーパントに突き出した。

風がトリガー・ドーパント目掛けて打ち込まれてきたがトリガー・ドーパントはすんでの所で躲し、上空に逃げようとするが。

ヒュル

がくんとトリガー・ドーパントは突然動きを止めた。否、止めざるを得なかった。

サイクロンの風がトリガー・ドーパントを逃がすまいとトリガー・ドーパントの足に絡まったからだ。

慌てて、トリガー・ドーパントはライフルをサイクロンに向けるが、

「……………」

トリガー・ドーパントは本能で恐怖した。

何故なら見たからだ。サイクロンの後ろに鬼を……破壊神を。

「破壊^{こわ}れな」

サイクロンはトリガー・ドーパントの目の前まで近づき、思いっきり拳をぶち込んだ。

ドガアアアーン！！

トリガー・ドーパントはビルに直撃し、そのまま下まで床を破壊しながら地面まで行った。

トリガー・ドーパントは瓦礫の中で、何とか立とうとするがダメージが大きいようで、動けないでいる。

「耐えたか。そうでは無くては簡単には破壊^{こわ}れるなよ？」

サイクロンがトリガー・ドーパントの近くに降り立ち、瓦礫に右足を乗せながら言った。

「強さは果てしなく上がある。しかし、今のお前はそれがわからんようだな」

一歩サイクロンがトリガー・ドーパントに近づくとサイクロンの横にモニターが開いた。

『こら！ヴェントあんた何してんのよ！？』

アリサだった。

「全く！やり過ぎよ！さっさとマキシマムで倒しなさい！」

怒鳴っているアリサを尻目に機動六課メンバーはサイクロン達が戦っている場所を呆然と見た。

シグナムの時とは違う圧倒的な強さ。まさしく破壊神。

『わかっている。そろそろ終わりにする』

サイクロンは鬱陶しそうにモニターを閉じた。

「あっ……ああもう！ヴェントの奴！」

『おっ落ち着いてアーちゃん』

「アーちゃん言うな！零も何とか言いなさいよ！ヴェント止められるのはあんたぐらいなのよ！」

その言葉に零は苦笑顔から、一転して真剣な顔になった。

『アーちゃん。これは彼がしたいことなんだよ』

「アーちゃん言うな。どういう事？」

『単純になーちゃんがしなかった事をヴェントがティアナ・ランスターにしているって事』

自分の事を出され、びくっとなるのは。

「どっとういう事零君……？」

なのはが恐る恐る聞いてきた。

『それは自分で考えることだよ。なーちゃん』

零はいつもの飄々とした感じは無く、どこか冷たさを持っていた。

「さて……アリスからも急かされているし、これで終わりにしよう」

サイクロンはサイクロンメモリを抜き、右腰のマキシマムスロットに挿入。

『CYCLONE MAXIMUM DRIVE』

普段の右手では無く、右足に風が集まりつつあった。

トリガー・ドーパントはふらふらな状態だが、それでも何とか立ちサイクロンにライフルを向ける。

「……今は、休め」

言うやいなやサイクロンは、素早くトリガー・ドーパントに近づき、頭に思いっきり回し蹴りを打ち込んだ。

トリガー・ドーパントは爆発し、爆発が収まると中からティアナが現れ、前に倒れ込んだ。そしてメモリブレイクされていないトリガーメモリも一緒に地面に落ちてきた。

サイクロンは素早くティアナを抱え、肩に背負った。そしてトリガーメモリも一緒に拾った。

『ヴェントさん！直ぐにティアナを医務室へ！』

サイクロンの直ぐ側にモニターが開き、必死そうな顔でサイクロンに言った。しかし、

『その必要は無いよ』

『零君！？』

直ぐ側に零が映ったモニターが出現し、そう言った。

「そうだな、ランスターは我らが預かろう」

『ヴェントさん！？何言って』

ヴェントは変身を解きながら言った。

『何言っているのさ、なーちゃん。ガイアメモリに関しては僕たちが上だよ？当たり前じゃないか』

その言葉になのは何も言えなくなる。

『じゃあ、ヴェント指定したポイントに来て、本部までの道を開けるから』

「心得た」

それだけ言うと、ヴェントは風を起こし、自分とティアナの体を包み込んだ。

風がやむとそこにはヴェントもティアナもいなかった。

Re-C?DE本部のある一室。そこには無数の機械があり、部屋には人が入れる大きさのポッドが三つほど並んでいた。

その中にティアナは一糸纏わぬ姿で液で満たされたポッドの中に入っており、口には呼吸器が付いていた。その前のパソコンを零はいじくっていた。

「……………どうだ？」

ヴェントが酒を飲みながら零に聞いてきた。

「まあ、大丈夫だね。幸い直ぐにメモリを体に排出させた御陰で体に殆ど害が無い……………ていうかまた酒飲んでいるの？」

零はあきれ顔でヴェントに言った。

「構わんだろ？別に」

「いやまあ良いけど……………」

何か言おうにもヴェントに酒に関して何言っても無駄な気がするの
で零はため息をついた。

「……………ん」

ティアナは柔らかい感触に包まれながら目をゆっくりと開けた。

「あっ起きた？」

声がした方向を向くと紫色の髪をしたのはと同じぐらいの歳の女がこちらを覗いていた。

「ここは……」

ティアナはきよろきよろ辺りを見渡すと白い無機質な壁が回りを囲っており、壁には時計が掛けられている。そして自分はふかふかのベッドで寝ていた。

「大丈夫？どこまで覚えている？」

そういわれてティアナは自分の記憶を掘り返した。

「……………！！」

ティアナは自分がなのはに大量の魔力弾を撃ち込まれて、そして自らガイアメモリに手を出したことを思い出した。

「私……私……」

「大丈夫。取りあえず落ち着いて」

女がティアナの頭をゆっくりと撫で、ティアナは徐々に落ち着いてきた。

「大丈夫？」

「はい……」

「じゃあ、これ着て」

「えっ？」

女から手渡されたのは下着と自分と同じ髪の色ドレスだった。
ふと体がすーすーするのを感じ、ベットの中を覗くと一瞬でティア
ナの顔は赤くなった。

「あーごめんなさいね。色々検査とかしないといけなかったから」
「検査……？」

「それも含めて後で説明するわ」

そう言われてティアナは下着とドレスを着た。

「あの……」
「何？」

ティアナは女にためらいがちに聞いた。

「こんな服、着て良いんですか？」

ティアナが着たドレスは見るからに高級そうで、とてもじゃないが
ティアナが払える額では無いと思う。

「ああ、大丈夫よ……ってまだ自己紹介していなかったわね」

そう言うとなはティアナを真っ直ぐ見た。

「初めましてRe-C?DEO1月村すずかです」

「えっRe-C?DE!?!じゃあここは……」

「Re-C?DE本部よ。じゃあ付いてきて」

そう言うときすずかは扉を開けて外に出た。ティアナも慌ててそれに

続いた。

しばらく歩くとあるドアの前に立った。そしてすずかはドアをノックした。

『どうぞ』

声がしてドアを開けると二人は部屋に入った。

「やあ、こうして面と面に向かい合って話すのは初めてかなティアナ・ランスター？」

ティアナが声をした方向を見ると上座の方に銀髪の子と銀のオッドアイの少年が座っていた。

「ようこそRec?DE本部バルバルドへ」

EPISODE 16 (後書き)

いかがでしょうか？

感想とか待っています。

テイルズオブエクシリア買いました。おもしろい

ビギンズナイト2（前書き）

頑張りました。いよいよ日曜から文化祭。

自分の所は劇やるんですが、まずいですね。自分照明やるんですが、役者が台詞覚えていません。

ぶっちゃけやばい（＜―＞）

ついに三万PV突破です。これから一万PV行くとびにこういう特別編を掲載します。

今回は零とヴェントの出会いです。

文章の都合上戦闘シーンはありません。ご了承ください。

ビギンズナイト2

デューダと分かれたヴェントは夜のミッドチルダの町をゆっくりと歩いていた。

「はあ……………」

ヴェントはため息をついて再び酒を飲んだ。

「…………つまらんな」

ヴェントは自他共に認める戦いに生きる者だ。故に常に強者との戦いを望む。

なのでヴェントは戦って戦って、戦い続けた。しかし、気がついた時にはもうヴェントと戦える者はいなくなっていた。

一時は管理局に勤めて、その最前線で戦おうと思ったが、自分には魔力が無いし、管理局のくだらない正義には全く興味無かったため直ぐにその案を却下した。

最近デューダと専ら模擬戦をしているが、それでも心の底から戦いを楽しめていない。

（あーつまらん。どこかに俺の心躍らせる戦いは無いだろうか）

「…………あるよ。君の心躍らせる戦いが」

「…………誰だ」

酒を飲むのをやめ、声が出た方を見ると、そこには灰色のロングコートを着て、フードですっぽりと顔を隠している少年らしき人がいた。

「ん、僕？ そうだねえ、名前明かすこと出来ないから……エターナルって今は名乗っておこうかな？」

「エターナル……永遠か……ふざけた名だな」

本来なら興味が無いと一蹴し、さっさと立ち去るヴェントだが、不思議とエターナルの話を聞いてみたくなってきた。

「それで？ 何故俺が戦いを望むと思った？」

んー、とエターナルはヴェントの方に近づきながら言った。

「目さ」

「目？」

「そっ、君の目は強者との戦いを望んでいる。それも常にずっと。そうだろう？」

まだ十三、四歳くらいの少年に自分の心を見透かされてヴェントは警戒心を上げた。

「……貴様何者だ？」

「ふふ、内緒さ」

どこか人を食ったような笑みを浮かべている少年にヴェントはこれ以上付き合いきれないと判断したのか、立ち去ろうとする。

「あつ待ってよ。まだ話は終わっていないよ」

「知るか付き合い————————」

ヴェントは風を右手に纏わせると、

「切れるか」

迷わずエターナルの方に放った。しかし、

「うわ、危ないなあ」

「!!」

ヴェントは声がした方向を見ると、そこにはさっきと同じように笑みを浮かべているエターナルがいた。

「お前どうやって……………」

「君と同じ、あれさ」

「同じ…………お前、まさか空王の……………」

ドカアアン!!

突如大きな爆発がし、ぱっとそちらの方を向くと異形の怪物が現れた。

「何だあいつは……………」

今まで色んな魔法生物と戦ってきたヴェントだが、あんなものは見たことが無い。

「あれはドーパント」

「ドーパント？」

「そう、あれが君に心躍る戦いをプレゼントする存在さ」

そう言うとエターナルはぽんと手を叩き、ヴェントの包を向いた。

「折角だから僕とあのドーパントの戦い見ていきなよ」
「何？」

エターナルはコートの中から赤いL字型のバックルを取り出すと、腰に巻き付けた。そして、”E”と書かれたUSBメモリらしき物を取りだし、スイッチを押した。

『ETERNAL』

そうメモリは響き、そしてエターナルはそのメモリをドライバーのスロットルに挿入した。

「変身」

『ETERNAL』

ドライバーを右側に展開すると、風が吹き白い欠片がエターナルの姿を覆っていく。

全身白い姿に、Eを横に倒したような触覚、無限のマークを模した目。

さらに胸、右腕、左腿に合計二十五個のマキシマムスロット。両腕には青い炎が描かれている。そして黒いローブを身に纏っている。

そして最後に青い波動を放った。

「貴様は……」

「仮面ライダーエターナル」

翌日バイクを走らせながらヴェントは昨日の事を思い出していた。
あの後エターナルは自分が見ている中でドーパントよ呼んでいた怪物を倒した。その時こう言ったのだ。

『また、会いに来るよじゃあ』

そう言うときエターナルは忽然と消えたのだ。

「……………」

正直な所ヴェントは迷っていた。

何故ならばあの時の戦いを見たとき自分の心は震えた。

自分も戦いたい。ドーパントと、そして勝ちたい。そんな言葉がさつきからヴェントの頭の中に渦巻いていた。

「おい！ヴェント！」

「ん？」

突如上空から自分の心友^{とも}の声が聞こえ、バイクを止めると上空からバリアジャケットを展開したディーダが降りてきた。

「どうしたディーダ。何かあったのか？」

「何かあったって……お前見てないのか！？」
「？」

本当に知らないヴェントを見てディーダは頭をクシャクシャをかき、映像をヴェントに見せた。

ヴェントはそれを見ると、どうやらこの辺りに正体不明の怪物が出

現し、近隣住民の避難を勧告している映像だった。バイクを運転していたヴェントはそれに気づかず、走らせていたのだ。

「成る程な……」

「たく……俺が見つけたからいいものを……取りあえず、さっさと避難しろよ」

「お前……俺の実力知っているだろ？」

「そうだけど……ヴェント昨日の事件知っているか？」

「……ああ」

実は当事者とは言えず、そのままヴェントは聞いていた。

「実は今出ている怪物もあれと同じという情報があるんだ」

「……何？」

鋭い視線をデューダに送るヴェント。デューダも真剣な表情でヴェントを見ていた。

「とにかく、早く避難しろよヴェント」

そう言うデューダは再び空を飛んで行った。

ヴェントはバイクでそのまま去ろうとしたが、どうしてもバイクをこの場所から動かすことが出来なかった。

何か嫌な予感がする。そんな感情がヴェントの心を占めていた。

そんなヴェントの予感是最悪な方向で当たった。

「ディーダ……………」

いつの間にか降ってきた雨に打たれながらヴェントは血だらけになって倒れているディーダに言葉を無くした。

あの後ヴェントはディーダを探し回り、大きな爆発音がして、そちらの方に行くとディーダを発見したのだ。

「なんだあ？お前その男の仲間かあ？」

愉快そうにケタケタ笑っているドーパントが目の前にいるがヴェントはそんな事に気にしなかった。唯、

「お前が……」

「あん？」

「お前がやったのか？」

心友^{とも}を殺ったかどうか聞きたかった。

「ああ！そうさ！俺の邪魔をしたからやっただけさ！」

心の底から愉快そうに笑うドーパントを尻目にヴェントはディーダの前で膝まついた。

「ディーダ……何か言い残す事はあるか？」

もう助からない心友^{とも}に対してヴェントは最後の問いかけをする。

「つああ……………」

デューダはぼそぼそと聞きづらい言葉で言ったがヴェントの耳には確かに聞こえ、ヴェントは頷いた。

「そうか……必ず伝えよう」

そうヴェントが言うのとデューダは一瞬笑い、そして息を引き取った。それを確認するとヴェントは立ち上がり顔を天に向け仰いだ。

「何だあテメーは？まあいいこれ見られたからには死んで貰うぜ！
！」

ヴェントはゆっくりとドーパントの方を向く。するとドーパントは恐怖した。

「ひっ！」

鋭い眼光、隠しきれぬ殺気。それらがドーパントの重圧となって襲いかかってきた。

「なっ何なんだお前！？」

「俺か？……お前を斬りつけ押しつぶす最強の疾風だ！！」

キイイイン！

突如ヴェントの後方に緑色の光が溢れ、ヴェントとドーパントが後ろを振り向くと、昨日と同じように灰色のロングコートにフードを被り、そして隙間から緑色の光が溢れているアタッシュケースを持っているエターナルがいた。

「ヴェント！」

「!」

エターナルはヴェント目掛けてアタッシュケースを投げつけ、ヴェントはそれをキャッチした。そして素早くそのアタッシュケースを開くと中には昨日エターナルが使用した赤いドライバーと緑色の”C”と書かれたメモリが入っていた。

『CYCLONE』

「疾風……サイクロン」

ヴェントはドライバーを取りだし腰に巻くとドーパントの方を向いた。

『CYCLONE』

「変身……」

そのままサイクロンメモリを起動させ腰に挿入右側に展開した。

『CYCLONE』

するとヴェントの体は風に纏われ、ドーパントは思わず腕で顔を覆った。

風がやむとそこには緑色の体をした赤い複眼をした戦士が立っていた。

「おっお前は……」

サイクロンはその問いには答えず、手のひらをドーパントに突き出

すどぐつと握りしめた。そして一言、

「破壊こわれな」

言った。

「いいの？」

「……………何がだ」

「殺さなくて」

あの後ヴェントはエターナルの指示に従いながらドーパントを圧倒。
最後はマキシマムで倒した。

そしてヴェントはドーパントだった男を殺さずにいた。

「……………弱き者を殺す価値無し」

「……………そう」

エターナルはこれ以上追求せず、しばし二人の間に沈黙が漂った。

「ねえ……………」

「……………何だ？」

しばらくするとエターナルはヴェントに問いかけた。

「昨日の話考えた？」

「ああ」

「じゃあ答えを聞こう」

エターナルがそう言うのとヴェントは目を閉じ、しばし考え込むように沈黙を守っていると、やがて目を開けた。

「お前について行こう……」

ヴェントは静かにはっきりと告げた。

「そうかい……じゃあ」

そう言うのとエターナルはフードを取った。

その中身は中性的な顔をした少年で銀髪の髪に眼鏡が良く似合っている。

「自己紹介しようか。僕は零」

「零……」

「そして……」

零は眼鏡を外し、外した目をヴェントに見せると、ヴェントは驚いた表情になった。

「その目……やはり空王の……」

呆然としたヴェントの呟きに零はクスリと笑った。

その笑みがヴェントの記憶の奥底にある何かが呼び起こされた。

『また、悲劇は繰り返されるのかな』

『どうでしょうかな。これからの時代によるでしょう』

古風な城のテラスで二人の男が語り合っていた。

一人は腰まで伸びている金髪を首の後ろで括り、もう一人の男は黒髪に左の顔に癍痕が付いていた。

『なあ　　よ私は今まで民の為、国のためこの力を費やしてきた。覇王も聖王もそれに賛同した。しかし、この世界は何とも不条理だ。現に聖王はゆりかごに乗り、覇王は泣いている。こんな事があっていいのだろうか？』

『王よ……』

『ねえ　　？僕はどこかで間違えちゃったかな？』

昔の口調で、黒髪の男の方に向いてきた金髪の男は笑っているのに泣いているような顔だった。

「ヴェント？」

「っ……！」

零に呼ばれてはっと我に返るヴェント。

（今のはまさか……）

自分が垣間見た記憶にヴェントは心当たりがあった。

（ならば俺が取るべき道は）

そう思うとヴェントは片膝を付いた。

「えっちょヴェント!?!」

「我が王よ……この力全てあなたに捧げましょう」

守ろう。この新たな心友^{とも}を

ビギンズナイト2（後書き）

いかがでしょうか？感想とか待っています。
文化祭故感想の返信が遅れると思います。
ご了承ください。

EPISODE 17 (前書き)

いよいよあの人が変身します！

多分予測出来ている人もいると思いますが、どうぞ！

EPISODE 17

ある部屋の一室、一人の少女が着替えていた。

少女はオレンジ色の髪をしており、今は黒の長ズボンを履き、そして黒をベースにオレンジ色のラインが入ったジャケット着た。

そしてその部屋の備え付けの鏡の前に立ち、髪を少々解いた。

先ほどまで前髪のせいで伺えなかった顔が現れ、少女の顔が映った。少女の表情は無表情そのもので、どこか冷たさまで感じる。少女はそんな自分の顔を見て小さくため息をつき、部屋の外に出た。

「……中々似合っているじゃ無いか」

「……………」

出た瞬間いきなり声を掛けられて少女は少々不機嫌になりながらも、声がした方を向いた。

そこには自分をここに連れてきた青年が相変わらず酒を飲んでいた。

「……何か用ですか？」

少女は不機嫌さを隠さず、青年に問うた。青年は普段見せない苦笑顔で言った。

「別に、まだこの地理が慣れていないだろうということで、俺が迎えにきたんだ」

少女は何かを言いかけたがやめた。どのみちそれは正解なので、少女は何も言えない。

なので、少女は前を歩く青年におとなしくついて行った。しばらく歩いていると青年が少女に声を掛けた。

「……後悔していないか？」

「何です急に？」

少女は訝しげに青年に問い返した。この青年がこんな言葉を掛けるなんて初めてなので少々驚いた。

「いや、何も言わずここに留まっていることだ」

「……………どうでしょうね」

少女も正直な所その気持ちに関してまだ良くわかっていない。そう簡単に決められることではないからだ。

「そうか……」

青年はそれ以上何も問いかけず、二人は黙々と目的地まで歩いて行った。

やがて目的の部屋の前にたどり着き、青年が扉を開けようとしたが少女がそれを制し、自分で扉を開けた。

部屋の中には一人の銀髪の少年……零と二人の少女……すずかとエミリオンがいた。

そして銀髪の少年がクスリと笑いながら少女に言った。

「やあ、僕たちの新たなる同胞……………R e — C ? D E O 7 ティアナ・ランスター」

少女……ティアナは真っ直ぐ銀髪の少年を見た。その瞳には迷いがなかった。

トリガー・ドーパントとサイクロンの戦いから数日、機動六課全体の空気はあまり良く無かった。

あの日からティアナは未だR e - C ? D Eから戻っていない。何度も零に連絡を入れてもまだ検査中で会わせることは出来ないと一点張りだ

管理局に、ガイアメモリに関するデータは殆ど無い。その為唯一ガイアメモリに対抗出来るR e - C ? D Eに言われると何も出来ないのだ。

そんな中、機動六課面々は生活していた。お互いわだかまりを残したまま。

「あっスバル……」

「っ……」

なのはとフェイトが廊下を歩いているとスバルが反対方向から歩いてきた。

「あの……」

「すみません、仕事終わっていないので」

なのはが声を掛けようとするがスバルは避けるように、さっさと行ってしまった。

「スバル……」

「なのは……大丈夫？」

「うん……」

そう言うがなのはの表情は暗いままだ。

あの日からなのはとスバルは碌に会話をしていない。精々、事務的な会話ぐらいだ。

なのははなのはであれ以来ティアナやスバルとも会話できず心苦しくて、スバルもスバルで親友を撃墜されてなのはとしやべりたくないといった感じで双方しやべれない状態である。

「けど、いくら何でも遅すぎだよ。検査といってももう何日も経っているんだし」

「確かに……もしかして、零君わざと遅らせているんじゃない？」

そんな会話を続けている時、突如アラームが響き渡った。

「！なのはっ」

「うん！」

二人は急いで走り出そうとするが、

「えっ……」

「はやて……？」

突如部隊長であるはやてから届いた念話に戸惑うなのはとフェイト。その内容とは、

「待機命令って……」

今回は出撃せず、モニタールームでの待機を言い渡されたのだ。

「でも、相手がドーパントだし……」

はやてが言うには今回はドーパントのみでREC?DEに任せる

という話だ。

釈然としないまま二人はモニタールームに向かった。

二人がモニタールームに到着すると前線メンバーと、

「アリサちゃん？」

「ネバールさんも……………」

現在機動六課に残っている二人がいた。

「どうして……………」

「今回は私達が近いから私達が出ようと思ったんだけど、零から待ったがかかって今回は私達見学」

手をひらひらさせながら、アリサが言った。

「どうしてまた……………」

「何でも、零達が新しい人材を確保して今回はその初のお披露目だって」

アリサがそう言うモニターが付き、そこには殻の記憶を宿したシエル・ドーパントが映っていた。

そこに、ヴェントともう一人黒にオレンジ色のラインが入ったコートに帽子を目深く被った少女が現れた。

「あれが、新人さん……………」

「みたい……………ね」

アリサが何か釈然としない感じで言った。

「どうしたのアリサちゃん？」

「いや……あれ多分ヴェントがいるのはお目付役だと思うんだけど、普通それはさすががする筈なんだけど……………」

そう言いながらアリサはモニターの方を見る。つられてなのは達もモニターを見る。

そこに映っている少女が取り出した銃を見て、一同凍り付いた。

「あれって……」

「そんな……」

「まさか……」

一同は震えそうな声で口々に言った。

「クロスミラージュ!？」

スバルが自身の相棒の愛機の名前を言った。

「じゃあ……あそこにいるのは……」

シエル・ドーパントが放ったエネルギー弾を躲した際帽子が取れ、少女の素顔が露わになった。

そんな少女の名前をスバルは震える声で言った。

「ティアナ……………!」

「やっぱり魔法は効かないか……」

そう愚痴りながらティアナはクロスミラージュで魔力弾を撃ち続けていた。

「だから言っただろうに……」

後ろでヴェントがやや呆れながら酒を飲んでいた。

「うるさいです。本当かどうか試してみたんですよ」

とシェル・ドーパントの攻撃を避けながらティアナは言った。

「まあ、今回はドーパント戦初だが、さっさと終わらせろ」

「はいはい」

そう言いながらティアナはクロスミラージュを待機状態に戻し、ロストドライバーと”T”と書かれたメモリ……トリガーメモリを取り出した。

そして、そのまま腰にロストドライバーを装着し、トリガーメモリを起動させた。

『TRIGGER』

「変…身……」

ティアナはトリガーメモ리를 スロットに挿入。そのまま右に展開。するとティアナの体はエターナルのとは違う濃い青い波動に包まれ、次の瞬間青い波動が弾け飛ぶと、そこには濃い青色のボディ、赤い複眼に左胸に銃を装着したガイアメモリの戦士が立っていた。

「仮面ライダー……トリガー」

今ここに青き銃撃手が誕生した。

「どういう事アリサちゃん!? ティアナがR e - C ? D E しかも、仮面ライダーなんて!」

なのはが声を荒げてアリサに詰め寄った。見ると、他のメンバーもなのはと同じ気持ちのようだ。

「私だって知らないわよ! R e - C ? D E に新しいメンバーが入ったとした連絡は受けていないし、顔合わせすらしていないのよ! ?」

アリサのやけくそ気味の叫びになのはは、ついたじろいだ。

「ごっごめん……」

「いいわよ別に……後でちゃんと零を問い詰めないと」

そんな二人を気にすることなくスバルは親友の心配をしていた。

「ティア……」

「はっ!」

かけ声と共にトリガーは手に持ったエネルギー銃……トリガーマグ

ナムをシエル・ドーパントに向けて放った。

「ふん！」

しかし、シエル・ドーパントの堅い殻に阻まれダメージは殆ど通らなかった。

「くっ」

思わず舌打ちをしそうになるのを堪え、トリガーはシエル・ドーパントに攻撃し続けた。

「くはっはっはっはっ！無駄無駄！私の殻シエルの前ではそんな攻撃は無力！」

シエル・ドーパントは笑いながら殻の一部をトリガー目掛けて打ち出した。

「！！」

トリガーはいち早く察し、トリガーマグナムを打ち落とした。

お互い決め手が無いまま二人は硬直していた。

（どうする……このままでは埒が明かない。ヴェントさんの手を借りるのは……）

そこまで考えた時点でティアナは思考を中止した。ヴェントの性格から一対一でさっさと倒せと言うのが関の山だろうし、何よりヴェントの力を借りたく無いのがティアナの考えである。

(けど、ホントどうしたら……うん？待てよ確かヴェントさんあのメモリを……)

そこまで考えた瞬間トリガーは叫んでいた。

「ヴェントさん！”W”の……ウェザーのメモリ貸してください」

トリガーの言葉にヴェントは一瞬眉をピクリと動かしたが何も言わず、懷からメモリを取りだし、トリガーに投げた。

トリガーは素早くそれをキャッチするとメモリを起動させた。

『WEATHER』

銀色の”W”と書かれた上位メモリをトリガーは起動させた。

「はあ！？零の奴ウェザーのメモリまで使わせたの！？」

アリサは本当に驚いているらしく大声で言った。その声の大きさに普段回りをあまり気にしないネパールも顔を顰めたほどだ。

「あっアリサちゃん。声大きい」

「あっ……ご、ごめん」

「それでアリサ、どういう事？」

フェイトは何故あれほどアリサが取り乱していたのか聞いた。しかし、その問いに答えたのは意外にもネパールだった。

「……零の所持するガイアメモリには能力的に上下関係がある。ウ

エザ―はその中でもかなり強力なメモリ……だからこそ新人にそんなメモリを使わせるなんてあり得ない」

「いくらヴェントが付いているからって新人ウエザ―を使わせるなんて零の奴何考えているのよ」

アリサはいらしながら言った。

そもそも今回のティアナのReeC？DE参入は変なのだ。そもそもReeC？DE参入には全員が最初の内に顔合わせ、そして誰かが新人について行き、戦闘するというのが基本だ。しかし今回は最初の段階をすっ飛ばしている。自分はまだしもネバールにさえ聞かされていないのはおかしい。

(零……何考えているの？)

『WEATHER MAXIMUM DRIVE』

トリガーマグナムのマキシマムスロットにウエザ―メモリを挿入しマキシマムモードにしたトリガー。すると、トリガーマグナムの銃口に雷や雪や炎や水など様々なエネルギーが集まり始めた。

「ぐ……」

あまりの力にトリガーは思わずめまいを覚えたが堪えて銃口をシェル・ドーパントに向けた。

「喰らいな……さい！」

トリガーがマグナムの引き金を引くと多種多様のエネルギーがシェ

ル・ドーパントを襲った。

「なっ!？」

直ぐにこの攻撃が驚異を感じたシエル・ドーパントは自身の最大の力で殻を出現させ、自身を覆った。

「ぐ、おおおおお！」

ビキィ! ビキビキ!

しかし、上位メモリのウェザーには勝てず自身を覆っていた殻は全て破壊された。

それでも殻だけ破壊されただけなのは驚きだが

「はあはあ……」

トリガーは息を荒げながらもウェザーメモリをマグナムのマキシマムスロットから取りだし、ロストドライバーからトリガーメモリを取りだし、マグナムのマキシマムスロットに挿入した。

『TRIGGER MAXIMUM DRIVE』

そして、そのまま再びマキシマムモードにし、銃口をシエル・ドーパントに向けた。

「今度こそこれで終わりよ!」

そう言うトリガーは引き金を引き、青い弾丸を三発続けて放った。

「ぐあああああ！」

弾丸が命中したシェル・ドーパントは爆発を起こし、爆煙が消える
と男とメモリブレイクされたメモリが落ちていた。

「っあ……」

トリガーは変身が解除され、ティアナはふらふらと数歩歩き、その
まま倒れそうになった。

しかし地面に付きそうになったときヴェントが抱きかかえた。

「やれやれ……」

ヴェントがため息をつくときティアナはすうすうと寝息を立てながら
眠っていた。おそらくは疲労で眠ってしまったのだろう

「まあ、素人にしてはすごいか……」

そう呟くとヴェントはティアナを肩に背負うと管理局が来る前にさ
っさと退散した。

EPISODE 17 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待っています。

実はこれからティアナの立ち位置どうしよつか迷っています。意見とかあったらください

これを投稿している頃は文化際の打ち上げがあるので感想の返信が遅れると思います。ご了承ください。

EPISODE 18 (前書き)

いやあフォーゼの新ライダー中々すごいですね。オーズの方にも新ライダー出ますし

今回は戦闘無く、後半はあの人登場です。正直な所どこで登場させるかすごく困っていました

EPISODE 18

「どういう事や！」

機動六課部隊長室でやはては大きな声を挙げ、モニターに映っている人を怒鳴りつけた。

対して怒鳴られた方は顔を少し顰めながら、ちゃんと聞いていた。

「いやいや……何をそんなに怒鳴っているのさ……はーちゃん」

モニターに映っている人……零は飄々としながら言った。

「とぼけるなや！ ティアナの件や！ R e - C ? D Eに入るなんて……」

あの後ティアナに会いに行こうとしたのはだが既にティアナとヴェントは現場にはおらず、結局しょんぼりしながら帰ってきたのだった。

「いやあ……中々良い人材だね。トリガーもうまく扱っているし、スカウトして良かったよ」

「……引き抜きつちゆうことやか？ 出来ると思っておるの？」

「出来るさ、それだけのコネを僕たちは持っている」

零の目を見てはやはては思わず身震いした。零は実質地上のトップのレジアスと個人的な知り合いだ。

レジアスにとって機動六課は目の上のたんこぶだ。弱みには簡単につけ込むだろう。

「私たちの部隊を潰すつもりか……!」

「そんなつもりは無いさ。六課は僕たちにとっても中々良い場所だからねそう簡単に失いたくないよ」

ニコニコと笑う零を見てはやはり零がどこまで本気なのか真意を測れなかった。

「……まあ、これで行動を起こさなかったらそれまでだけどね」

「えっ？」

「ううん。何でも無いよ」

そこまで話した瞬間、

「零君!!」

なのはが部隊長室に文字通り飛び込んできた。

「ちょ、なのはちゃん!？」

「零君お願い! ティアナに会わせて!」

はやての事など目に入っていないといった感じでなのはは零に詰め寄る。

「……駄目だよ」

しかし、零から帰ってきたのは冷たい言葉だ。

「零君……?」

「取りあえず、今のなーちゃんには絶対ティアナを会わすわけにはいかない」

「どっ、どうして!?!」

「その理由は自分が良く知っていると思うよ?」
「……っ!」

零はそれ以上話す事は無いと思ったのかはやてに向かって笑いかけた。

「じゃあ、はーちゃん。明日改めてそちらに向かうよ。ティアナの荷物取りに行かないと」

「なっ!?!」

「あっそうそう……なーちゃん。一晚だけ考える時間あげる。考えて見るといい。君の罪を」

「私の……罪……?」

「じゃあそれじゃ」

「ちよい待ち……」

はやての制止を聞かず零はモニターを切った。

「はあ……」

零は自室は椅子にもたれながらため息をついた。

「大丈夫零君?」

先ほどの会話を聞いていたさすがが紅茶を差し出した。

「ああ……ありがとうすーちゃん」

零は椅子にちゃんと座り直しすずかから紅茶を貰い、口に付けた。

「ふう」

紅茶の温かさが体に染み、零の心は安らいできた。

「大丈夫かなのはちゃん」

「さあね、自分の罪に気づけないようならそれまでって事だよ」

零の素っ気なさに思わずすずかは苦笑する。

零のこの素っ気なさは零の二面性みたいなものだと思わずかは考えている。初めてそれを見たとき思わずすずかは泣いてしまったものだ。零が相手に素っ気ない態度を取るのには相手に対して、何か嫌なものを感じ取ったときだ。それがどんなものなのかは零本人しか知らない。もっともそんな態度は殆どの人間に取った事は無いのだが。

「失礼します」

ノックと一緒に入ってきたのはティアナだった。今はコートを脱いでおりラフな格好をしている。

「やあ、ティアナ。体の調子はどうだい？」

先ほどとは打って変わっていつも通りのニコニコ顔で思わずすずかはため息をついた。

そんなすずかを見てティアナは首を傾げながら、報告した。

「はい、大丈夫です。先ほど簡易検査でも問題無かったです」
「それは良かった」

ニコニコ顔の零だがティアナは相変わらず無表情だった。

「しかし、驚いたな……いくら僕から貸したとはいえ、あそこまでウェザーを使いこなせるなんて驚きだよ」

ウェザーは上位メモリ故力が強いがその反面、反動が強すぎてRe-C?DE内でもあれほどの力を持つメモリを扱えるのは零とヴェントとネバールの三人だけだった。

「いえ、使えたもののあれで倒れるんじゃないや意味ありません」

あの時ティアナが倒れたのはトリガーへの初変身からの疲労では無く、ウェザーを使った為の反動であった。

「まあ、それでもウェザーを使えたのは事実なんだから誇って良いよ」

「そうだよ。私なんてマキシマムを発動しただけで、駄目だったんだから」

「はい……」

二人は口々にそう言うがティアナは納得していなかった。

「まあ、これから鍛えていけばいいよ」

「はい」

ティアナは部屋を出て行こうとし、ティアナがドアノブに手を掛けた瞬間零が声を掛けた。

「あ、そうそう。明日ティアナの荷物を機動六課に取りに行くから準備だけしておいて」

ピクリと一瞬体を揺らしたが、「わかりました」と言い、ティアナは部屋を出て行った。

「ティアナちゃん……大丈夫かな」

「大丈夫さ……彼女はね」

「ふむ……やはり興味深いね」

薄暗い中、モニターや機械類が大量にある部屋の中で一人の紫色の髪白衣を着た男が呟いた。

男の目線の先には、エターナルやサイクロン、ヒートが戦闘している映像が流れていた。

「ガイアメモリか……是非とも研究してみたいねえ」

男が狂気に満ちた笑みでそう言うと、突如男の横にモニターが開いた。

「ドクター！緊急事態です！」

モニターには男と同じく紫色の髪をした女性、ウーノが切羽詰まった表情をしていた。

「どうしたんだいウーノ？」

「ここに……侵入者です！」

「くそ！」

悪態付きながらNO3、トーレは侵入者の相対している。トーレと侵入者の周りには無数のガジェットドローンの残骸が散らばっていた。

「はっはっはっ、中々やりますね……」

侵入者はドーパントだった。しかも腰にはドライバーを巻いており、そのことからこのドーパントが幹部だとわかる。

「ライトインパルス！」

トーレは自身の特殊能力で高速移動でドーパントの後ろに行き、そこからのすごい速度で出される拳を繰り出そうとするが、

「ふん……」

「なっ!？」

しかし、トーレの拳がドーパントに当たる直前、見えない何かでトーレの体は止まってしまった。

「はっ！」

「ぐわ！」

動けないトーレにドーパントは回し蹴りを喰らわせた。その威力のあまりトーレは壁へと吹き飛んだ。トーレの体は壁に激突し、壁は歪な形に凹んだ。

「く……そ」

「はっはっはっはっ」

口から血が垂れているトーレにゆっくりと笑いながら歩み寄るドーパント。

「……トーレ離れろ！」

「っ！」

「おや……」

突然の第三者の声にトーレはライトインパルスでその場を離れ、ドーパントは声がした方向を向いた。

向いた瞬間、ドーパントの目の前には数本のナイフが飛び込んできており、そして一気に爆発した。

ドカアアアン！

大きな爆発音と共にドーパントは爆発に巻き込まれた。

「大丈夫かトーレ！？」

「ああ……助かったチンク」

第三者は小柄で銀髪に眼帯をした少女……N O 5チンクだった。

「しかし何故この場所が……」

この場所は、隠蔽がかなり高くそう簡単に見つかる筈が無いのだ。しかし、このドーパントは迷うこと無くこちらに来たのだ。

「……いやはや、油断なりませんね」

『! !』

二人が振り向くと爆煙の中からドーパントがゆつくりと現れた。しかも無傷で。

「バカな……私のランブルデトネイターが効いていないのか？」

チンクのISランブルデトネイターは金属を爆発物に変化させるもので、普段は自身の固有武装の投げナイフのステインガーを使用しており、その爆発はかなりのものである。

「さてと……」

ドーパントはゆつくりと手を二人に向けて挙げてきた。すると、

「ぐ、あ」

「なっ何だ？」

二人は急に頭痛がしてきて、まるで見えない何かに締め付けられるような感触だった。

ドーパントは無言でさらに力を強めてきた。

「うっああ！」

「く……そ！」

二人は頭を抱え込みその場にうずくまってしまった。

一歩ドーパントが二人に歩み寄った時、

「やあ、少し待ってくれないかね？」

突然ドーパントの横にモニターが開き、紫色の髪の男が映っていた。

「どっどクター!？」

トーレが苦しみながら言った。

「ほお、あなたが……」

「君は一体何の目的でここに侵入したのかな？」

男は気楽にドーパントに話しかけてきた。しかし、男とドーパントの間には見えない戦いが一瞬のうちに展開されていた。

「ふむ……簡単に言えば、取引……商談ですよ」

「ほお、商談とは？」

「今、あなたがほしがっている物の情報を差し出しましょう」

「まさか……」

「ええ、ガイアメモリです」

ドーパントがそう言うと、男は途端にハイテンションになった。

「おお！探し求めていた物がこんなに簡単にこちらに来るとは！是非商談を聞かせて欲しい!!」

「わかりました……」

ドーパントは手を降ろすと、二人の頭痛が治まった。二人は荒い息をしたまま、ドーパントを睨みつけていた。

「さて、今から案内人をそちらに寄越すよええと……」
「カルマと申します」

ドーパントは変身を解きながら言った。

「おお、カルマ君か！」

「あなたのご高名はかねがね聞いていますよ……Dr. ジェイル・スカリエッティ」

男……スカリエッティはにんまりと笑っていた。

「いやあ、まさか生のガイアメモリの戦闘を見られるなんて今日はついているよ」

「それは何よりです」

先ほどの緊迫した雰囲気から一変二人はのんびりと紅茶を飲んでいた。

スカリエッティの背後にはウーノがいるが殆ど空気になりかけていた。

「さて、まずは謝罪を。あなた方の基地にアポの無く侵入、ガジェットドローンをいくつも大破に加え、あなたの部下を負傷させてしまった」

「いや構わないよ。ガジェットはまた作れば良いし、幸い二人とも怪我は対したこと無い」

「そうですか」

「ああ……それよりも早速だが商談といこうじゃないか」

「そうですね……わかりました。ではまず、我々が欲しいのはレリックです」

「ほお、レリックを」

「ええ、実は我々はある計画の為、膨大なエネルギーを必要としています。その為にレリックが必要なのですが、管理局、それにあなた方、極めつけにRe-C?DEときた。これでは満足にレリックを回収出来ない」

「ふむ」

「そこで我々のリーダーは戦力の統一を考えました」

「ほお、戦力の統一」

「ええ、管理局とRe-C?DEは論外、となると残りは……」

「私達か……」

「はい。あなた方と組むことで、混戦状態にならないですみますからね」

「成る程……それで商談というのは？」

「まず、レリックを少々分けて欲しいのです」

「ふむ……それで我々の利益は？」

「ガイアメモリの数個分のデータを差し上げます」

「おお！なんとすばらしい！あのガイアメモリを調べれるなんて！」

「では……」

「ああ！構わんよ！我々は特定のレリックさえもらえればそれで構わん！」

「感謝します。それでは今回の同盟の締結の印としてこれを差し上げましょう」

そう言うところカルマは自分の椅子の近くに置いてあったアタッシューズを持ち上げ、蓋を開け、その中身をスカリエッティに見せた。

「これは……！」

中身はガイアメモリだった。それも二十本近くある。

「なんと！これほどのガイアメモリを！いいのかね？」

「構いません。既にこのメモリ達は量産に成功したもののなので」

カルマの言葉をスカリエッティはもう聞いていなかった。いくつかのガイアメモリを手に取り、新しい玩具を見つけた子供のようにつと笑い続けていた。

EPISODE 18 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待っています。

そろそろティアナ編も終盤です。ティアナはこのまま零についていくのか果たして

EPISODE 19 (前書き)

実はご報告が、

これから中間試験が始まりますので親からPC禁止令が出ると思うのでしばらく更新出来ないと思います。

なるべく早く更新いたしますのでお待ちください

EPISODE 19

零との会話から翌日、自分のデスクでなのはは零に言われたことを悶々と考えていた。

（私の罪って一体何なの零君……？）

正直なところなのはは零があそこまで言う”罪”というのがわからない。

確かにティアナを撃墜したのはやり過ぎかもしれないかと思ったが、それでもそれは自分の思いをフォワードのメンバー達にわかって欲しくてやった事だ。なのに何故、

（どうしてなの？ティアナ……）

何故わかってくれないのか？自分の思いをどうして理解してくれないのか？何故？何故？

その事ばかり考えていてなのはは昨日一睡も出来なかった。気がついたら朝になっており、大して眠くも無く本日の仕事をばおっとしながらやっていた。

（なっなのは！）

（ふえ！フェ……フェイトちゃん？）

突然のフェイトからの念話に驚くなのは。

（どっとうしたの大丈夫？……じゃなくて！）

どうやらフェイトもよほど焦っているようだ。

（おっ落ち着いてフェイトちゃん。何があったの？）

なのはに言われて深呼吸をするフェイト。やがて落ち着いたのか、さつきよりも落ち着いて念話をし始めた。

（ごっごめんなのは）

（ううん。それでどうしたの？）

（そっそれが……）

（？）

フェイトの歯切れの悪さに首を傾げるなのは。

（……ティアナが来たの）

次の瞬間なのはは弾丸のように弾け飛び、走っていった。

「へえ、ここが機動六課か」

「何ですか、その田舎から都会に来たお上りさんみたいな言い方」

「あはははは……」

機動六課の入り口に三人の男女がいた。一人は灰色のロングコートを着て、フードをすっぽりと被っている零。

もう一人は零と同じくコートを着ているティアナ。

そして、ゆったりとしたワンピースを着ているすずか。

三人は機動六課の前で先ほど連絡をして迎えを寄越すといったはやての言葉で六課の前で待っていた。

「いやあ、そう言えばここにアーちゃんとネパールとかいるんだっけ？」

「零君……自分で六課くろくに送ったんだから覚えておこうよ。ていうより零君覚えてるよね？」

零ののんきな言葉にすずかは思わず突っ込む。

「……………」

そんな二人をティアナは静かに見ていた。

「まあ、そんな事よりもねえティアナ」

「……何ですか？」

「久しぶりの六課はどう？」

零が意地悪でこの問いをしているのはティアナもすずかも簡単にわかった。しかし、ティアナは特に表情を顔に出すこともなく淡々と答えた。

「別に特にこれといって……」

「ふーん」

元々あまり興味が無かったのか零はそれ以上聞いてこなかった。

「あれ……もしかして……」

「?どうしたのすーちゃん？」

すずかが引きつった顔である一点を見ていたので零もつられてそちらを見ると、誰か土煙を起こしながらこちらに走ってくる人影があった。

「げ……」

視力の良い零は直ぐにその人物が誰だかわかりずかと同じく顔が引きつった。

「？」

何故そこまで顔を引きつらせるのか不思議に思い、ティアナもそちらの方を向いた。

よく見るとその人影はアリサでしかも鬼気迫る顔でこちらに全速力ダッシュしていた。

「れい！！」

こちらに一定の距離まで近づくとアリサはそのままジャンプキックを零に放った。それまでの行動が鮮やかすぎて、零も一瞬その光景に目を奪われた。

「ってちょ！？」

我に返ったときにはもうアリサの足が目前に迫っていた。

「喰らえええ！！」

「もろっぷ！？」

顔面にまともに蹴りを喰らった零は数メートル後ろに吹き飛んだ。

『……………』

突然の出来事に固まるすずかとティアナ。

「って、零君!？」

我に返ったすずかは慌てて零に駆け寄った。

「大丈夫!？」

「な……何とか」

よろよろしながら立ち上がる零。

「れい」

まるで地獄の底から響くような声にはっとなり恐る恐るアリサの方を向く零。

そこには修羅がいた。

「あ、アーちゃん？」

「アーちゃん言うな……零、私に何か言うこと無い？」

ニコニコ笑っているのに怖い。ぞくりと身震いしながら零はしもどろしながら言葉を紡いだ。

「えーと、何？」

「そう……わからない？」

ニコニコしながらゆっくりと零に近づくアリサ。

「まず一つ、ホテルの件……私だってドレスの着たかったのよ!!」

「痛い痛い痛い!!」

零に十字固めするアリサ。

「そして二つ……私やネバールに何も言わず、R e - C ? D Eにテ
この子
イアナ入れた事よ!!」

「ギャアアア! ギブギブ!!」

さらに締め上げるアリサ。そんな二人を見て、すずかとティアナは
揃って嘆息した。

「……………」

少し離れた所から四人を見つめる者がいた。

「……何を……している?」

処刑人^{アサシン}だった。現在はドーパント状態では無く、人間体だった。

あの日以来、処刑人^{アサシン}は零が外に出るたびにずっと尾けていた。

正直な所処刑人^{アサシン}は何故ここまで零に執着するのか自分でもわからない。

知りたい。あいつを夢埜零の事を。

「お前は……何なんだ?」

処刑人^{アサシン}の言葉に答える者は誰もいなかった。

『……………』

空気が重い。機動六課部隊長八神はやてはそう思った。自分のユニゾンデバイスリインもネバールの髪の中にびくびくしながら隠れていた。

改めてこの空気の元凶の方を見た。

そこにはお互いそっぽを向いている機動六課スターズ分隊高町なのはと元機動六課フォワードで現R e—C? D E O 7 ティアナ・ランスターがいた。

その側では、零が愉快そうに笑っており、隣りにいるすずかはすずかでおろおろしていた。

どうしてこうなったはやてはそう思った。

はやてはつい数十分前の事を思い返していた。

その後、零は何かアリサに解放されて、ティアナに案内を頼んだ。

「へえー中々いい場所だね」

零が六課の廊下を見ながらそう呟いた。

「まあそれでもあそこの設備には劣りますよ」

ティアナが前を歩きながら振り返らないで言った。あそことはR e—C? D E 本部の事であろう。

「あれと比べられたら困るよ」

Re-C? DE本部は現在の技術でも再現出来るかどうかからないほどの優れものだ。そんじょそこらの建造物とは比べてはいけない。

「ここです」

そうティアナが指さす方を見るとはやてがいるであろう部隊長室があった。

「失礼しまーす」

そんな軽薄そうな言葉と共に零が部隊長室に入ってきた。中にははやてとフェイト。そして、不安そうにしているなのはいがいた。

「やあ三人ともこうやって顔を合わせるのは久しぶりだね」
「……せやな」

ニコニコ笑っている零に対してはやては少々怖い顔で返した。

「怖い怖い……まあ」

言葉を切り、ちらりとティアナの方を向いた。ティアナは無表情で立っていた。

「話でもしようか」

あれから場所を移し、会議室に向かった零達。そこで途中ネバールと一緒にいたリインと合流し、お互い対面に座った。

「さてと……じゃあ話を始めようか」

零が切り出すと、はやてが不機嫌そうに言った。

「……ホンマにティアナを引き抜く気やか……」

「ああ。彼女の能力はきわめて高い。ここで生かし切れていないのなら、生かし切れるところで働かせるのが一番良いのさ」

「生かし切れないって……」

なのはが抗議するように言う。

「そうだろ？これまでの戦闘映像を見たけどねえ……」

どうやって映像を入手したか知らないがなのはは零にかみついた。

「ちょっと待って！私だってちゃんと訓練メニューとか考えてやっているんだよ！？」

「訓練メニューねえ……意味あるのそれ」

椅子にもたれながらあくびをかみ殺しながら言う零。

「なっ……意味あるに決まっているじゃ無い！」

バン！と机を叩いて声を荒げて言うなのは。

「なのは落ち着いて……」

フェイトがなのはを落ち着かせようとするが、なのはは止まらなかった。

「零君にティアナの戦闘方法がわかるとでも！？わからないでしょ！私はこれまで六課でのティアナをずっと見てきたのよ！」

ピクリと僅かに身じろぎするティアナ。それに気づかずなのははさらにヒートアップする。

「大体！零君はティアナの一部分しか見ていないのよ！そんなだからそんな事が」

なのはの言葉は途中でストップした。ティアナがバン！とテーブルを叩いて立ち上がったからだ。

「ティ……ティアナ？」

恐る恐るティアナに問いかけるなのは。その表情は前髪に隠れて見えない。

「……って」

「えっ？」

「黙って聞いていればさっきから！」

ぱっと顔を上げるとティアナはビシ！となのはを指さし、ティアナは言い始めた。

「あなたが！私の何がわかるって言うんですか！？いつもいつも自

分の考えばかり押しつけて!」

「なっ! 考えを押しつけるなんてそんな……私はティアナの事を思
って……!」

「何が思っているですか! 自分の満足出来る結果さえ出ればそれで
良いんでしょう!？」

「ティアナ! それは聞き捨てられないわね! 私はちゃんとみんなが
六課が解散した後もちゃんと活躍出来るようにしているのよ!」

むーと睨み合っているのはとティアナ。やがて同時にフンと顔を
そっぽに向ける。

そして今に戻る。

「さてと……二人とも本音をさらけ出したね?」

零がそう言うのと皆が零に注目した。

「零君……?」

「実はティアナのRe-C? DE参入には理由があったんだ」

「理由?」

零は椅子から立ち上がり、ゆっくりと会議室を歩き始めた。

「僕はヴェントやネバールから六課の戦闘や訓練について報告を受
けていたんだ」

皆驚きネパールの方を向く。ネパール本人は相変わらず無表情だったが。

「その時、色々問題が浮かんだけれど、その辺はこれから改善出来る問題だった。しかし、」

零はなのはの後ろに立つとなのはの頭に腕を乗つけた。

「にゃ!？」

「ティアナの問題はどうしても片付けないといけなかった。このままでは下手したらとんでもないことになりかねないからね」

そこで口を閉じ、少しして零はため息をついた。

「もっとも……それらしい出来事は起きてしまったけど」

零はおそらくティアナのドーパント化を言っているんだろう。なのはは俯いてしまった。

「そしてあの時の状況の事をヴェントに聞いたんだけど、あのままじゃなーちゃんが自分の考えをティアナに押しつけるんじゃないかと思っただけ」

なのはの頭から腕をどけ、なのはを見下ろす零。

「……ねえなーちゃん。人はね言葉にしないとわからないことだってあるんだよ？ 誰もが自分の考えを何も言わずに理解出来るなんてそう簡単にできるわけ無い。そんな事小学校高学年でもわかることだよ?。」

「……っ」

何も言い返せず黙っているのは。

「だからこそ、僕……いや僕とヴェントはこの計画を立てた」
「計画？」

フェイトの言葉に頷く零。

「もしもなーちゃんが本当にティアナの事を思っているならティアナを六課に返そう。逆に六課に返すべきでは無いと判断したら、Re-C? DEにそのまま入れる。もう六課メンバーとは関わらせないという事にしたんだ」

『……………』

事情を知らない者は一様に皆黙ってしまった。

「ねえ、なーちゃん僕が言ったあの時の罪、わかった？」

フルフルと無言で首を振るなのは。

「あの時僕が言った罪は……自分の”決断”を他人に押しつけたこと」

「決断を押しつけたこと……」
”決断”は自分でしないとイケない事。それをなーちゃんはわかっていない。だからこそティアナの魂の叫びに気づけなかった」

なのははティアナの方を向くと、ティアナは困ったような顔をしているが、どこか苦笑しているような複雑な表情をしていた。

EPISODE 19 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待っています。

なのはは自分の考えをティアナに押しつけているような気がしたのでこのような話を考えてみました。

今日のフォーゼはかっこよかったなあ

ビギンズナイト3（前書き）

テスト終わったー

四万pv突破したので今回はアリサのビギンズナイトを投稿します。

今回も作者の技能不足により、戦闘描写が殆ど無く、内容も少し変かも知れませんが、ご了承ください

ビギンズナイト3

ムカつく。

それが少女、アリサ・バニングスのあの少年に対する印象だった。初めて会ったのは小学生四年になるかならない程度の時期だろうか。友人の月村すずかに紹介されて初めて出会ったのだ。他にもものは達が居たのだが、彼女達はその頃から時空管理局というところで働き始めており、偶々時間があわず、結果すずかが早く紹介したいという気持ちもあり、アリサ一人が先に会うことになったのだ。

「しかし、あたし達以外にあんたそんな友人いたのね」

「うん。会ったのがちょうど一年生ぐらいだからアリサちゃん達よりも長い付き合いかな？」

「へえー」

自分達以外にそんな友人がいて尚且つ自分達に対してずっと秘密にしていた事に若干寂しさを覚えつつ、アリサはすずかにその友人について聞き始めた。

現在2人はすずかがアリサの家まで手配した車の中にいて、すずかの家でその件の友人に会うことになっている。

「ねえ、すずか。その友人ってどんな子なの？」

「えっ…そうだね……」

少し考え始めたすずか。やがて考えが纏まったのか、口を開いた。

「性格は少し変わっているかな？何かこう……大人びている感じ」

「ふーん」

「後々、銀髪なんだ」

「銀髪？外人なの？」

「ううん。ハーフなんだって」

「そうなんだ。かっこいいの？」

アリサしては何となく言ったセリフなのだが、

「うん。とつてもかっこいいよ」

そうすずかが答えて、アリサが何気なくすずかの顔を見た。

違和感に気づいたのは、なのは達よりもアリサの勘が鋭いからかもしれない。

すずかの頬がほんのり赤み帯びていたのだ。

（えっちょ、すずかまさか……）

親友の表情にアリサは内心かなり動揺していた。

こうしてすずかの家に着くまで、すずかは件の友人について話し続け、アリサはそれを聞いていた。

すずかの家に着いた後、すずかは最初からその友人の場所がわかっているらしく、迷う事無く廊下を歩いて行った。

その間アリサは先程のすずかの表情について悶々と考えていた。

（まさか、すずか……）

アリサとすずかは小学生一年生の頃からの友人だ。それ故に彼女の

事は大体分かる。なので先程のすずかの表情には少なからず驚いていた。何せ今までそんなすずかの表情を一度も見たことが無いからだ。

「アリサちゃん…？」

はっと我に返るとすずかがこちらを向いて怪訝そうにアリサを見ていた。

「ごめんごめん。でどうしたの？」

「えっと…もう着いたから…」

アリサは今自分が立っている所を見渡すと、一つのドアの前に立っていた。

すずかはドアに近づくと、ドアをコンコンとノックした。

『……………』

しかし、中から返事は無く、すずかもそれが分かっていたのか、そのままドアを開けた。
中は書庫でかなりの本が置いてあった。

「あれ、すずかの家って書庫なんてあったっけ？」

アリサがすずかに聞くと、

「うん。ちよっと前に出来てね。色々な本が置いてあるよ」

「へえー」

アリサが感心したように呟いた。

少し歩いていると、大量の本が山のように積まれていた場所があった。

「あついたいた。零君！」

「え、ここ？」

アリサが指さした場所は本しか見えず、人がいる気配が無い。

「大丈夫。ここにいると思うよ」

そう言うはずかは本の山を崩しにかかった。

「アリサちゃん。悪いんだけどちょっと手伝ってくれる？」

「はあ！？……もう、わかったわよ」

仕方なくアリサも本の山を崩しにかかった。

「はあはあ……」

数分後、何とか目の前の本の山を崩し——まだまだ残っている本の山はあるが——その中にいた者を見て、アリサは声を失った。

中にいたのは自分と同じくらいの年頃の少年だった。

髪の色は煌めく銀色で、本を抱いてすうすうと寝息を立てながら眠っていた。顔は少年にしてはかわいいくて、遠目から見たら少女と間違えてしまうかも知れない程だった。

「零君……零君起きて」

すずかが少年——零に近づき、ゆさゆさと体を揺すった。

「うゝん」

しかし、少年は起きるところか寝返りを打って、こちらから体を背けてしまった。

「どうしよう」

すずかが困った風に言う。そんなすずかを見て、アリサはじれったくなり、アリサはずかずかと零に近づき、耳もとで大声で怒鳴った。

「こら！すずかが起きろって言っているんだからさっさと起きなさい！」

あまりの音量に近くにいたすずかも耳をふさいだほどだ。

そして、零もようやく起きたらしくゆっくりとこちらに体を向けた。

「……」

こんな起こされた方をした事が無かったのか、目をぱちくりとしながらアリサを見つめていた。

「うっ……」

零のような綺麗な顔に見つめられると少々恥ずかしくなり、そしてふと気がついた。

（この子……目が）

零の目は金と銀のオッドアイだった。

「……誰だい君は？」

ようやく頭が回転し始めたのか、零は体を起こし、少々不機嫌そうに言った。

「そう言うあんたは誰よ！ 人に名前を聞くときは自分から名乗りなさい！」

睨み合う二人の間ですずかはどうかおろおろしていた。
先に根負けしたのは零だった。アリサから視線を外すため息をつきながら名乗った。

「零……夢埜零」

視線をアリサに戻すと君は？ といった風に視線を投げかける。それに答えて、アリサも名乗った。

「アリサ、アリサ・バニングスよ」

これが夢埜零と当時十歳のアリサ・バニングスの出会いだった。

後にアリサは語った。この出会いは最悪だったけど、同時に最高の出会いだった。

「はあ」

すずかの家を後にしたアリサは一人町をぶらついていた。あの後、お茶会で色々話し、零に急用が出来たらしく、ちょうど時間帯も良くアリサは一人で町に向かった。

「たく……何なのよあいつ……」

アリサは先ほど迄話していた少年の事を思い出していた。

あの少年とは毒舌しか言い合っていなかった気がする。出会いからして少年の不興を買ってしまったのだろう。すずかもどうして良いかわからず、何とかフォローしようとしていたが全て無駄になってしまった。

「まあ、これから仲良くしようかな」

そう新たに決意した矢先、

ドカアアアアン！！

「キャア！？」

突如、近くのビルが爆発し、アリサはしゃがみ込み悲鳴を上げてしまった。

「なっ何……？」

よろよろと立ち上がりアリサは当たりを見渡した。

辺りは悲鳴を上げながら逃げ惑う人々がいた。

「ヒヤッハハアアア！！」

燃えさかるビルの中から猟犬の記憶を宿した怪物——ハウンド・ド
ーパントが現れた。

「な……何よあれ……」

思わずあとざすりしたアリサ。すると、近くから聞き覚えがある声
が聞こえてきた。

「零君あれ……!」

「おそらく、猟犬の記憶のガイアメモリだろうね」

声が出た方向を見ると、眼鏡を掛けている零と、大きなトランクケ
ースを持っているすずかがいた。

「まあいいや、さっさと倒そう」

そう言うと零は懐からなにやら赤いバックルみたいなものを取りだし、
腰に巻き付けた。そしてなにやら白いUSBメモリらしき物を取り
だし、スイッチを押した。

『ETERNAL』

「変身」

そう言うと、メモリを腰のバックルに挿入し、そのまま展開した。

『ETERNAL』

そう音声がすると、零の体を白い欠片が覆っていき、赤い波動と共

に白い戦士——仮面ライダーエターナルレッドフレアが出現した。

「さあ、始めよう」

そう言うときエターナルはハウンド・ドーパントに駆け寄り、右拳に赤い波動を纏わせ、背中に思いっきり打ち込んだ。

「ぐあああ!？」

その衝撃に地面を転がるハウンド・ドーパント。素早く立ち上がりエターナルの方を向いた。

「てめえ……何なんだ？」

「名乗る必要は無い」

そう言うときエターナルはハウンド・ドーパントに殴りかかり始めた。しかし、

「なめんなよ!」

そう言うときハウンド・ドーパントはアオオウンと声を挙げた。

「何だ!？」

さすがのエターナルも足を止めた。ハウンド・ドーパントの体を注視しているとハウンド・ドーパントの体から徐々に無数の猟犬が出てき始めた。

「なっ!？」

「くっくくく……やっちまえ!!」

ハウンド・ドーパントがそう言うのと、無数の獵犬がエターナルに襲いかかってきた。

「く……そ……！」

エターナルは群がってくる獵犬たちを何とか倒していくが足などにかみついてきて身動きが取れない状況である。

「零君！」

すずかが大きな声を挙げた。すると、ハウンド・ドーパントがその声に気づきすずかに近づいて来た。

「なんだあガキ」

ゆっくりとその名の通り獵犬のようにじりじりとすずかに近づいて来た。

「あっ……」

すずかは思わず後ざすりするが、恐怖のあまりその場で固まってしまった。

「何してんのよ！」

アリサがすずかに近づきすずかの空いている手を取った。

「アリサちゃん！？」

「何やっているのよすずか！早く逃げるわよ！」

アリサがすずかを連れ走り出した。しかし、

「逃がすかよ!!」

ハウンド・ドーパントは口からエネルギー弾をアリサ達に打ち出した。

『きゃあああ!?!』

幸い二人には当たらなかったが、その余波で二人とも吹き飛んでしまった。

「いっつ……」

アリサよろよろと何とか立ち上がった。

「すずか! 大丈夫!?!」

直ぐに親友の元に駆け寄り無事かどうか確認した。

「大丈夫だよ……痛!」

すずかも何とか立ち上がろうとしたが、足首をひねったらしく再びしゃがみ込んだ。

「……何で」

「あん?」

「何でこんな事するのよ!?!」

アリサが烈火の如く怒り、ハウンド・ドーパントに怒鳴る。

「はっ！そんな楽しいからに決まっているだろう？」

ハウンド・ドーパントの嘲笑にアリサの怒りは頂点に達した。

「！ふざけんじゃ無いわよ！！もう怒った！あんたはあたしがぶっ潰す！」

そのアリサの声に反応するかのようにすずかの近くに置いてあるアタッシュケースから赤い光が溢れ出した。

「まさか……」

すずかはこの光に心当たりがあるらしく、すぐさまアタッシュケースを開た。

中ではHと書かれた赤いメモリが光を放っていた。

「アリサちゃん！」

「へ？」

すずかはそのメモリと零のと同じ赤いバックルをアリサに投げつけた。

「おっとっと」

アリサはそれを危なげにキャッチした。

「これって……」

「アリサちゃん！さっき零君のしてたこと見てた！？」

「えっ、うん見てたけど……」

「じゃあ、同じ事して！それでアリサちゃんにも戦う力が手に入るから！」

その言葉にアリサは素早く反応し、先ほどの零と同じように腰に巻き付け、メモリを起動させた。

『H E A T』

「変……身！」

アリサはバックルにメモリを挿入し、展開した。

『H E A T』

アリサの体を火が覆い、弾け飛ぶと、そこには赤い体を持つ赤き戦士が立っていた。

「てめえは……！」

「さあ、ぼこぼこにしてあげるわ」

新たに誕生した仮面ライダーヒートは仮面のしたで不敵に笑った。

「すごいなあ」

「すごかったね」

零とすずかは月村邸でのんびりとお茶を飲んでいた。

あの後、アリサは初めての実戦なのに、ヒートの力を十二分に発揮、宣言通りハウンド・ドーパントをぼこぼこにした。

「あまつさえ手伝うとかいうしなあ」

戦いが終わった後、やむを得ず事情を説明したら、

「良いわ手伝ってあげる！」

と、押し切られ、アリサも巻き込む形になった。

「けどまあ」

零はティーカップをテーブルに置くとクスリと微笑した。

「中々おもしろいよ、アーちゃん」

くしゅんとバニングス邸でくしゃみをする少女がいた。

ビギンズナイト3（後書き）

いかがでしょうか？感想とか待っています。

最近ダイスオーにはまり始めました。中々おもしろいです

EPISODE 20 (前書き)

皆様にお知らせがあります。

前回投稿したビギンズナイト3ですが、正直自分でもすごく酷い文章と思うので新しく書き直したいと思います。

なので新しいのが出来たら今あるのを消し、新しいのを投稿します

EPISODE 20

「ふ〜んふ〜ん」

ミッドチルダ首都グラナガン。そのビル群の中で零は一人で鼻歌を歌いながら歩いてた。

「さてさて、なーちゃんとティアナはちゃんと話できているかな？」

あの後、再びぎゃーぎゃー言い合い始めた二人を置いて、零はすずかに終わったら、連絡をくれるように言って、一人首都に出たのである。その際、他の関係者——特にアリサから——に捕まりそうになったが素早く逃げ、今の状態である。

「こうでもないしないと一人で歩けないからね……」

零は常に”エデン”に狙われているため、外に出歩くときは絶対に誰か付き添いで——基本はさすがに——出歩かないといけないので殆ど一人で外を歩いたことが無いのだ。

「全くみんな……僕を何だと思っているんだろう？」

以前、一人でも出歩けると言ったのだが、全員こぞって駄目と言われていじけてしまった零であった。

「さてと……遊ぶか」

そう言うと、零は歩き出した。自分を監視している目に気づきながらも気づかない振りをして。

「どう……零でた？」

機動六課の部隊長室でアリサは不安げにすずかに聞いてきた。

「駄目……でない」

すずかは通信端末を閉じてアリサに言った。

あの後、なのはとティアナが取っ組み合いの喧嘩を始め何とか止めようとしたが、途中で零が逃げようとしていて、慌てて捕まえようとしたのだが、後もう少しの所で逃げられて現在行方をくらませたのだ。

「零君多分、端末の電源切っているからGPSもキャッチ出来ないと思う」

「ああもう！あいつどこ行っただのよ！」

既にネバールが車を使って零が行く可能性がある場所を風潰しに探し回っているが未だに成果が無い。

そんな中、必死な二人を見てはやてはおずおずと言った。

「なあ、二人とも何をそんなに慌てているや？」

正直な所はやてはすずか達がそんなに慌てている理由がわからない。確かに零が“エデン”に狙われていることは知っている。しかし、零は実力は折り紙付きで管理局の高ランク魔導士ともタメをはれるとはやては思う。

それに今までも“エデン”の刺客を全て返り討ちにしていることか

ら、そんなに心配することは無いと思うのだが、

「何言っているのはやて！あいつを外に一人で出歩かせるなんて！
中学時代を思い出してみなさい」

中学時代……

そう言われてはやては中学時代を思い出した。

「……ああ」

そして同時にアリサとすずかの懸念がひどく納得出来てしまった。
何というか零は自分の興味があることを見つけるとそちらの方にふ
らふらと向かってしまうのだ。

もっともその度にクラスの人間全員で搜索するのだが、いつもすず
かが見つけて連れて帰ってくるのだが。

「おまけにあいつ、ミッドチルダこっちに来てから初めて一人で外を出歩いたと
き三日迷子になったわ」

「みっ……三日!？」

「当時はまだ私とアリサしかいなかったから探すのは本当に苦労し
たわ」

なにやら遠い目をしているアリサに同情しつつ、はやてはすずかに
聞いた。

「端末も切っているっちゅうことはどうやって探すんや？いくら何
でもネバールさん一人で探すのは無理があると思うで？」

そう言われてすずかは目を閉じ、人差し指を唇に当てて、うーんと

考え始めた。

しばらくそうしていたら突如すずかがはっと顔を上げた。

「もしかしたら……」

「えっ？」

「零君あそこにいるかもしれない」

「あそこ……？」

はやてが首を傾げて聞いてきた。その後ろでアリサも不思議そうにすずかを見ていた。

「うん多分零君……ミッドタワーの近くにいると思う」

「へー中々でかいね」

零はミッドタワーの直ぐ近くでミッドタワーを見上げていた。もつとも、ミッドタワー自体はまだ完成しておらず、まだまだ建築しているのだが。

「さてと……」

零は近くの公共の椅子に座ると声を掛けた。

「ねえ、いつまで尾けているの？」

「……気づいて……いたか」

そうか細い変声機の何かを使っているのか中性的な声が聞こえて、自分の後ろに誰か座った。

「その独特の口調……処刑人？」
アサシン
「処刑人……？」

アサシン
処刑人の疑問気な声に零はああと言った。

アサシン
「処刑人ってのは僕たちが付けた名前。君の名前は？」
「……ゼロ」
「ゼロね……」

それから零とゼロは暫しそのままの状態で黙っていた。やがて零が口火を切った。

「ねえ……」
「……何……だ？」
「どうして僕が外を出歩くたびに僕を尾けているの？」

そう零が外を出歩くたびにずっと誰かに尾けられているのだ。最初は直ぐに捕まえようとしたのだが、視線の中に含まれている感情を感じ、しばらく様子を見ることにしたのだ。昔から零は他者の視線に敏感で、どのような感情が含まれているのか簡単に分かる。

「君の視線から感じたのは興味とか好奇心とかだった。殺気とか敵意は全く感じなかった」

だからこそ零はずっと放置した。すずか達にも言わずに。もつともヴェントやネバールなら気づいていたかも知れないが。

「私は……お前に……興味……がある」

「僕に？それは地球ほしの子として？」

「違う……私は……お前……そのものに……興味が……ある」
「はっ？」

思わず間拔けな声を出してしまう零。そんなに零に構わずゼロは話を進める。

「お前を……見ていると……何か……心に……引っ掛かるだ……私は……それを……知りたい」

そんなゼロの言葉に零は呆氣にとられた。

何だこの子は？そんな理由で自分を尾けていたのか？

しかし、零自身もその感情に身に覚えがあるので、何とも言えない。

「僕も……僕も君が近くにいると何かを感じる。とても大事な事を……思い出さないといけない大事な事を」

「そう……か……」

それからしばらく無言のまま時間がゆっくりと過ぎていった。

「さて……」

そう言うとき零の後ろでゼロが立つ気配がした。そして、

「はっ！」

いつの間にかドーパントに変身しており漆黒の剣を振りかぶった。

「いやいや、いきなり危ないね……」

既にその場に零はおらず、ゼロの後ろにおり、ゼロの剣は宙を切っただけだった。

「君は答えを知りたいんじゃないのかな？」

口調は穏やかだが、零は既に腰にロストドライバーを巻いており、エターナルメモリを手を持っていた。

「確かに……私は……答えを知りたい……しかし……仕事と……プライバシーは……一緒に……しない……主義だ」

「あっそう」

ゼロの答えに少々げんなりとした零は気を取り直してエターナルメモリのスイッチを押した。

『ETERNAL』

「変身」

そう言うとき零はエターナルメモリをロストドライバーに挿入、右側に展開した。

『ETERNAL』

そう音声が発すると零の体は白い欠片に覆われていき、最後に青い波動が放たれ、零は仮面ライダーエターナルに変身を完了した。

「それじゃ」

「……………」

エターナルはエターナルエッジをゼロは剣を構え、じりじりとお互いににじり寄りながら隙を伺っていた。

『！』

そして同時に動き出し、お互いの得物を繰り出した。

ガキイイイン！

金属同士が擦り合うような音と共に二人は自分の得物を押しつけ合うように鏝迫り合いをした。しかし、

「っ……」

「ふ……」

やはり前回と同じように徐々にゼロに押され始めるエターナル。

「ええい！」

「っ！」

エターナルはやけくそ気味に叫び、ゼロの腹に思いっきり蹴りをぶちかました。

両手で剣を握っていたゼロはそれを受け止められなくて、後ろに吹き飛んだ。

（やはり、根本的に僕とゼロの得物では無理があるか……ならばあれをやるか？）

「どう……する？……このままだと……前回の……二の舞……だぞ

「？」

どこかエターナルをバカにしたような口調にエターナルは少しカチンと来て、言い返した。

「さて、どうかな？ そんな風に見ていると痛い目見るよ？」

「なら……気を……つけよう」

クスクスと笑うゼロにエターナルは奥の手の一つを使うことにした。エターナルは新たなメモリを一本取り出した。そのメモリは”X”と書かれた黒いメモリで、エターナルはそのメモリのスイッチを押した。

『X T R E M E』

「……？」

エターナルは無言でドライバーを元に戻し、エターナルメモリを抜き、エクストリームメモリを挿入し、展開した。

『X T R E M E』

するとエターナルの体が無数の数字や記号に包まれていき、やがてそれが辺り一面に飛び散りエターナルは新たな姿を晒した。

全体的にはさほど変わっていなかったが、黒いローブはそのままで、腕の青い炎のは青いクリスタル状になり、アングルはX状に変化し、体の中心部分にはクリスタルサーバが出現した。

「それは……」

ゼロも驚きを隠せないようだった。

「エターナル……エクストリーム」

これぞエターナルメモリをエクストリームメモリで極限まで力を増幅させた姿。仮面ライダーエターナルエクストリーム。

「エターナルブレード、エクストリームブレード」

そうエターナルエクストリームが呟くと、エターナルエクストリームの前に青い炎が出現し、さらにクリスタルサーバが光り始めた。

「ふっ！」

エターナルエクストリームは右手を青い炎の中に入れると、一本の剣を取りだし、さらにクリスタルサーバから出現した同じ形をした剣を取り出した。

それらの剣はエターナルエッジの刀身を長くした物で他はさほど変わらない。

「これで前回の二の舞にはならないよ？」

「くす……」

「はあああ！」

「っ……！」

先ほどとは違いエターナルの優勢だった。武器の差が無くなり、さ

らにエクストリームメモリで強化されたエターナルにゼロは防戦一方だった。

「はっ！」

「くっ……！」

エターナルブレードによる横からの斬撃をゼロは剣で防いだが、

「甘い！」

すぐさま左手のエクストリームブレードで斬り掛かってきた。

「ぐあ……！」

ゼロはその衝撃で、後ろに転がり込んでしまう。

「今度こそ終わりだ！」

そう言うとエターナルはエクストリームメモリをエクストリームブレードのマキシマムスロットに挿入した。

『X T R E M E M A X I M U M D R I V E』

マキシマムスロットに挿入すると、エクストリームブレードの刀身が白く輝き始めた。

そして、エクストリームブレードを上空に放ち、エターナルメモリを取りだした。しかし、

ヒュン！

「!!」

突如、エターナル目掛けて飛んできた複数の火の玉に驚き、慌てて回避しようとしたが、数発エターナルに当たってしまった。

「うわ!」

その衝撃で後ろに吹き飛んでしまったエターナル。慌てて体勢を立て直し、前を見ると、既にそこにはゼロはおらず、エクストリームブレードが地面に突き刺さっていた。

「ああもう!」

ゼロを倒すチャンス逃したエターナルは地面に拳を叩きつけて悔しさを露わにした。

そしてそのまま立ち上がり、変身を解除した。

「くそ……一体誰だ……?」

おそらくは”エデン”の者だろうが、エターナルエクストリームにあれほど攻撃を浴びせられたのだから、幹部の人間だと思われる。

「はあ……ん?」

零がため息をつくとき懐から何か振動が伝わってきて零はそれを取り出した。

「おや……珍しい」

それは普段零が使っている通信端末では無く、別の端末だった。零はそれのスイッチを入れると耳に当てた。

「もしもし……うん久しぶり。ちゃんとご飯食べている？……そうなら良いけど………そうか、えっ？レジアスが？………成る程、レジアスがそろそろ本格的に動き出すか………あまりこちらとしては事を荒立てたくないんだけど………大丈夫、僕達みんな元気だから。もうすぐ会えると思うからそれまで我慢ね？………うん聞き分けが良い子は好きだよ………それじゃまたね”アイリス”」

そう言うと、零は通信端末を切り、即座に通信履歴を完全に消去した。

「さて……これから忙しくなりそうだ」

零は建設途中のミッドタワーを見ながらそう呟いた。

EPISODE 20 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待っています。
ぶっちゃけエターナルエクストリームは何となく出来ました。

EPISODE 2 1 (前書き)

今日は大学の学祭の為休みでかなり書けました。

今回はティアナとなのはの仲直りです。
もっともあっさりですが・・

EPISODE 1

ミッドタワーの工事現場近くの空き地で零は目の前の涙目のすずかに対して土下座をしていた。

傍らには呆れているアリサに、無表情だが内心笑い転げているネバールが側にいた。

そもそもこんな状況になったのは数十分前に遡る。

「零君！」

通信を終え、ミッドタワーを見上げていた零に誰かが声をかけてきた。

後ろを振り向くと、そこには必死な表情でこちらを走ってくるすずかとその後ろを必死に追いかけているアリサがいた。

「やあすーちゃ、もろつぶ!？」

手を挙げて挨拶しようとした零だが、猛ダッシュで走ってきたすずかがそのまま勢い良く

零の頬を思いっきり殴り、零は奇声を上げなら後ろに吹っ飛んだ。

その光景に後ろから走ってきたアリサも車の鍵を閉めてこちらを振り向いたネバールも僅かに驚いていた。

「いたたた何するんだいすー……ちゃん」

体を起こし、すずかに抗議しようとする零だが、すずかを見て言葉を失った。

すずかが目尻に涙を溜めていたからだ。

「えっと……すーちゃん？」

しもどろしながらかすずかに声を掛ける零。

「……したんだから」

「えっ？」

「心配したんだから。連絡しても出ないし、探しても見つからない。もしかしたら”エデン”に捕まったんじゃないんじゃないかと思つて私……」

そう言うのと、すずかは顔を伏せてしまい、表情は伺えない。しかし、長年すずかと付き合ってきた零には分かる。

すずかは泣いている確実に。

気がつくと、自分を射貫く視線が二つあることに零は気がついた。その方向を見るとその視線の正体はアリサとネバルだった。

二人は、本気で怒っている顔と、無表情の顔だったが、あの視線は同じ感情を示している。

（（泣かした……））

その視線に零は普段半分しか使わない頭脳をフル活動させる。

（どうするどうするどうする！？「悪かった」？違う！「これが僕なんだ」？これも違う！「まあまあ落ち着いて」？これも違う！つてギャルゲーの選択肢か！）

悩みに悩み抜いた結果零が取った行動は……

「すみませんでしたー!」

土下座だった。

そして冒頭に戻る。

「もう……一人で外に出歩かない?」

「はい! 絶対に!」

「ちゃんと出かけるときは私に言う?」

「はい! 必ずや!」

「……約束する?」

顔を上げてすずかと言った。もう泣いてはいなかったが目尻に涙が残っていた。

その顔を見て零は真剣な表情をして言った。

「……約束するよ」

そう言うとしずかは笑顔になった。

「うん! 許してあげる!」

すずかが笑顔になって零もつられて笑った。

(あれ、もしかして僕、すーちゃんに生活の一端を完全に握られた?)

なんかかんやで零以上に腹黒いすずかだった。

その後、ネバールの車に乗り機動六課に戻ることになった零達。

機動六課に着き、なのはとティアナの喧嘩がどうなったのか見に行く為、部隊長室に向かう四人。そしていざ部隊長室に入った四人が見た物は、

「わお……」

「あ、あはははは」

「はあゝ」

「……………」

四人がそれぞれの表情を浮かべた。零は少し驚き、すずかは無理をして笑い、アリスはため息をつき、ネ

バールは無表情だった。

四人が入った部隊長室はまさに混沌という言葉がふさわしい状態だった。

地面に倒れ伏せているなのはとティアナ。その間でおろおろしているフェイト。椅子に座り、頭を痛そうに抱えているはやて。

「ネバールさんー！」

声がした方向を見ると、涙目のリインがネバールに駆け寄ってきた。

「……………何があった？」

ネバールがリインを抱えて聞いてきた。

「じ、実は……」

リン曰く、あの後しばらく言い争いをしていたのはティアナだったが、遂には殴り合いの喧嘩にまで発展し、それをフェイトやはやても止めようとしたが、『二人は黙って!』と同時に言われ、引き下がってしまった。

そしてしばらく殴り合いを続け最後は同時に右ストレートを相手の頬にぶち込んで倒れ込んでしまった。

そして今に至る。

「なるほどね……」

そう言いながら零は部屋を見渡した。

部屋はもう台風が過ぎ去ったような感じで、書類も辺りに散乱しているし、どこから手を付けて良いのか分からない状況だった。

「……ティアナ」

小さい声が聞こえてきて、下を向くと倒れているのがティアナの名前を呼んだ。

「……何です?」

対するティアナも倒れたまま聞いてきた。

「その……ゴメン」

なのはの謝罪にしばらくティアナは黙っていたが、やがて口を開いた。

「私の方こそ……すみませんでした」

「ううん……ティアナの夢分かっているつもりだったのに……その夢を叶えるために私は全然ティアナを教導出来ていなかったんだと思う……だからこそ、ゴメンねティアナ」

そう言う二人はゆっくりと握手した。

このとき、二人の絆は元の戻ったのだ。

「うんうん仲直りして良かったな、じゃ僕はこれで」

なのはとティアナが仲直りする姿を見て、零は満足そうに部屋を出ようとするが、

「ちょい待ち」

はやてに肩をがしっと掴まれた。

「……何さはーちゃん」

「零君ーうちらまだ零君に説明されて貰ってない事とかあるで？」

「えー何だっけ？」

白々しくしらを切る零。

「とぼけんなや。T2ガイアメモリの事きっちり聞かせて貰うで」

はやての有無言わせない言葉に零はため息をついて、両手を挙げて降参の意図を示した。

「分かったよ。ちゃんと全部説明するよ全部」

所変わってブリーフィングルーム。そこには機動六課隊長陣、副隊長陣、フォワード陣、ロングアーチのメンバーも揃っていた。

「さて、何から聞きたい？」

「まずT2ガイアメモリからや」

はやて言う。見ると他のメンバーもそれが一番聞きたいらしい。

「はあ……分かったよ」

そう言うのと、零はエターナルメモリをテーブルに置いた。

「これが僕たちが使うT2ガイアメモリ正式名称タイプツーガイアメモリ。通常のメモリをさらに進化させた次世代のメモリだ」

「次世代の？」

「そう。T2ガイアメモリは全部でAからZまで二十六本ある。それぞれが強力な力を持つメモリ達だ」

「成る程……でも何でティアナの所にT2ガイアメモリの一個が来たんや？」

そうはやてが言うと、零は少し言いにくそうに言った。

「実は……T2ガイアメモリは自身の適合者を感じ取った場合、その適合者の元にメモリ自らが行ってしまうんだ」

「メモリ自身が!？」

フェイトが信じられないように声を上げる。

「うん……だからたま〜にメモリが勝手に外に出て適合者と会っちゃうなんてこともあるんだ」

「たまに……と言うよりは既に六回程起きているが……」

ネバールがぼつりと言った。

「ちょ、六回って……!」

「大丈夫大丈夫。即急行、即回収をモットーにT2ガイアメモリを回収しているからさ」

零の笑みにはやては渋々引き下がった。

「まあ、その影響でティアナがトリガーメモリに出会ったんだよね……」

「成る程な……と言うより何で零君はそんなメモリを持っているんや?」

はやての疑問は当然だろう。それほどの強力なメモリ達を何故零個人が所持しているのか。機動六課のメンバーは全員零の方を見た。

零はしばらく間を開けると、人差し指を口に当て、

「企業秘密」

とだけ言った。

その言葉にすずかは少しだけ表情に影を落とした。

とある薄暗い地下室。その一角にゼロは鎖につながれていた。体はぼろぼろになっており、顔から生気が殆ど感じれてなかった。

ギイイイイ

地下室のドアが開く音が聞こえゼロはそちらの方に視線だけ向けると、ドーパント態のカルマが入ってきた。

「どうです、少しは反省しましたか？」

あの時、エターナルに火炎弾を放ったのはカルマだった。

あのままだと確実にゼロはエターナルに負けていた。正直な所カルマにとってゼロはそこまで必要な存在では無い。精々裏切り者の始末に役に立つ事と、能力の高さだ。

しかし、それでもまだ”計画”がまだ半分の段階でゼロを失うわけにはいかないのでこうして助けた訳だが、現在はゼロに罰を与えているところだ。

「困るんですよ勝手な真似をされると。現在はDr. スカリエッティとも契約を結び、計画もまだ半分ほどしか進んでいない。そのような状況で地球の子と接触されると」

カルマの淡々とした言葉をゼロは殆ど聞き流していた。しかし、どうしても聞きたいことがあるのでカルマの方に視線を向けた。

「……一つ……教えろ」

「……何ですか？」

「何故……組織は……そこまで……あいつを……手に入れたがる……?」

ゼロの質問にカルマはしばらく沈黙していた。やがて言葉を選びながら言った。

「それは、あなたが考えることはありません。あなたは唯組織に忠実な駒であれば良いんですよ」

そう言うとカルマはゼロの鎖を外して部屋を出た。

しばらくそのまま横たわっていたゼロだが、やがて起き上がると、自分の手を見つめた。

「誰なんだ……夢埜零……お前は……誰なんだ?」

その時、ゼロの頭に映像が流れ込んできた。

「これは……!?!」

『こんな所にいたんだ』

生い茂る森の中、一人の少女が一本の木の下で泣いていた。

着ていたワンピースはぼろぼろで、顔も泥とか涙でぐちゃぐちゃだ。足も擦り傷でいっぱい。の所を見ると何度も転んだ事が目に浮かぶ。そんな中一人の少年が少女に駆け寄った。少年はずっと少女を捜しており、今ようやく見つけたのだ。

『だから一人で森に入っちゃ駄目だよって言ったんだよ?』

『ごめんなさい……』

少年は少女の手を引きながら自分達の家に向かって歩き始めた。

『随分暗くなったね。早く帰らないと父様も母様も心配するだろうし』

『……』

少年と少女はしばらく歩いていると少年が再び口を開いた。

『しかし、は良く迷子になるね』

『……ごめんなさい』

『ああ、怒ったわけじゃ無いんだ。なんだかね　を見つけるのはいつも僕だなあと考えてさ』

少年の笑みに少女も少し笑みを浮かべた。

『ねえ　』

『ん?何』

『もしかた私が迷子になったらまた探してくれる?』

少女の言葉に一瞬虚を突かれたような顔をしたが、少年は直ぐに笑みを浮かべて少女の方を向いた。

『良いよ。　がまた迷子になったら僕が見つけてあげる』

『ホント?』

『うん。本当さ』

『約束だよ』

『うん、約束』

指切りをして、二人は笑っていた。本当に楽しそうに。

「何だ……今のは」

自身の頭の中に流れ込んできた映像にゼロは戸惑った。

「私の……記憶……？ 違う……私には……こんな……記憶は……無い」

ゼロは頭を抱え込みうずくまった。その様子はまるで何かに怯える子供のようだ。

「何なんだ……これは……私は……何なんだ？」

ゼロは一人でいつまでも薄暗い地下室で自問自答をしていた。

「どうかね？ あの子の状態は」

ある部屋の一室でローバンがカルマから報告を受けていた。

「はい。記憶が途切れ途切れではありますが戻りつつあります」

カルマは紅茶を飲みながら言った。

「そう……そろそろあの子も使い物にならないかしら？」

そう言うのはソファにゆったりと座っているドレスを着た女性だった。

「けどよ、まだあれは必要だろ？ まだまだ計画には必要なんだから
そう言うのはカムイだった。

「それはそうだけでも、その計画に邪魔になったらしょうがないじゃない」

「いやいや、ミルナさん。けどよ……」

「ストップだ二人とも」

二人の言葉をローバンが遮った。

「ふむ、カルマ君」

「はい」

「あの子の記憶はいつまで封じられるかな？」

「持ってDr. スカリエッティの”祭り”の日ら辺が限界かと……」

「そうか……」

ローバンは目をつむりじつくりと考え始めた。その間他の三人の幹部はそれを見守っていた。

やがて考えが纏まったのか、ローバンは目を開けた。

「よろしい。ならばあの子は現状のまま、早急に零の捕縛を急がせろ」

「はっ」

「分かりましたお父様」

「了解です」

そう言うのと幹部達は部屋から出て行った。そして一人ローバンが部屋に残った。

「零……逃げ切れると思うか？」

EPISODE 1 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待っています。
早く冬の映画見たいな

EPISODE 2 (前書き)

今回はティアナ辺の後始末って感じです

このサイトでTPPがとても騒がれています。

二次元が書けなくなるのは嫌ですね

EPISODE 2

「そうか。ティアナは六課に戻ったか」

Re-C? DE本部の零の自室で零はヴェントに事の顛末を話していた。

「寂しいかな？」

「バカを言うな。何故俺が寂しがる？」

零の茶化するような言葉にヴェントはフンと鼻を鳴らし酒を飲んだ。

「そうかな……あ、そうそうヴェント明日には六課に戻って貰うから」

「まあ、当然か」

元々ヴェントは六課に出向くメンバーだ。今回はティアナをRe-C? DE本部に連れてくる為に一時帰還したが、そろそろ戻らないといけない。

「しかし、あの時のティアナの泣き方はすごかったな……」

「そうだな……」

お互い暗い顔をして、あの日、ティアナが泣き叫んだ日を思い出した。

「ようこそRe-C? DE本部バルバルドへ」

そう言い、零はティアナを迎入れた。

「えっ、Re-C? DE本部!？」

「そ、そして僕がRe-C? DEリーダーの夢埜零よろしくね」

「はっはい……」

急に畏まりつつ、ティアナは進められたソファに座った。

「さてと、まずあのメモリについて説明しようか」

「あのメモリ？」

「そう。君が使ったメモリについてだ」

そう言うとき零はT2ガイアメモリについてティアナに説明し始めた。途中、ティアナは驚きながら最後はなにやら落ち込んだ顔になった。

「どうしたんだい？」

「私……そんな力を望んだんですね」

自嘲気味に言うティアナに横槍を入れる声があった。

「良いじゃ無いか」

「えっ？」

ティアナは驚いて声をした方向を向いた。そこには壁に背を預けているヴェントがいた。

「力を求める事は悪いことでは無い。唯今回は求め方を間違えただけだ」

ヴェントの言葉にティアナは少しだけ心が晴れた気がした。

そして再び零の方に顔を向けると零はどこか迷ったような顔をしていた。まるでこれから言うべき言葉を言うべきか否か。

「その……ティアナ・ランスター」

「良い零、俺が言う」

「ヴェント……けど」

「構わん」

その言葉に零は引き下がった。ヴェントの目を見て彼に任せようと思ったのだ。

「さて……お前には謝らないといけない事がある」

「謝らないといけない事……？」

「ディーダ・ランスターの事だ」

「っ！」

突然亡き兄について言われて動揺するティアナ。

「どうして……兄さんの事……」

「お前に話さないといけない……ディーダの最期を」

それからヴェントは語った。自分とディーダが心友ともだと言う事。ディーダの最期を看取ったの自分だと。自らサイクロンになった自分のビギンズナイトについて語った。

「これがお前の兄の死の真相だ……」

「そんな……」

ティアナは少なからずショックを受けていた。兄の死には謎が多く、

管理局も詳しく教えてくれなかったのだ。しかし、今ここに真実が明らかになった。

「あの時、僕はヴェントをR e - C ? D Eにスカウトするために色々な策を講じるつもりだったんだ。けどそこでドーパントが出たって聞いて、管理局に語りかけヴェント一人をドーパントと鉢合わせるつもりだったんだ」

しかしそこでバグが起きた。

「デューダ・ランスターがまさかドーパントがいる場所に入ってくるなんて思わなかったんだ」

そこからはデューダは魔法で対抗したがドーパントには一切効かず、逆に返り討ちに遭って致命傷を負ってしまった。

「あの時、僕はヴェントの事を見張っていたからドーパントの方に目がいかなかったんだ……すまない」

そう言うとき零はティアナに対して頭を下げた。

「そんな……別に」

兄の死は零の直接的な責任では無い。むしろドーパントを憎むべきだろう。

「それと……一番言わないといけない事がある」

そう言うときヴェントはティアナの近くに立った。

「何です……か？」

兄の死の真相以外にも何か伝える事があるのだろうか？

「ディーダの最期の言葉だ……」

「っ！」

兄の最期の言葉。何なのか。兄が最期に何を言い、何を残し死んでいったのか、それが分かる。

「言うぞ……」

「はい……」

自分でも声が震えているのが分かる。だけど聞かねばならない。

「ティアナ……ゴメン」

「っっっ！！」

堪えようとしていた涙が溢れてきてしまった。どんな言葉でも泣かないと思っていたのに、泣いてしまった。

ディ^兄ーダは最期までティ^妹アナの事を思っていたのだ。

「に……いさん」

涙が止まらない。今は止めようとは思わなかった。唯々涙を流していた。

「にい……さん」

遂にティアナは嗚咽をこぼし始めた。

零がすずかに目配せをし、その意図をくみ取ったすずかはティアナの元に近づいた。

そしてすずかがティアナの耳元で何か囁くとティアナは軽く頷き、そのまますずかはティアナとエミリオンを伴って部屋を出た。

『……………』

部屋には零とヴェントだけ残った。

「…………座りなよ」

しばらくお互い黙っていたが、やがて零はヴェントに座るように促した。

「…………ああ」

ヴェントはそれに素直に従い、ソファに座った。

「…………これで罪の一つを精算出来たかな？」

零の言葉にヴェントは零の顔をじろりと見た。

「…………お前のせいじゃない。唯、間が悪かったんだ」

「そんな言葉で済ましては駄目だよ。君の心友^{とも}なんだから」

零は普段、他人の死にそこまで過剰には反応しない。しかし、それが身内の関係者なら話は全く別だ。

零に取って身内は何者にも変えられない宝物だ。それを汚すような

真似をする者がいたならば絶対に零は許さないだろう。

「だからこそ……僕は自分が許せない。だからこそ、僕は三度と同じ過ちを繰り返さない」

その目に映るのは全てを守ると言う決意の目。

しかし、ヴェントにはその目が危うさがあると思った。この決意がいずれこの目の前の主を傷つけてしまうのでは無いのであろうか。

ならば、答えは簡単だ。守れば良い。自分が。

ここには目の前の主を守る騎士が五人いる。その力を合わせれば主をどんな災厄からも”エデン”からも守れるだろう。

「ん？どうしたのヴェント？」

「いや、何でも無い」

取りあえず今は自分の仕事をやろう。そうヴェントは思った。

「ふう……」

管理局地上本部の一室で地上本部実質トップのレジアス・ゲイズは深いため息をついていた。

「大丈夫ですか中将？」

そんなレジアスに声を掛けるのはレジアスの娘にして秘書であるオリリスが声を掛けた。

「ああ、心配いらん」

そう言いながらもレジアスは頭を痛そうに顔を顰めている。

現在、レジアスの頭には二つの頭痛の種がある。

一つは機動六課。地上本部に属していながら、本局や聖堂協会からバックアップを受けており、本局や聖堂協会を快く思わないレジアスにとっては邪魔な存在だった。

そしてもう一つどちらかと言えばこちらが一番レジアスの悩ませていた。

R e - C ? D E

現在一応管理局と協力関係になっているのだが、この組織は何を考えているのか全く分からない。

また、レジアスは偶にR e - C ? D Eメンバーであるヴェントとエミリオンと酒を飲み合う仲である。お互いに話が合い、良く夜遅く迄飲んでいたのである。

それは置いといて、R e - C ? D Eの目的がレジアスには未だにわからないのだ。

現在はある種の信用は置いているのだが、それでもやはり警戒心が心のどこかにあった。

しかし、ドーパントに対抗出来るのは彼らだけなので結局頼らざる終えないのだ。

そして、この組織のリーダー夢埜零。

レジアスの彼への評価は今まで会った人間でもっとも食えない存在だ。

数年前、突如として出現したドーパントに管理局の魔導士は全く歯が立たなかった。

そんな時にドーパントを難なく倒したのが、零達R e - C ? D Eなのだ。

彼らはその場はさっさと撤収し、行方をくらませたが後日、管理局の元に通信が来たのだ。

取引がしたいと彼らは言ってきた。

ガイアメモリの情報をほんの少し渡す代わりにドーパントが出現したらその情報渡し、R e - C ? D E がドーパントを倒す。

当初そう言う契約を提示してきたのだ。

当然管理局上層部はその契約を拒否、ガイアメモリの情報全てを差し出し、対抗出来る力を寄越せとR e - C ? D E に通達してきた。すると零はどこから入手してきたのか、反対意見を出した管理局上層部の人間に対してその者達の汚職や裏金、麻薬密売などの確固とした証拠を提示し、反対派の上層部を黙らせた。

その時レジアスは何も無かったためたまたまレジアスが交渉人選ばれたのだ。

しかし、レジアスは交渉する前からこの交渉は自分達の有利な方向に進まないと確信していた。

たった一人で次元世界最大の組織である管理局の上層部に対して有利に話を進められる者なのだ。

自分一人でどうにか出来る者では無いとレジアスは思った。

しかし、レジアスの予想とは裏腹に、交渉はそこそ良い方向に進んだ。

たまたま交渉の場で零がレジアスに何を思い、管理局に属しているのかを聞いてきたのだ。

レジアスはその時、自身の理想を何の偽りも無くさらけ出した。

すると、一瞬虚をつけたように目を見開いたが、次の瞬間零はクスクスと笑い始め、レジアスにこう言ったのだ。

『まさか、そんな理想を本当に言う人がまだ居るなんて、気に入ったよレジアス・ゲイズ。僕たちの管理局への窓口は君にしよう』

そこからとんとん拍子に話は進みお互い納得出来る条件になった。以来、二人は偶に通信で会話する仲にはなっていた。

「……中将、そろそろ定例会議の時間です」

考え事をしていたら秘書から声を掛けられて、頭を上げた。時計を見ると既に定例会議の時間が迫っていた。

「そうか……行くぞ」

「はい」

オーリスを伴い部屋を出て行こうとしたレジアス。しかし、部屋から出る瞬間、ふと部屋を振り返った。

「中将？」

オーリスが怪訝そうに自分の父親の顔を見る。

「どうしました？」

「いや……気のせいだろう」

そう言うレジアスは今度こそ部屋から出た。オーリスもそれになり部屋を出てドアを閉めた。

「……………驚きました」

誰もいないはずの部屋で一人の少女が突然姿を現した。

少女は髪をセミロングに伸ばし、服はフリルが使われているドレスで、明らかに管理局では場違いだった。

「しかし、困りましたね。先ほどの会話からはお兄様に差し上げるにふさわしい情報は何もありませんし」

頬に手を当てて、はあとため息をつく少女。少女の外見は十歳前後なのでその様子は年相応とは言えない。

「まあ、お兄様も急がないで良いとおっしゃっていましたが、地道に探し出しましょうか」

――管理局の闇を

そう言い、少女はうつすらと笑った。

その笑みは普通の少女が浮かべるような笑みではなく、見る者全員が背筋がぞくりとするような笑みだった。

「……………は！？いけないいけない。ポケットとしすぎましたか。早くここを出ないと……………」

少女は慌てたように動き出しそして、いつの間にかその部屋から姿を消した。

EPISODE 2 (後書き)

いかがでしょうか？感想とか待っています

次回からようやく新しい話に行きます（長かった）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6170t/>

永遠の悪魔と魔法少女達の物語

2011年11月17日18時50分発行